# 東アジア日本研究者協議会
# 第九回国際学術大会

East Asia Conference on Japanese Studies
9th International Academic Conference.

2025. 10. 31. FRI - 11. 2. SUN, Chuncheon, Korea

Conference Dates
2025. 10. 31. FRI - 11. 2. SUN

Venue
Hallym University(Chuncheon, Gangwon, South Korea)

Organizer
The Graduate School of Global Cooperation, Hallym University

Sponsors
Hallym University; Japan Foundation; Toshiba International Foundation;
Chuncheon City, Korea Tourism Organization

Contact Information
〒24252, 1 Hallymdaehak-ro, Chuncheon,
Gangwon Special Self-Governing Province, South Korea

日本研究の質的向上を図ること
地域的な枠組みにとらわれず、より多様な視点と立場から日本研究を推進すること
東アジアの安定と平和に寄与すること

翰林大学グローバル協力大学院　TOSHIBA　公益財団法人

# 東アジア日本研究者協議会 2025年国際学術大会 組織委員長 挨拶

東アジア各国および世界各地からお越しいただいた皆様、

ここ韓国·春川（チュンチョン）の地で開催される東アジア日本研究者協議会（EACJS）2025年国際学術大会にようこそお越しくださいました。心より歓迎申し上げます。春川は「湖と学問の街」として知られ、豊かな自然と温かな市民精神にあふれた都市です。そして翰林（ハンリム）大学は、「研究と社会貢献の好循環」を理念に掲げ、学問的探究と社会的実践の調和を目指してまいりました。この地で皆様をお迎えできることを大変光栄に思います。

本年は特に、韓日国交正常化60周年（1965-2025）という記念すべき節目の年にあたります。
この60年の歳月を通じて、両国は文化·学術·人的交流を重ね、相互理解と信頼を育んできました。本大会がその歩みを振り返りつつ、未来志向の協力と共存の新しい道を見出す契機となることを願っております。

本大会のテーマである「多層的変化の中の東アジア ― グローバルな挑戦の中の協力·競争·共存の未来」は、まさに現代の時代精神を映し出しています。気候変動、技術革新、地政学的対立、文化交流が複雑に絡み合う中で、東アジアは今、「協力」と「競争」という二つの軸の間で新たな均衡を模索すべき時を迎えています。学問はこのような変化を理解するための手段であると同時に、共存の知恵と持続可能な協力の道を示す羅針盤でもあります。本大会がその羅針盤を共に描く貴重な機会となることを心より期待しております。

最後に、本大会の開催にあたり多大なご尽力を賜りました全成坤（チョン·ソンゴン）教授（組織委員会事務局長）、および事務局の安正花（アン·ジョンファ）教授、諸葛在相（ジェガル·ジェサン）博士、柳叡率（リュ·イェソル）さんに深く感謝申し上げます。さらに、学会運営を円滑に支えてくださった The Pict（ザ·ピクト、代表 全昌大） チームの献身にも心より感謝いたします。皆様の情熱と協力により、本大会をこのように意義深く開催することができました。皆様の叡智と連携が、東アジアの協力的な未来を照らす灯火となることを願っております。

ありがとうございました。

**梁基雄（ヤン·ギウン）**
翰林大学 グローバル協力大学院 大学院長
東アジア日本研究者協議会 2025年国際学術大会 組織委員長

# 目次

## 1. 大会日程および全体プログラム

1）学術大会プログラム …… 7
2）学術大会発表会場 …… 13
3）学術大会発表テーマ …… 23

## 2. 発表概要

1）特別パネル …… 55
2）企画パネル …… 59
3）パネル …… 63
4）ラウンドテーブル …… 106
5）個人発表 …… 112
6）次世代発表 …… 150

東アジア日本研究者協議会第9回学術大会 | 概要

# 大会日程および全体プログラム

東アジア日本研究者協議会第9回学術大会

# 学術大会プログラム

# 学術大会プログラム

## <開会式及び基調講演>

場所: 国際会議室

[学会1日目] 10月 31日(金)

| 時間 | | 司会:俵木春美 |
|---|---|---|
| 13:30-14:00 | 開会式 | 梁基雄（翰林大学グローバル協力大学院長） |
| | 歓迎辞 | 崔陽熙（翰林大学総長） |
| | 祝辞 | 陸東翰（春川市長） |
| | 祝辞 | 佐藤百合（国際交流基金参与） |
| | 祝辞 | 山崎裕紀（東芝国際交流財団） |
| | 祝辞 | 徐興慶（東吳大学） |
| | 祝辞 | 曾秋桂（淡江大学） |
| | 祝辞 | 朴志煥（ソウル大学日本研究所長） |
| | 祝辞 | 宋浣範（高麗大学博物館長） |
| 14:00-14:20 | 記念写真撮影 & 休息 | |
| 14:20-14:30 | 基調講演の紹介 | |
| 14:30-15:20 | 基調講演 1 | 磯前順一（国際日本文化研究センター） |
| 15:20-15:30 | | 休息 |
| 15:30-16:20 | 基調講演 2 | 徐興慶（東吳大学） |
| 16:20-16:30 | | 休息 |
| 16:30-17:20 | 基調講演 3 | 南基正（ソウル大学日本研究所） |
| 17:20-17:30 | 閉会辞 | 梁基雄（翰林大学グローバル協力大学院長） |
| 17:30-19:00 | ウェルカムパーティ（参加登録者とご来賓のみ） | |

# 学術大会プログラム

＜個人発表・パネル発表・ラウンドテーブル＞

[学会 2 日目] 11月 01日(土)

| 時間 | 内容 | 場所 |
|---|---|---|
| 09:00-10:30 | 個人発表<br>パネル発表・ラウンドテーブル | 生命科学館・自然科学館 |
| 10:30-10:40 | 休息 | |
| 10:40-12:10 | 個人発表<br>パネル発表・ラウンドテーブル | 生命科学館・自然科学館 |
| 12:10-13:00 | 昼食 | |
| 13:00-14:30 | 個人発表<br>パネル発表・ラウンドテーブル | 生命科学館・自然科学館 |
| 14:30-14:40 | 休息 | |
| 14:40-16:10 | 個人発表<br>パネル発表・ラウンドテーブル | 生命科学館・自然科学館 |
| 16:10-16:20 | 休息 | |
| 16:20-17:50 | 個人発表<br>パネル発表・ラウンドテーブル | 生命科学館・自然科学館 |
| 18:30-20:00 | 晩餐会及び文化芸術公演観覧 | スカイコンベンションホール |

# 学術大会プログラム

## <次世代発表・総会及び閉会式>

**[学会 3 日目] 11月 02日(日)**

| 時間 | 内容 | 場所 |
|---|---|---|
| 09:00-10:30 | 次世代発表 | 生命科学館<br>自然科学館 |
| 10:30-10:40 | 休息 | |
| 10:40-12:10 | 次世代発表 | 生命科学館<br>自然科学館 |
| 12:10-13:30 | 昼食 | 翰林大学<br>CLCセンター |
| 13:30-14:00 | 第九回国際学術大会成果報告 | 自然科学館<br>7109 |
| 14:00-14:30 | 総会－東アジア日本研究者協議会の未来と展望<br>＊歴代開催国順<br>韓国　金孝眞（ソウル大学日本研究所教授）<br>韓国　南基正（ソウル大学日本研究所教授）ｵﾝﾗｲﾝ<br>韓国　朴志煥（ソウル大学日本研究所所長）<br>韓国　朴喆熙（前駐日韓国大使、元国立外交院院長）ｵﾝﾗｲﾝ<br>韓国　徐東周（ソウル大学日本研究所教授）<br>韓国　宋浣範（高麗大学高麗大博物館長）ｵﾝﾗｲﾝ<br>韓国　梁基雄（翰林大学グローバル協力大学院院長）<br>日本　松田利彦（国際日本文化研究センター副所長）<br>日本　友常勉（東京外国語大学教授）<br>日本　戦暁梅（国際日本文化研究センター教授）<br>日本　ガラシーノ・ファクンド（大阪大学、宇野田教授の代理）<br>中国　鄒燦（南開大学日本研究院）<br>台湾　徐興慶（東呉大学教授）<br>台湾　曹景恵（台湾大学教授）<br>台湾　曽秋桂（淡江大学教授）<br>台湾　許怡齡（中國文化大学教授） | 自然科学館<br>7109 |
| 14:30-14:40 | 次期開催機関の挨拶 | 自然科学館<br>7109 |
| 14:40-14:50 | 閉会 | 自然科学館<br>7109 |

# 学術大会発表会場

# 2025年11月01日(土) 午前 パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表 1

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 8109 |
|---|---|---|---|---|
| 09:00-10:30 | ① 東アジアの歴史認識問題 | ② 東アジアの思想交流 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題 |
| | パネル1<br>天皇制をめぐる差別の構造-国家権力と抵抗- | パネル3<br>東アジアにおける日本儒学の特質と受容-気論と陽明学を中心に | パネル4<br>戦後／冷戦期における知識人の越境的移動と文化的実践 | ラウンドテーブル 2<br>生成AI・音声認識・学習分析を活用した日本語教育の実践と評価 |
| | 座長: 李礼安(翰林大学)<br>討論: 朱坤容(SUN YAT-SEN UNIVERSITY)<br><br>山本昭宏(神戸市外国語大学)<br>李慶美(東北亜歴史財団)<br>呉座勇一(国際日本文化研究センター) | 座長: 徐興慶(東呉大学)<br><br>許怡齢(中国文化大学)<br>王俊彦(中国文化大学)<br>許怡齢(中国文化大学)<br>阮英俊(University of Social Sciences and Humanities ) | 討論:川崎賢子(Nihon University College of Art)<br><br>星野幸代(名古屋大学)<br>楊韜(仏教大学)<br>朱宇正(名古屋大学)<br>温秋穎(京都大学)) | 林俊成(東京外国語大学)<br>甘利実乃(東京外国語大学大学院)<br>孫彤(東京外国語大学大学院)<br>Chaoshen CHEN<br>(東京外国語大学大学院)<br>王睿琪(東京外国語大学)<br>李佳瑩(東京外国語大学大学院)<br>WANG CAIXUAN(東京外国語大学) |
| | 生命科学舘 8111 | 生命科学舘 8116 | 生命科学舘 8217 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑨ 日本研究と文化表現 | ① 東アジアの歴史認識問題 | ⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響 |
| | パネル7<br>宗教と漢字の視点から見る日本文化の深層 | パネル11<br>東アジアからみた日本美術-外来文化輸入の再検討- | パネル13<br>戦後東アジア分断国家における『祖国観』-沖縄・台湾・韓国の事例を中心に- | パネル16<br>現代児童文学に見る戦争の記憶と継承ー東アジア地域において児童文学は戦争をいかに描いているのか |
| | 討論: 松岡悠和(渥美国際交流財団)<br>賈海涛(渥美国際交流財団)<br>司会: 尹在彦(渥美国際交流財団)<br><br>磯部美紀(渥美国際交流財団)<br>陳希(渥美国際交流財団) | 座長: 武瀟瀟(渥美国際交流財団)<br>討論: 王雲(渥美国際交流財団)<br><br>閻志翔(京都大学人文科学研究所)<br>陳雪溱(渥美国際交流財団)<br>広谷妃夏(渥美国際交流財団)<br>馬歌陽(渥美国際交流財団) | 座長: 林泉忠(東京大学)<br>討論: 南基正(ソウル大学)<br><br>鳥山淳(渥美国際交流財団)<br>金崇培(渥美国際交流財団)<br>李明峻(渥美国際交流財団) | 張桂娥(渥美国際交流財団)<br>olga khomenko(渥美国際交流財団)<br>成実朋子(渥美国際交流財団)<br>斎木喜美子(渥美国際交流財団)<br>張桂娥(渥美国際交流財団) |
| 10:30-10:40 | 休息 | | | |

# 2025年11月01日(土) 午前 パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表 2

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 8109 |
|---|---|---|---|---|
| | ① 東アジアの歴史認識問題 | ⑨ 日本研究と文化表現 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題 |
| | パネル 2<br>近代日本における国体論の受容と変容 | ラウンドテーブル 1<br>歴史的日本語・方言と生成AIの接点 | パネル 5<br>Undoing Borders-<br>危機と節合の境界、あるいはポスト国民国家における非-国境的市民のゆくえ | 個人発表 |
| | 座長: 鈴木堅弘(国際日本文化研究センター)<br>討論: 全成坤(翰林大学)<br><br>上村静(尚絅学院大学)<br>鈴木堅弘(国際日本文化研究センター)<br>呉佩遥(上海師範大学)<br>鈴木規夫(愛知大学) | 座長: 関野樹(国際日本文化研究センター)<br><br>相田満(日本女子大学)<br>坂井美日(鹿児島大学)<br>関野樹(国際日本文化研究センター)<br>橋本雄太(国立歴史民俗博物館)<br>山田奨治(国際日本文化研究センター) | 座長:竹田響(京都大学)<br>討論:辻吉祥(青山学院大学)<br><br>竹田響(京都大学)<br>柳川・みん大貴(一橋大学)<br>韓在賢(京都大学)<br>金裕賢(大阪公立大学大学院)<br>太田紗菜(東京大学) | 司会: 岩松文代(北九州市立大学)<br><br>陳志文(国立高雄大学)<br>尹智鉉(中央大学)<br>藤本かおる(武蔵野大学)<br>麻子軒(京都外国語大学)<br>岩松文代(北九州市立大学)<br>加藤志織(東北大学) |
| 10:40-<br>12:10 | 生命科学舘 8111 | 生命科学舘 8116 | 生命科学舘 8217 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 | ⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響 |
| | パネル8<br>近現代日本文化と言葉の多様性 | パネル12<br>“異”なるものとの邂逅-日本の信仰・伝承・養生における外来知の受容 | パネル14<br>日本国憲法をめぐる論議と東アジアの視点-法・政治・文化からの考察 | パネル17<br>現代児童文学に見る戦争の記憶と継承ー戦争児童文学は何をどのように語り継ぐのか |
| | 座長: 徐興慶(東呉大学)<br>討論: 朴孝庚(漢陽サイバー大学)<br><br>曾秋桂(淡江大学)<br>簡暁花(中華大学)<br>林玉恵(輔仁大学)<br>陳璐(早稲田大学)<br>陳祥(日本国際学園大学) | 座長: 金陀美(木浦大学)<br>討論: 末松美咲(岐阜大学)<br><br>郭佳寧(名古屋大学)<br>松山由布子(中京大学)<br>江口啓子(名古屋市立大学)<br>畑有紀(名城大学) | 新井誠、神野潔(東京理科大学)<br>韓修玭(慶応大学)<br>新井誠(広島大学)<br>横大道聡(慶応義塾大学大学院) | 張桂娥(渥美国際交流財団)<br>Maria Elena Tisi(渥美国際交流財団)<br>Olga Khomenko(渥美国際交流財団)<br>BURITICA ALZATE Juliana(渥美国際交流財団) |
| 12:10-<br>13:00 | 昼食 | | | |

# 2025年11月01日(土)　午後 パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表 3

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 8109 |
|---|---|---|---|---|
| 13:00–14:30 | ① 東アジアの歴史認識問題 | ⑤ 東アジアの高齢化問題と福祉問題<br>⑦ 東アジアの社会とジェンダー<br>⑧ 東アジアにおける社会運動 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 |
| | 個人発表 | 個人発表 | 個人発表 | パネル6<br>同盟、パートナーシップ、ネットワークがつくる東アジア–中国と日本の新動向 |
| | 司会: 岡崎まゆみ(立正大学)<br><br>那波泰輔(成蹊大学)<br>川端美季(立命館大学)<br>岡崎まゆみ(立正大学) | 磯部美里(名古屋大学大学院)<br>武田尚子(早稲田大学)<br>伴野文亮(鹿児島大学)<br>于乃明·金ユンジン(四川文化芸術学院) | 司会: 岡井宏文(京都産業大学)<br><br>岡井宏文(京都産業大学)<br>本多真隆(立教大学)<br>陸麗君(福岡県立大学)<br>日高愛子(熊本大学)<br>厳茹蕙(北京理工大学)<br>石橋健太郎(福山大学)<br>廖育卿(淡江大学) | 渡辺紫乃(Sophia University)<br>李承赫(東北学院大学)<br>楠綾子(国際日本文化研究センター) |
| | 生命科学舘 8111 | 生命科学舘 8116 | 生命科学舘 8217 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家 | ⑮ 地政学の回帰：<br>技術、気候、通商を揺るがす変化の波 |
| | パネル9<br>20世紀半ばにおけるローカルメディアと文化生産：有線放送を事例に | 企画パネル 第1セッション<br>日韓関係を超えて—東アジアにおける移動、アイデンティティ、表現の政治 | パネル15<br>戦時下の日本における社会科学の諸像：内地と外地における知の位相 | パネル18<br>東アジアの災難と回復力構築のための融複合研究 |
| | 座長: 金孝真(ソウル大学)<br>討論: コマストリ、キアラ(慶応義塾大学)<br><br>鄭知喜(ソウル大学)<br>安岡健一(大阪大学)<br>松本章伸(早稲田大学) | 司会: 盧志炫(韓国外国語大学大学院)<br>討論: 宋知芸(高麗大学国際大学)<br>劉敏栄(成均館大学)<br><br>金芽凛(聖公会大大学)<br>臺丸谷美幸(水産大学校)<br>金美侲(高麗大学グローバル日本研究院) | 司会·討論 松田利彦(国際日本文化研究センター)<br><br>蔭木達也(明星大学)<br>牧野邦昭(慶応義塾大学)<br>阪本尚文(福島大学)<br>周雨霏(国際日本文化研究センター) | 座長:山泰幸(関西学院大学)<br>討論:趙寛子(ソウル大学)<br>藍弘岳(中央研究院)<br><br>田村史記(ソウル大学)<br>呉殷政(江原大学)<br>張政遠(東京大学) |
| 14:30–14:40 | 休息 | | | |

# 2025年11月01日(土)　午後 パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表 4

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 8109 |
|---|---|---|---|---|
| 14:40–16:10 | ⑩「世界文学」の中の日本文学<br>⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響 | ② 東アジアの思想交流<br>③ 東アジアにおける宗教交流 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化<br>⑨ 日本研究と文化表現 | 特別パネル<br>東アジアにおける日本研究支援：民間財団の経験 |
| | 個人発表 | 個人発表 | 個人発表 | |
| | 司会:松田利彦(国際日本文化研究センター)<br><br>松田利彦(国際日本文化研究センター)<br>長沢一恵(天理大学)<br>河西秀哉(名古屋大学)<br>真辺将之(早稲田大学) | 司会: 小島明子(新潟大学)<br><br>渡邉将智(就実大学)<br>小島明子(新潟大学)<br>黄耀儀(文藻外語大学) | 司会: 渡辺宏彰(立命館大学)<br><br>亀井大樹(流通科学大学)<br>渡辺宏彰(立命館大学)<br>片岡樹(京都大学)<br>長島祐基(早稲田大学) | 司会: 園田茂人(東京大学東洋文化研究所教授)<br>パネリスト：園田茂人<br><br>小林義之(笹川平和財団主任研究員)<br>利根英夫(トヨタ財団プログラムオフィサー)<br>浜谷健一(住友財団助成担当部長) |
| | 生命科学舘 8111 | 生命科学舘 8116 | 生命科学舘 8217 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 | ⑬ 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略 |
| | パネル10<br>映画文化と沖縄−戦後から1980年代にかけての歴史と政治、そして表象の交錯 | 企画パネル　第2セッション<br>日韓関係を超えて―東アジアにおける移動、アイデンティティ、表現の政治 | 個人発表 | パネル19<br>African MZ Generation and the Nexus of Digital, Climate, and Mobility Transformations |
| | 座長: 藤城孝輔(広島大学)<br>討論: 梁蘊嫻(Yuan Ze University)<br><br>名嘉山リサ(和光大学)<br>李政亮(政治大学)<br>黄均啟(釜山大学映畫研究所)<br>藤城孝輔(広島大学) | 司会: 金美伝(高麗大学グローバル日本研究院)<br>討論: 盧志炫(韓国外国語大学大学院)<br>金芽凜(聖公会大大学)<br>臺丸谷美幸(水産大学校)<br><br>宋知芸(高麗大学国際大学)<br>劉敏栄(成均館大学) | 司会: 加藤博章(朝日大学)<br><br>加藤博章(朝日大学)<br>楊雯婷(国立政治大学) | Yang, Kiwoong(翰林大学)<br>Zoo Hanah(翰林大学)<br>Baek, Yong Jun(翰林大学)<br>Byun Oung(翰林大学)<br>Lee Kyeongeun(翰林大学) |
| 16:10–16:20 | 休息 | | | |

# 2025年11月01日(土)　午後 パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表 4

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 8217 |
|---|---|---|---|---|
| 16:20-17:50 | ⑩「世界文学」の中の日本文学<br>⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響 | ⑬ 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 |
| | 個人発表 | 個人発表 | 個人発表 | ラウンドテーブル 3<br>中選挙区制度」を捉えなおす-政治学、歴史学、法学による学際共同分析 |
| | 司会: 小島明子(新潟大学)<br><br>柳井貴士(愛知淑徳大学)<br>梁蘊嫻(Yuan Ze University)<br>梁仁実(岩手大学)<br>丸山真央(大阪大学) | 司会: 池見真由(札幌国際大学)<br><br>池見真由(札幌国際大学)<br>陳堯柏(札幌国際大学)<br>葉東哲(台湾国立台中科技大学)<br>呉嘉鎮(真理大学) | 司会: 根本雅也(一橋大学)<br><br>根本雅也(一橋大学)<br>伊藤雅一(茨城大学)<br>大和田奈津(千葉大学)<br>酒井晴香(広島大学大学院) | 座長: 清水唯一朗(慶応義塾大学)<br><br>マッケルウェイン・ケネス・盛(東京大学)<br>孫斉庸(立教大学)<br>安野修右(日本大学)<br>益田高成(新潟大学) |

# 2025年11月02日(日) 午前· 次世代研究者発表 1

| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 810 9 |
|---|---|---|---|---|
| | ① 東アジアの歴史認識問題 | ② 東アジアの思想交流 | ② 東アジアの思想交流 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 |
| | 野﨑雅子(早稲田大学)<br>王春佶(筑波大学)<br>山本潤子(大阪大学) | 李心羽(総合研究大学院大学)<br>辜傲然(名古屋大学)<br>董子昂(北海道大学)<br>CAPASSO CAROLINA | 金娜儇(立命館大学)<br>金時煥(東北大学)<br>何琦璠(東北大学) | 友寄元樹(同志社大学大学院)<br>伴野崇生(慶応義塾大学)<br>渋谷淳一(法政大学大原社会問題研究所)<br>大茂矢由佳(埼玉大学) |
| | 生命科学舘 8111 | 自然科学舘 7101 | 自然科学舘 7103 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題 | ⑦ 東アジアの社会とジェンダー | ⑦ 東アジアの社会とジェンダー | ⑧ 東アジアにおける社会運動 |
| 09:00-<br>10:30 | 司会: 甘利実乃(東京外国語大学大学院)<br><br>孫彤(東京外国語大学大学院)<br>王睿琪(東京外国語大学)<br>宮﨑悠二(京都文教大学)<br>林燕燕(東京外国語大学) | 司会: 荒木生(成城大学大学院)<br><br>曲虹霖(立命館大学)<br>陳悦(東南大学東南大学)<br>荒木生(成城大学大学院) | 司会: 嶋津麻穂(立命館大学)<br><br>頼宇韓(名古屋大学)<br>楊雅韻(京都大学)<br>孫潤昊 | 司会：相川陽一<br><br>磯崎加奈予(国際日本文化研究センター)<br>劉韻(早稲田大学大学)<br>小美濃彰(東京外国語大学)<br>Ariadne Jourdan Fayao(東京外国語大学) |
| | 自然科学舘 7111 | 自然科学舘 7112 | 自然科学舘 7113 | 自然科学舘 7114 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑩「世界文学」の中の日本文学 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 | ⑭ アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響 |
| | 乾友紀(大阪大学)<br>茶円直人(吉林大学)<br>林青(東京外国語大学)<br>楊子涵(大阪大学) | 葉宇軒(東京大学)<br>邱政芃(東京大学)<br>宮喬瑞(東京外国語大学大学院) | 司会: 伊藤将人(国際大学)<br><br>盧美奐(南京大学)<br>JUWEI FENG(南開大学)<br>范艷芬(華南師範大学)<br>蘇文博(国際日本文化研究センター) | 司会: 金子聖仁(東京大学)<br><br>韓瑩(東京大学)<br>LI YUANSHENG(Sun Yat-sen University)<br>金子聖仁(東京大学)<br>張嘉慧(神戸大学) |
| 10:30-<br>10:40 | 休息 | | | |

# 2025年11月02日(日) 午前· 次世代研究者発表 2

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | 生命科学舘 8101 | 生命科学舘 8102 | 生命科学舘 8103 | 生命科学舘 810 9 |
| | ① 東アジアの歴史認識問題 | ② 東アジアの思想交流 | ② 東アジアの思想交流 | ④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化 |
| | 小谷英里(一橋大学大学院)<br>JINGRAN HUANG(東京外国語大学)<br>竹内洪介(就実大学) | 尹馨憶(東北大学)<br>石咏絮(東北大学)<br>宋兆輝(東北大学)<br>曾宝満 | Victor Laubenstein(東京外国語大学)<br>何雨(筑波大学)<br>婁訳倫(東北大学)<br>沈駿楠(浙江工商大学)<br>阿部栞央(東北大学) | 劉罡(愛知大学)<br>座間味希呼(大阪大学)<br>柴田香奈子(東京大学) |
| | 生命科学舘 8111 | 自然科学舘 7101 | 自然科学舘 7103 | 自然科学舘 7109 |
| | ⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題 | ⑦ 東アジアの社会とジェンダー | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑧ 東アジアにおける社会運動 |
| 10:40–<br>12:10 | 司会: 甘利実乃(東京外国語大学大学院)<br><br>甘利実乃(東京外国語大学大学院)<br>CHEN SHAOSHEN(東京外国語大学)<br>金道瑛(京都橘大学) | 張雅(大阪大学)<br>QI XIAOHANG(北海道大学)<br>孫詩彧(国際日本文化研究センター) | 司会: 嶋津麻穂(立命館大学)<br><br>篠原華子(神戸大学)<br>松岡悠和(京都府立大学)<br>嶋津麻穂(立命館大学) | 司会：相川陽一<br><br>横山佳代(北京大学)<br>欧陽珊珊(立命館大学大学院)<br>相川陽一(長野大学)<br>Zhao Wenwen(南開大学) |
| | 自然科学舘 7111 | 自然科学舘 7112 | 自然科学舘 7113 | 自然科学舘 7114 |
| | ⑨ 日本研究と文化表現 | ⑩「世界文学」の中の日本文学 | ⑫ 東アジアの政治と国際関係 | ⑭ アジアの文化交流とアイデンティティ：<br>韓流、文化パワー、そして相互影響<br>⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家 |
| | 竹内麻耶華(名古屋大学)<br>藤井なつみ(早稲田大学)<br>橋本凛(大阪経済法科大学) | 譚静秋(復旦大学)<br>曺栄晙(Anyang univ)<br>米倉伸哉(一橋大学) | 司会: 伊藤将人(国際大学)<br><br>伊藤将人(国際大学)<br>高木超(北九州市立大学)<br>呉舒平(京都大学)<br>田中駿介(東京大学)<br>玉井秀明(神戸大学大学院) | 司会: 金子聖仁(東京大学)<br><br>石俊彦(東北大学大学院)<br>梁昕怡(東京外国語大学)<br>Kairu Yamanaka |
| 12:10–<br>13:30 | 昼食 | | | |

東アジア日本研究者協議会第9回学術大会

# 学術大会発表テーマ

# 2025年11月01日(土)
# パネル発表・ラウンドテーブル・個人発表(中堅研究者)

【生命科学舘 8101】
[① 東アジアの歴史認識問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル1：天皇制をめぐる差別の構造-国家権力と抵抗- | | |
| | | 座長: 李礼安(翰林大学) | |
| | | 討論: 朱坤容(SUN YAT-SEN UNIVERSITY) | |
| 1 | 09:00-10:30 | 山本昭宏(神戸市外国語大学) | 「昭和50年代」の天皇制論 |
| 2 | | 李慶美(東北亜歴史財団) | 外国人被爆者と「動員皇国」日本 |
| 3 | | 呉座勇一(国際日本文化研究センター) | 網野善彦の天皇制批判とマルクス主義 |
| | 休息 (10:30-10:40) | | |

【生命科学舘 8101】
[① 東アジアの歴史認識問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル2: 近代日本における国体論の受容と変容 | | |
| | | 座長: 鈴木堅弘(国際日本文化研究センター) | |
| | | 討論: 全成坤(翰林大学) | |
| | | 司会: 上村静(尚絅学院大学) | |
| 1 | 10:40-12:10 | 上村静(尚絅学院大学) | 近代日本のキリスト教と天皇制-松村介石を切り口に |
| 2 | | 鈴木堅弘(国際日本文化研究センター) | 戦前民俗の死者祭祀と天皇制-東北のムカサリ絵馬と安丸良夫の民衆思想の差異 |
| 3 | | 呉佩遥(上海師範大学) | 近代日本における「小我-大我」論の展開と仏教哲学：井上哲次郎を中心として |
| 4 | | 鈴木規夫(愛知大学) | 貫戦期の〈天皇〉観－南原繁における世界性の<東洋的還元と日本化>をめぐって－ |
| | 昼食 (12:10-13:00) | | |

【生命科学舘 8101】
[① 東アジアの歴史認識問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：岡崎まゆみ(立正大学) |
| 1 | 13:00-14:30 | 那波泰輔(成蹊大学) | なにが「戦争体験」の継承意識を促すのか：継承に関する計量分析 |
| 2 | | 川端美季(立命館大学) | 近代日本の植民地統治下における清潔観の形成と展開-公衆浴場を手がかりに |
| 3 | | 岡崎まゆみ(立正大学) | 東アジアにおける「民事訴訟の近代化」の比較史的検討 |
| 休息（14:30-14:40） | | | |

【生命科学舘 8101】
[① 東アジアの歴史認識問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：松田利彦(国際日本文化研究センター) |
| 1 | 14:40-16:10 | 松田利彦(国際日本文化研究センター) | 日本赤十字社と植民地朝鮮 |
| 2 | | 長沢一恵(天理大学) | 日本留学時代の地質学者・朴東吉-近代日本の工業教育と韓国人留学生- |
| 3 | | 河西秀哉(名古屋大学) | 明仁皇太子夫妻の訪韓問題 |
| 4 | | 真辺将之(早稲田大学) | 動物を悼む帝国の記憶－日本統治期動物慰霊碑の戦後的展開と東アジア三地域の記憶文化 |
| 休息（16:10-16:20） | | | |

【生命科学舘 8101】
[⑩「世界文学」の中の日本文学]
[⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：小島明子(新潟大学) |
| 1 | 16:20-17:50 | 柳井貴士(愛知淑徳大学) | 〈境域〉における夢幻性の文学-又吉栄喜「冥婚」を中心に |
| 2 | | 梁蘊嫻(Yuan Ze University) | 虚構の焼却から現実の隠喩へ-村上春樹「納屋を焼く」とイ・チャンドン監督『バーニング』におけるメディア横断的・文化横断的改編の考察 |
| 3 | | 梁仁実(岩手大学) | コリアン・ディアスポラの他己像ー小説パチンコの映像化をめぐって |
| 4 | | 丸山真央(大阪大学) | 大阪・関西万博のレガシーをめぐる住民意識 -東アジアメガイベント論の視点から |

【生命科学舘 8102】

[② 東アジアの思想交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル3: 東アジアにおける日本儒学の特質と受容——気論と陽明学を中心に | | |
| | | | 座長: 徐興慶(東吳大学) |
| | | | 許怡齡(中国文化大学) |
| 1 | 09:00-10:30 | 王俊彦(中国文化大学) | 日本貝原益軒の気論 |
| 2 | | 許怡齡(中国文化大学) | 朝鮮近代知識人朴殷植の儒教改革論と日本陽明学 |
| 3 | | 阮英俊(Nguyen Anh Tuan)(University of Social Sciences and Humanities ) | 近代ベトナムの学者による日本の陽明学に関する3つの誤解とその原因 |
| | 休息 (10:30-10:40) | | |

【生命科学舘 8102】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | ラウンドテーブル 1：歴史的日本語・方言と生成AIの接点 | | |
| | | | 座長: 関野樹(国際日本文化研究センター) |
| 1 | 10:40-12:10 | 相田満(日本女子大学) | |
| 2 | | 坂井美日(鹿児島大学) | |
| 3 | | 関野樹(国際日本文化研究センター) | |
| 4 | | 橋本雄太(国立歴史民俗博物館) | |
| 5 | | 山田奨治(国際日本文化研究センター) | |
| | 昼食 (12:10-13:00) | | |

【生命科学舘 8102】
[⑤ 東アジアの高齢化問題と福祉問題]]
[⑦ 東アジアの社会とジェンダー] [⑧ 東アジアにおける社会運動]]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| 1 | 13:00-14:30 | 磯部美里(名古屋大学大学院) | 伝統工芸とジェンダー：有松・鳴海絞における女性の働き方と現状 |
| 2 | | 武田尚子(早稲田大学) | 女歌舞伎と地域社会 |
| 3 | | 伴野文亮(鹿児島大学) | 金原明善による更生保護事業と〈社会改良〉 |
| 4 | | 于乃明·金ユンジン(四川文化芸術学院) | 東アジア超高齢社会における長期介護人材育成に対する高等教育の対応戦略の比較 |
| 休息 (14:30-14:40) | | | |

【生命科学舘 8102】
[② 東アジアの思想交流] [③ 東アジアにおける宗教交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：小島明子(新潟大学) |
| 1 | 14:40-16:10 | 渡邉将智(就実大学人文科学部) | 皇統と廟制 -後漢献帝の帝位継承と董卓政権- |
| 2 | | 小島明子(新潟大学) | The Japanese Writer Tsuji Takeo and Chinese Literature: Focusing on Sophistication with Chinese Classical Verse and Prose、 as Seen in the Journal Kyōiku Jiron |
| 3 | | 黄耀儀(文藻外語大学) | 西川満と日本天后会における日蓮信仰の研究 -日本の新宗教研究の視座からの分析- |
| 休息 (16:10-16:20) | | | |

【生命科学舘 8102】
[⑬ 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：池見真由(札幌国際大学) |
| 1 | 16:20-17:50 | 池見真由(札幌国際大学)<br>陳堯柏(札幌国際大学) | 国際観光を通じた持続可能な先住民文化の保護と活用： 台湾原住民のケーススタディより |
| 2 | | 葉東哲(台湾国立台中科技大学) | 半導体サプライチェーンの再構築と今後の見通し |
| 3 | | 呉嘉鎮(真理大学) | トランプ政権の関税政策が東アジア半導体産業に及ぼす地経学的リスクとサプライチェーンへの影響 |

【生命科学舘 8103】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル4：戦後／冷戦期における知識人の越境的移動と文化的実践 | | |
| | | | 討論：川崎賢子(Nihon University College of Art) |
| 1 | 09:00-10:30 | 星野幸代(名古屋大学) | 軍楽隊と戦後日本オーケストラとの関係-マキノ雅弘『野戦軍楽隊』（1944）から今井正『ここに泉あり』（1955）へ |
| 2 | | 楊韜(仏教大学) | 国交回復前における日本演劇人の訪中：千田是也の軌跡（1955-1960）を手がかりに |
| 3 | | 朱宇正(名古屋大学) | 冷戦期台湾の日本映画受容：石原裕次郎の台湾訪問（1962）を中心に |
| 4 | | 温秋穎(京都大学) | 学生訪中団「斉了会」の中国体験と情報の再構築（1965-1972） |
| | 休息（10:30-10:40） | | |

【生命科学舘 8103】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル5：Undoing Borders-危機と節合の境界、あるいはポスト国民国家における非-国境的市民のゆくえ | | |
| | | | 座長：竹田響(京都大学) |
| | | | 討論：辻吉祥(青山学院大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 竹田響(京都大学) | 朝鮮半島出身者の海を跨いだ親族ネットワークと国境・出入国管理-海を跨いだ離別と再会、そしてその後 |
| 2 | | 柳川・みん大貴(一橋大学) | 私たちは日本に入れますか？-冷戦期における韓国籍の在韓日本人女性とその子どもたちの移住と戦後日本の移民受け入れ |
| 3 | | 韓在賢(京都大学) | 韓国系ニューカマー第二世代にとっての「韓国人であること」の意味 |
| 4 | | 金裕賢(大阪公立大学大学院) | 日本の社会運動における「市民」とは誰か-不可視化される在日コリアン |
| 5 | | 太田紗菜(東京大学) | 庇護国家を持たないディアスポラ集団-パレスチナ人と在日コリアンの比較から検証する新たな集団性 |
| | 昼食（12:10-13:00） | | |

【生命科学舘 8103】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会: 岡井宏文(京都産業大学) |
| 1 | 13:00-14:30 | 岡井宏文(京都産業大学)<br>本多真隆(立教大学) | 日本のムスリム移民の埋葬地選択における宗教・家族・ジェンダー |
| 2 | | 陸麗君(福岡県立大学) | 華僑華人の起業と地域コミュニティ-社会統合の視点から |
| 3 | | 日高愛子(熊本大学)<br>厳茹蕙(北京理工大学) | 日中韓における正月七日の節会の文化的展開 |
| 4 | | 石橋健太郎(福山大学)<br>廖育卿(淡江大学) | 日本と台湾における闘茶の歴史的変容 |
| 休息 (14:30-14:40) | | | |

【生命科学舘 8103】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化] [⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | **司会: 渡辺宏彰(立命館大学)** |
| 1 | 14:40-16:10 | 亀井大樹(流通科学大学) | 近代日本におけるペスト流行と職工教育の拡がり一金巾製織会社の事例を通して一 |
| 2 | | 渡辺宏彰(立命館大学) | 日本の労働力不足産業における移民労働者の不安定雇用 |
| 3 | | 片岡樹(京都大学) | 牛鬼伝説にみる朝鮮半島 |
| 4 | | 長島祐基(早稲田大学) | 国鉄労働者の演劇運動と女性労働者 (1945-1950) -プランゲ文庫内の国鉄労働組合機関紙の分析を中心として- |
| 休息 (16:10-16:20) | | | |

【生命科学舘 8103】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | **司会: 根本雅也(一橋大学)** |
| 1 | 16:20-17:50 | 根本雅也(一橋大学) | HITACHIと日立(1):企業のグローバル化と企業城下町 |
| 2 | | 伊藤雅一(茨城大学) | HITACHIと日立(2):市民活動の変遷からみた企業城下町 |
| 3 | | 大和田奈津(千葉大学) | HITACHIと日立(3):コワーキングスペースに集う女性たちにみる地方女子の自己実現 |
| 4 | | 酒井晴香(広島大学大学院) | HITACHIと日立(4):衰退する商店街と地域高齢者による「居場所」の相互行為実践 |

【生命科学舘 8109】

[⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | ラウンドテーブル 2：生成AI・音声認識・学習分析を活用した日本語教育の実践と評価 | |
| 1 | 09:00-10:30 | 林俊成(東京外国語大学) | |
| 2 | | 甘利実乃(東京外国語大学大学院) | |
| 3 | | 孫彤(東京外国語大学大学院) | |
| 4 | | Chaoshen CHEN(東京外国語大学大学院) | |
| 5 | | 王睿琪(東京外国語大学) | |
| 6 | | 李佳瑩(東京外国語大学大学院) | |
| 7 | | WANG CAIXUAN(東京外国語大学) | |
| | | 休息 (14:30-14:40) | |

【生命科学舘 8109】

[⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：岩松文代(北九州市立大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 陳志文(国立高雄大学) | 現代日本語における臨時的な四字漢語動名詞の構造と自他性に関しての研究 |
| 2 | | 尹智鉉(中央大学)<br>藤本かおる(武蔵野大学)<br>麻子軒(京都外国語大学) | TPACKモデルから日本語の学習・教育を再考する-生成AIとの共存を見据えて- |
| 3 | | 岩松文代(北九州市立大学) | 日本語の語彙からよみとく日本人の自然観と信仰<br>－「やま（山）」・「もり（杜・森）」・「山（サン）」観念の共生に着目して－ |
| 4 | | 加藤志織(東北大学) | 表音文字の読みにおける書字・音韻処理の過程の解明：日本語の仮名に注目して |
| | | 昼食 (12:10-13:00) | |

【生命科学舘 8109】

[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | **パネル6：同盟、パートナーシップ、ネットワークがつくる東アジア−中国と日本の新動向** | |
| 1 | 13:00-14:30 | 渡辺紫乃（Ｓｏｐｈｉａ University） | 中国のパートナーシップ外交にみられる二国間関係の階層構造 |
| 2 | | 李承赫(東北学院大学) | 「安全保障のワクチン」としての北朝鮮――日本における脅威認識と政策転換の系譜 |
| 3 | | 楠綾子(国際日本文化研究センター) | 緩やかな多国間同盟？−日米同盟における日本の自立性の拡大とパートナーシップ形成 |
| | | **休息（14:30-14:40）** | |

【生命科学舘 8109】

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | **特別パネル：東アジアにおける日本研究支援：民間財団の経験** | |
| | | **司会：園田茂人(東京大学東洋文化研究所教授)** | |
| 1 | 14:40-16:10 | パネリスト：園田茂人 | |
| 2 | | 小林義之(笹川平和財団主任研究員) | |
| 3 | | 利根英夫(トヨタ財団プログラムオフィサー) | |
| 4 | | 浜谷健一(住友財団助成担当部長) | |

【生命科学舘 8111】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル7：宗教と漢字の視点から見る日本文化の深層 | | |
| | | | 司会：尹在彦(渥美国際交流財団)<br>討論：松岡悠和(渥美国際交流財団)<br>賈海涛(渥美国際交流財団) |
| 1 | 09:00-10:30 | 磯部美紀(渥美国際交流財団) | 現代日本における宗教者とナラティブ |
| 2 | | 陳希(渥美国際交流財団) | 方法としての漢字-1950 年代の日中漢字論 |
| | 休息（10:30-10:40） | | |

【生命科学舘 8111】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル8：近現代日本文化と言葉の多様性 | | |
| | | | 座長：徐興慶(東吳大学)<br>討論：朴孝庚(漢陽サイバー大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 曾秋桂(淡江大学) | 異文化間コミュニケーションのトランスフォーメーションとしての村上春樹の「小確幸」 |
| 2 | | 簡暁花(中華大学) | 天皇制イデオロギーへの逆襲 |
| 3 | | 林玉恵(輔仁大学) | 台湾の世界遺産候補地・金門・馬祖における戦地文化ガイドの現状と課題 |
| 4 | | 陳璐(早稲田大学) | 「隠逸」をめぐる明治日本の言論空間 |
| 5 | | 陳祥(日本国際学園大学) | 女性ファッション誌における色彩表現について |
| | 昼食（12:10-13:00） | | |

【生命科学舘 8111】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル9：20世紀半ばにおけるローカルメディアと文化生産：有線放送を事例に | | | |
| 座長: 金孝真(ソウル大学)<br>討論: コマストリ、キアラ(慶応義塾大学) | | | |
| 1 | 13:00-14:30 | 鄭知喜(ソウル大学) | 不均等発展とローカルの生きられた経験：占領期北海道におけるラジオ共同聴取 |
| 2 | | 安岡健一(大阪大学) | 有線放送自主番組にみる農村文化活動 |
| 3 | | 松本章伸(早稲田大学 | ハイパーローカルな有線放送に宿るグローカルな眼差し |
| 休息 (16:10-16:20) | | | |

【生命科学舘 8111】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル10：映画文化と沖縄-戦後から1980年代にかけての歴史と政治、そして表象の交錯 | | | |
| 座長: 藤城孝輔(広島大学)<br>討論: 梁蘊嫻(Yuan Ze University) | | | |
| 1 | 14:40-16:40 | 名嘉山リサ(和光大学) | 米統治期沖縄における教育映画政策 |
| 2 | | 李政亮(政治大学) | 『琉球の恋』と『夕陽西下』から一九六〇年代の日台合作映画を探究する |
| 3 | | 黄均欣(釜山大学映畫研究所) | 風景の中の女、女たちの空間-戦後日本の女性アクション映画の変遷について |
| 4 | | 藤城孝輔(広島大学) | 『対馬丸-さようなら沖縄-』におけるオーサーシップとジャンルとしての平和教育アニメ |

【生命科学舘 8116】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル11：東アジアからみた日本美術-外来文化輸入の再検討- | | | |
| 座長：武瀟瀟(渥美国際交流財団) | | | |
| 討論：王雲(渥美国際交流財団) | | | |
| 1 | 09:00-10:30 | 閻志翔(京都大学人文科学研究所) | 神変からみた東大寺大仏蓮弁線刻画-東大寺二月堂本尊光背線刻画との比較を中心に一 |
| 2 | | 陳雪湊(渥美国際交流財団) | 桓武・嵯峨朝における王羲之受容論再考-入唐僧の請来書跡との関わりから- |
| 3 | | 広谷妃夏(渥美国際交流財団) | 日本製緯錦の特質に関する一試論 |
| 4 | | 馬歌陽(渥美国際交流財団) | 五-七世紀弥勒像の坐勢についての再考-東アジアの半跏形像を中心に- |
| 休息（10:30-10:40） | | | |

【生命科学舘 8116】

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル12：“異”なるものとの邂逅　-日本の信仰・伝承・養生における外来知の受容 | | | |
| 座長：金陀美(木浦大学) | | | |
| 討論：末松美咲(岐阜大学) | | | |
| 1 | 10:40-12:10 | 郭佳寧(名古屋大学) | 日本化する〝異〟なる儀礼-真言密教における舎利信仰を中心として |
| 2 | | 松山由布子(中京大学) | 書物から民俗信仰への知の変相-五郎王子説話を中心に- |
| 3 | | 江口啓子(名古屋市立大学) | 熱田の蓬莱伝説－日本に内包された異国・異境－ |
| 4 | | 畑有紀(名城大学) | 酒を用いた養生-本草書に見る薬酒の製法と効能をめぐって- |
| 昼食（12:10-13:00） | | | |

【生命科学舘 8116】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | 企画パネル 第1セッション<br>日韓関係を超えて-東アジアにおける移動、アイデンティティ、表現の政治<br><br>司会: 盧志炫(韓国外国語大学大学院)<br>討論: 宋知芸(高麗大学国際大学)<br>劉敏栄(成均館大学) | | |
| 1 | 13:00-14:30 | 金芽凛(聖公会大大学) | 日本の外国人政策と外国人に対する認識における変化 |
| 2 | | 臺丸谷美幸(水産大学校) | 記念碑建設・顕彰行動にみる朝鮮戦争期日系アメリカ人兵士の戦争認識 |
| 3 | | 金美侲(高麗大学グローバル日本研究院) | 植民地的統治構造とアジア系ディアスポラの政治的主体化：1900-1940年代ハワイ・プランテーション体制の分析 |
| | 休息 (14:30-14:40) | | |

【生命科学舘 8116】

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | 企画パネル 第2セッション<br>日韓関係を超えて-東アジアにおける移動、アイデンティティ、表現の政治<br><br>司会: 金美侲(高麗大学グローバル日本研究院)<br>討論: 盧志炫(韓国外国語大学大学院)<br>金芽凛(聖公会大大学)<br>臺丸谷美幸(水産大学校) | | |
| 1 | 14:40-16:10 | 宋知芸(高麗大学国際大学) | 「19世紀後半における東アジアの帝国主義経験：日本と朝鮮の比較研究」 |
| 2 | | 劉敏栄(成均館大学) | 「日本の選挙制度と政党の選挙戦略」 |

【生命科学舘 8217】

[① 東アジアの歴史認識問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル13：戦後東アジア分断国家における『祖国観』−沖縄・台湾・韓国の事例を中心に− | | | |
| 座長: 林泉忠(東京大学東洋文化研究所特任研究員) | | | |
| 討論: 南基正(ソウル大学日本学研究所) | | | |
| 1 | 09:00-10:30 | 鳥山淳(渥美国際交流財団) | 戦後沖縄社会の「祖国像」 |
| 2 | | 金崇培(渥美国際交流財団) | 戦後韓国社会の「祖国像」 |
| 3 | | 李明峻(渥美国際交流財団) | 戦後台湾社会の「祖国像」 |
| 休息 (10:30-10:40) | | | |

【生命科学舘 8217】

[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル14：日本国憲法をめぐる論議と東アジアの視点−法・政治・文化からの考察 | | | |
| 新井誠、神野潔(東京理科大学) | | | |
| 1 | 10:40-12:10 | 韓修玭(慶応大学) | 日本における警察DNA型データベースの課題と韓国法からの示唆 |
| 2 | | 新井誠(広島大学) | 東アジア的文化のなかのルッキズムと憲法 |
| 3 | | 横大道聡(慶応義塾大学大学院) | 日本の憲法改正論議における「外国」の視点 |
| 昼食 (12:10-13:00) | | | |

【生命科学舘 8217】
[⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| パネル15：戦時下の日本における社会科学の諸像：内地と外地における知の位相 | | | |
| | | | 司会･討論: 松田利彦(国際日本文化研究センター) |
| 1 | 13:00-14:30 | 蔭木達也(明星大学) | 猪俣津南雄と「日本村落共同体」論：昭和農業恐慌と『農村問題入門』をめぐって |
| 2 | | 牧野邦昭(慶応義塾大学) | 石橋湛山の戦時下における国際経済秩序論 |
| 3 | | 阪本尚文(福島大学) | 「京城」の高橋幸八郎 |
| 4 | | 周雨霏(国際日本文化研究センター) | 植民地における経済知の編成：　京城帝大「朝鮮経済研究所」の調査・研究活動を中心に |
| 休息 (14:30-14:40) | | | |

【生命科学舘 8217】
[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会: 加藤博章(朝日大学) |
| 1 | 14:40-16:10 | 加藤博章(朝日大学) | 冷戦終結後、日本における安全保障言説の変化－国際貢献からウクライナ戦争まで |
| 2 | | 楊雯婷(国立政治大学) | 日本のレアアース政策と経済安全保障 |
| 3 | | 小谷順子(静岡大学) | 日本における「記憶の法」の考察 |
| 4 | | 黄美恵(中国文化大学) | 断交後日台間の外交-90年代台湾に対する戦後処理問題と「確定債務」をめぐる日本政府の取組 |
| 休息 (16:10-16:20) | | | |

【生命科学舘 8217】
[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| ラウンドテーブル　3：「中選挙区制度」を捉えなおす-政治学、歴史学、法学による学際共同分析 | | | |
| | | | 座長: 清水唯一朗(慶応義塾大学) |
| 1 | 16:20-17:50 | マッケルウェイン・ケネス・盛(東京大学) | |
| 2 | | 孫斉庸(立教大学) | |
| 3 | | 安野修右(日本大学) | |
| 4 | | 益田高成(新潟大学) | |

【自然科学舘 7109】

[⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル16：現代児童文学に見る戦争の記憶と継承ー東アジア地域において児童文学は戦争をいかに描いているのか | | |
| | | | 張桂娥(渥美国際交流財団) |
| | | | olga khomenko(渥美国際交流財団) |
| 1 | 09:00-10:30 | 成実朋子(渥美国際交流財団) | 日本の「戦争児童文学」のこれまでと課題ー前川康男『ヤン』と薛涛『満山打鬼子（マンシャン鬼を打つ）』を通じて |
| 2 | | 斎木喜美子(渥美国際交流財団) | 日本の児童文学は戦争の記録と記憶をどう紡いできたのかー沖縄戦を題材とした児童文学は、子どもたちの未来に何を届けうるのか |
| 3 | | 張桂娥(渥美国際交流財団) | 台湾児童文学における戦争の語りと記憶の継承 － 『夢想中的陀螺』と『冷不防』が描く戦争体験 |
| | 休息（10:30-10:40） | | |

【自然科学舘 7109】

[⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル17：現代児童文学に見る戦争の記憶と継承ー戦争児童文学は何をどのように語り継ぐのか | | |
| | | | 張桂娥(渥美国際交流財団) |
| 1 | 10:40-12:10 | Maria Elena Tisi (渥美国際交流財団) | 記憶と物語の交錯-イタリアと日本を結ぶ視点：『パンに書かれた言葉』とイタリア児童文学が描く戦争と災害 |
| 2 | | Olga Khomenko(渥美国際交流財団) | ウクライナの児童文学における戦争の変遷-受け継がれた記憶から、子どもたちの身近な現実へ － |
| 3 | | BURITICA ALZATE Juliana(渥美国際交流財団) | |
| | 昼食（12:10-13:00） | | |

【自然科学舘 7109】

[⑮ 地政学の回帰：技術、気候、通商を揺るがす変化の波]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル18：東アジアの災難と回復力構築のための融複合研究 | | |
| | | | 座長:山泰幸(関西学院大学)<br>討論:趙寛子(ソウル大学), 藍弘岳(中央研究院) |
| 1 | 13:00-14:30 | 田村史記(ソウル大学) | 災害復興事業における公共投資の時空間的特性 |
| 2 | | 呉殷政(江原大学) | 復興のインフラと感情の文化政治-福島避難市町村におけるインフラ再建と復興の社会ドラマ |
| 3 | | 張政遠(東京大学) | 災難学のすすめ |
| | 休息 (14:30-14:40) | | |

【自然科学舘 7109】

[⑬ 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 主 題 |
|---|---|---|---|
| | パネル19：African MZ Generation and the Nexus of Digital, Climate, and Mobility Transformations -The Nexus of Digital, Climate, and Mobility Transformations and the African MZ ation- | | |
| | | | 座長: Byun Oung(翰林大学) |
| 1 | 14:40-16:40 | Yang, Kiwoong<br>(翰林大学) | Mobility in the Political Context and the Perception of Geopolitical Space: The Interaction between International Agreements and the Formation of Migration Networks and Solidarity |
| 2 | | Zoo Hanah<br>(翰林大学) | AI Norm Formation in the Global South: An Analysis of the African Union Case<br>Prof. Lee, Gyeongeun): Redefining the Role of AfT in the Era of Climate Trade Barriers |
| 3 | | Baek, Yong Jun<br>(翰林大学) | The Relationship between Renewable Energy Expansion and Water Stress: A Panel Data Analysis of Sub-Saharan Africa |
| 4 | | Byun Oung<br>(翰林大学) | Analyzing African Digital Native Pop Culture Using African Historical Methodology (Focusing on the Senegal Y'en a marre Case) |
| 5 | | Lee Kyeongeun<br>(翰林大学) | Redefining the Role of AfT in the Era of Climate Trade Barriers |

# 2025年11月02日(日)
# 午前 個人発表(次世代研究者)

**【生命科学舘 8101】 次世代研究者**

**[① 東アジアの歴史認識問題]**

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 野﨑雅子(早稲田大学) | 戦時期における中国語教育の再解釈 －戦後初期の中国語学習誌からみる中国認識－ |
| 2 | | 王春佶(筑波大学) | 近代日本・中国における銀行制度の変容比較 -政府と地方銀行に着目して- |
| 3 | | 山本潤子(大阪大学) | 人びとにとっての戦争責任論 -山本慈昭による遺骨の処遇をめぐる実践を中心に- |
| 休息 (10:30-10:40) | | | |

**[① 東アジアの歴史認識問題]**

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 小谷英里(一橋大学大学院) | 歴史認識をめぐるノンフォーマル教育 -帝国日本の暴力と向きあう社会運動に着目して |
| 2 | | JINGRAN HUANG (東京外国語大学) | Memorializing the Japanese Emigration in Manchuria: Monuments, Statues and Museums in China and Japan |
| 3 | | 竹内洪介(就実大学) | 17世紀欧州における徳川家康の表象について |
| 昼食 (12:10-13:30) | | | |

【生命科学舘 8102】 次世代研究者

[② 東アジアの思想交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 李心羽(総合研究大学院大学) | 宗教の価値論：明治啓蒙期における西周と津田真道の思想的接点と分岐 |
| 2 | | 辜傲然(名古屋大学) | 明治・大正期におけるアジア主義と自由主義の交錯：宮崎滔天の「国家の相対化」思想 |
| 3 | | 董子昂(北海道大学) | 「周縁」から考え直す近代東アジアの思想空間：朝鮮独立運動をめぐる呂志伊の言論活動を中心に |
| 4 | | CAPASSO CAROLINA | 『西洋紀聞』再考-新井白石とシドティの対話が紡ぐ東西交流 |
| 休息（10:30-10:40） | | | |

【生命科学舘 8102】 次世代研究者

[② 東アジアの思想交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 尹馨憶(東北大学) | 安藤昌益の人間論的視座 －公共哲学への接続可能性 |
| 2 | | 石咏絮(東北大学) | 儒教における楽学思想の日本受容－江戸初期の心学的傾向を中心に |
| 3 | | 宋兆輝(東北大学) | 日本賦役令の丁匠の継受と匠丁の創出-古代東アジアの技術労働力徴発体制について |
| 4 | | 曾宝満 | 近代日本における人口論の再考- 人口管理に関する思想的系譜の視座から |
| 昼食（12:10-13:30） | | | |

【生命科学舘 8103】 次世代研究者

[② 東アジアの思想交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 金娜儇(立命館大学) | 19世紀日本儒学研究に関する一考察 |
| 2 | | 金時煥(東北大学) | 化政期における佐藤信淵の「処士横議」としての思想と学問的交流 - 経世論および国家論の形成に着目して - |
| 3 | | 徐燕斌(東京大学) | 海をまたぐ亡命儒者朱舜水-近世東アジアと易姓革命 |
| 4 | | 何琦璠(東北大学) | 大正期における経済関係者の日華親善論の検討-1917年内藤久寛と日置益の訪中を中心に- |
| 休息 (10:30-10:40) | | | |

【生命科学舘 8103】 次世代研究者

[③ 東アジアにおける宗教交流]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | Victor Laubenstein (東京外国語大学) | インディオスと僧侶のあいだ －近世カトリック世界における日本と東アジア |
| 2 | | 何雨(筑波大学) | 日中仏教の交流から見る20世紀前半中国仏教の近代改革 -日中仏教の相違点に着目して |
| 3 | | 婁訳倫(東北大学) | 鎌倉時代の災害と日蓮宗の宗団形成-表象文化論の視点から- |
| 4 | | 沈駿楠(浙江工商大学) | 黄檗僧杲堂元昶に関する考察 |
| 5 | | 阿部栞央(東北大学) | 王族・貴種の出家から見る古代東アジア諸国の仏教受容 |
| 昼食 (12:10-13:30) | | | |

【生命科学舘 8109】 次世代研究者

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 友寄元樹(同志社大学大学院) | 東アジア情勢と南太平洋-20世紀前半の仏領ニューカレドニアにおける対日政策のトランスインペリアルな変化- |
| 2 | | 伴野崇生(慶応義塾大学) | 難民支援の暗黙知・実践知の言語化-緒方貞子の伝記分析からの検討 |
| 3 | | 渋谷淳一(法政大学大原社会問題研究所) | アジアから日本への若者移民－2010年代以降の留学生に注目して |
| 4 | | 大茂矢由佳(埼玉大学) | 日本のマスメディアにおけるウクライナ避難民の表象-報道写真のビジュアル分析から- |
| 休息 (10:30-10:40) | | | |

【生命科学舘 8109】 次世代研究者

[④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 劉罡(愛知大学) | 植民地・戦争の記憶はいかに展示されるか-植民地在住日本人の引揚げをめぐる記憶と表象 |
| 2 | | 座間味希呼(大阪大学) | 米軍統治期沖縄の農業開発における植物学者たち－1950年代の琉球政府関係者によるネットワーク構築の試みに着目して－ |
| 3 | | 柴田香奈子(東京大学) | 修道院手話の自然言語的な語彙変化-日本と韓国の修道院における実地調査をもとに- |
| 昼食 (12:10-13:30) | | | |

【生命科学舘 8111】 次世代研究者

[⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：甘利実乃(東京外国語大学大学院) |
| 1 | 09:00-10:30 | 孫彤(東京外国語大学大学院) | AIを用いた敬語運用能力向上と学習不安軽減に関する研究 -日本の大学院に留学中の中国人日本語学習者を対象として- |
| 2 | | 王睿琪(東京外国語大学) | AI支援による聴解過程の可視化と言語習得：アイディアユニットの重要度評価を通した日本語学習者の聴解ストラテジー再構築 |
| 3 | | 宮﨑悠二(京都文教大学) | 戦後初期『思想の科学』における「コミュニケーション」の概念分析 |
| 4 | | 林燕燕(東京外国語大学) | 中国語を母語とする日本語学習者における機能動詞結合の産出に関する一考察 -文法的意味の観点から- |
| | | | 休息（10:30-10:40） |

【生命科学舘 8111】 次世代研究者

[⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：甘利実乃(東京外国語大学大学院) |
| 1 | 10:40-12:10 | 甘利実乃(東京外国語大学大学院) | 生成AIを活用した反転授業用視聴覚教材の開発－教師負担を抑えた柔軟な制作手法と学習効果の検証－ |
| 2 | | CHEN SHAOSHEN(東京外国語大学) | 日本語学習者の生成AI使用実態に関する意識調査：外国語学習者との比較に基づく特徴分析 |
| 3 | | 金道瑛(京都橘大学) | ポップカルチャー接触が日本語非母語話者の日本語に及ぼす影響-韓国語母語話者の「非日常的」日本語使用に注目して- |
| | | | 昼食（12:10-13:30） |

【自然科学舘 7101】 次世代研究者

[⑦ 東アジアの社会とジェンダー]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：荒木生(成城大学大学院) |
| 1 | 09:00-10:30 | 曲虹霖(立命館大学大学院先端総合学術研究科) | 優生学的モダニティの残響-台湾『優生保健法』の法制史とその現在- |
| 2 | | 陳悦(東南大学東南大学) | 21世紀の日本女性監督の映画製作活動に関する考察 |
| 3 | | 荒木生(成城大学大学院) | 交差するマイノリティ経験とアイデンティティの構築：性的マイノリティと人種的マイノリティの交点から |
| | | 休息 (10:30-10:40) | |

【自然科学舘 7101】 次世代研究者

[⑦ 東アジアの社会とジェンダー]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 張雅(大阪大学) | 「勇敢な女性国民」の視覚表象 ： 1946年－1975年におけるベトナムの戦争ポスターに描かれた女性像 |
| 2 | | QI XIAOHANG (北海道大学) 孫詩彧 (国際日本文化研究センター) | 生理用品無償提供政策の行政実践ー韓国と日本に着目して |
| 3 | | 孫詩彧(国際日本文化研究センター) | 近代日本の経血処置用品の製造と販売：無知学からの考察 |
| | | 昼食 (12:10-13:30) | |

【自然科学舘 7103】 次世代研究者

[⑦ 東アジアの社会とジェンダー]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：嶋津麻穂(立命館大学) |
| 1 | 09:00-10:30 | 頼宇韓(名古屋大学) | 近代日本における皇后の軍事的役割：貞明皇后と戦艦「陸奥」進水式を例に |
| 2 | | 楊雅韻(京都大学) | 近代日本における洋風化粧の普及とジェンダー規範の交錯ー改良される「モダン・ガール」と改良されない「モダン・ボーイ」を手がかりにー |
| 3 | | 孫潤昊 | 日本壮年層メンタルヘルスの影響要因に関する考察 |
| | | 休息（10:30-10:40） | |

【自然科学舘 7103】次世代研究者

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：嶋津麻穂(立命館大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 篠原華子(神戸大学) | 戦後日本における美術批評：プリミティヴィズムとジェンダーの視点から |
| 2 | | 松岡悠和(京都府立大学) | 「社会教育」成立期における国家と宗教の交錯--明治日本の国民教化政策 |
| 3 | | 嶋津麻穂(立命館大学) | 「無私」の日本とアジアー坪内逍遥から西村真次へ |
| | | 昼食（12:10-13:30） | |

【自然科学館 7109】次世代研究者

[⑧ 東アジアにおける社会運動]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：相川陽一 |
| 1 | 09:00-10:30 | 磯崎加奈予(国際日本文化研究センター) | 戦前期大阪市の障害児教育にみる日本の教育思想 -「救済」と「差別」 |
| 2 | | 劉韻(早稲田大学大学) | 開発・連帯・脱植民地化-鶴見良行の東南アジア言説にみる知の実践- |
| 3 | | 小美濃彰(東京外国語大学国際日本研究センター) | 新島闘争における保育園づくり：その思想史的背景 |
| 4 | | Ariadne Jourdan Fayao(東京外国語大学) | Civic Movements and Environmental Governance in Machida City、 Japan (町田市における市民運動と環境ガバナンス) |
| 休息（10:30-10:40） | | | |

【自然科学館 7109】次世代研究者

[⑧ 東アジアにおける社会運動]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：相川陽一 |
| 1 | 10:40-12:10 | 横山佳代(北京大学) | 戦時体制と動物愛護-広井辰太郎の言論活動を手がかりに |
| 2 | | 欧陽珊珊(立命館大学大学院) | インターセクショナルなアクティヴィズム：台湾における障害のある性的少数者の運動参加を事例に |
| 3 | | 相川陽一(長野大学) | 成田空港の大規模拡張に伴う地域資料・文化財の緊急保全調査の現状と課題 |
| 4 | | Zhao Wenwen (南開大学) | 昭和初期日本国内における宗教統制と反統制の闘争 |
| 昼食（12:10-13:30） | | | |

【自然科学舘 7111】 次世代研究者

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 乾友紀(大阪大学) | 親子の食事における援助行為の相互行為分析 |
| 2 | | 茶円直人(吉林大学) | 日本における「反抗期」言説の誕生 |
| 3 | | 林青(東京外国語大学) | 第二次『新思潮』と谷崎潤一郎 -処女作神話「刺青」の誕生まで |
| 4 | | 楊子涵(大阪大学) | サラリーマンにおける貯金の様相-1910年代～1930年代のビジネス書から- |
| 休息 (10:30-10:40) | | | |

【自然科学舘 7111】 次世代研究者

[⑨ 日本研究と文化表現]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 竹内麻耶華(名古屋大学) | 現代の民間宗教組織における星の儀礼－御嶽講における新規祭祀の成立を事例として－ |
| 2 | | 藤井なつみ(早稲田大学) | 演劇検閲の輸出と変容-近代日本・台湾・朝鮮における演劇統制の比較研究 |
| 3 | | 橋本凛(大阪経済法科大学) | 視覚的な「美」と言葉遊びの混淆-江戸文学における「洒落」を事例として- |
| 昼食 (12:10-13:30) | | | |

【自然科学舘 7112】 次世代研究者

[⑩「世界文学」の中の日本文学]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 09:00-10:30 | 葉宇軒(東京大学) | 古典、神典、国典：明治初期における「古典」の転身 |
| 2 | | 邱政芃(東京大学) | 戦時期台湾における私小説言説とリアリズム：浜田隼雄「甘井君の私小説」をめぐって |
| 3 | | 宮喬瑞(東京外国語大学大学院) | 伏せ字という想像力ー中野重治「小説の書けぬ小説家」における闘争 |
| 休息（10:30-10:40） | | | |

【自然科学舘 7112】 次世代研究者

[⑩「世界文学」の中の日本文学]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 10:40-12:10 | 譚静秋(復旦大学) | 「泣く」の隠喩・変質・忘却－武者小路実篤『その妹』(1915-1944) における身体的・政治的側面 |
| 2 | | 曺 栄 晙（Ａｎｙａｎｇ univ） | 「祝う」ことのアイロニーと国家暴力の美学-パロディと間テクスト性から読む津島佑子「半減期を祝って」 |
| 3 | | 米倉伸哉(一橋大学) | 文学史を欲望する―在日朝鮮人文学をめぐる日本の批評言説 |
| 昼食（12:10-13:30） | | | |

【自然科学舘 7113】 次世代研究者

[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：伊藤将人(国際大学) |
| 1 | 09:00-10:30 | 盧美奐(南京大学) | 満州事変後における国際連盟の対日経済封鎖問題と日中外交の攻防(1931-1933) |
| 2 | | JUWEI FENG(南開大学) | 第一次世界大戦後の東アジア国際秩序の変容過程における「勢力範囲問題」と日本の対応 |
| 3 | | 范艷芬(華南師範大学) | 1960年代日本の東南アジア開発構想における地域概念の再編 |
| 4 | | 蘇文博(国際日本文化研究センター) | 「朝鮮策略」から見る黄遵憲の外交思想 -中華世界秩序から勢力均衡へ- |
| 休息（10:30-10:40） | | | |

【自然科学舘 7113】 次世代研究者

[⑫ 東アジアの政治と国際関係]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：伊藤将人(国際大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 伊藤将人(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター)<br>高木超(北九州市立大学) | 日韓両国間の地方創生をめぐる政策波及に関する試論ーー地方への移住促進政策を事例に |
| 2 | | 呉舒平(京都大学) | ハワイの領事裁判権放棄と日本の条約改正：その余波と影響 |
| 3 | | 田中駿介(東京大学) | 「田中角栄」をフィールドワークするー1980年代日本政治における中央-地方関係の再審ー |
| 4 | | 玉井秀明(神戸大学大学院) | 変容する韓国社会と日韓関係：盧武鉉政権を中心に |
| 昼食（12:10-13:30） | | | |

【自然科学舘 7114】 次世代研究者

[⑭ アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：金子聖仁(東京大学) |
| 1 | 09:00-10:30 | 韓瑩(東京大学) | 越境する想像力：冷戦期「自由アジア」における合作映画と文化的交渉 |
| 2 | | LI YUANSHENG(Sun Yat-sen University) | アジアを動かす物語の力：中日韓におけるアニメ・ゲームのメディアミックス戦略とソフトパワー |
| 3 | | 金子聖仁(東京大学) | 「文化交流」と戦争－－日中戦争下における国際文化振興会の対「中国」事業を事例に |
| 4 | | 張嘉慧(神戸大学) | 宝塚歌劇にみる国家プロパガンダ――満州進出をめぐって |
| | | | 休息（10:30-10:40） |

【自然科学舘 7114】 次世代研究者

[⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家]

[⑭ アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響]

| 順序 | 時 間 | 発 表 者 | 題名 |
|---|---|---|---|
| | | | 司会：金子聖仁(東京大学) |
| 1 | 10:40-12:10 | 石俊彦(東北大学大学院) | 日本における「第一次韓流ブーム」下のテレビドラマ領域での日韓合作 |
| 2 | | 梁昕怡(東京外国語大学) | 都市衛生インフラと空間的選別の構造：大阪市と上海公共租界の比較研究 |
| 3 | | Kairu Yamanaka | Contemporary Korean Puppetry in Transition: Direction, Space, and Social Engagement |
| | | | 昼食（12:10-13:30） |

東アジア日本研究者協議会第9回学術大会

# 発表概要

# 【特別パネル】

[東アジア日本研究者協議会 特別パネル]

# 東アジアにおける日本研究支援：民間財団の経験

司会者：園田茂人（東京大学東洋文化研究所教授）
パネリスト：園田茂人
小林義之（笹川平和財団主任研究員）
利根英夫（トヨタ財団プログラムオフィサー）
浜谷健一（住友財団助成担当部長）

日本の民間財団は長い間、それぞれの強いミッションによって東アジアの日本研究を支援してきた。その支援は、研究助成や日本語図書の寄贈、研究集会助成やネットワークの形成支援など多岐にわたる。本パネルはこうした活動を行い、司会者が具体的に共同作業をした経験をもつ日本を代表する民間財団（具体的には笹川平和財団、トヨタ財団、住友財団）のシニア・スタッフを招聘し、実際にどのような支援をしてきたのかエビデンスを交換し合うとともに、将来における日本研究支援のあるべき姿について議論したい。最初に司会者から問題提起を行い、各財団が日本研究支援に関わる歴史や現状について簡単にご報告いただく。その後、司会者を含むパネリスト間で意見交換をした後、フロアからの問題提起や質問を受け、議論を深めたい。

# 【企画パネル】

[アジア日本研究者協議会 企画パネル–キズナ · プログラム]

1. 企画の背景

– キズナ・プログラムは、分野を越えた次世代日韓研究者の継続的なネットワーキングと研究交流を目的として運営されています。

– その一環として、6名の運営委員は、日韓関係を東アジア的な文脈で再構築する中で、「ディアスポラ」と「メディア」というキーワードを中心に、同時代的な転換を探求することを目的に本パネルを企画いたしました。

2. テーマの意義

– ディアスポラは単なる離散にとどまらず、アイデンティティや帰属、境界と記憶の問題を通じて、東アジアの歴史と現在を再照明する視点を提供します。

– メディアは、そうしたディアスポラ的主体の表象、発話、コミュニケーションの場であり、政治的交渉の場としても機能します。

– 本パネルは、日韓関係を「国家対国家」の枠を超えて、国境を越える人々の物語と、それを媒介するメディアの働きを通じて、東アジアという共通の地平を構想することを目的とします。

3. 発表者

| 発表者 | 所属 | 発表テーマ |
|---|---|---|
| キム · ミヨン<br>*座長 | 高麗大<br>グローバル日本研究院 | 植民地的統治構造とアジア系ディアスポラの政治的主体化：<br>1900 ~ 1940年代ハワイ · プランテーション体制の分析 |
| キム · アルム | 聖公会大大学校<br>日本語日本学専攻 | 日本の外国人政策と外国人に対する認識の変化 |
| ソン · ジイェ | 高麗大学校<br>各部大学 | 19世紀後半、東アジアが経験した帝国主義：<br>日本と朝鮮の比較研究 |
| ユ · ミニョン | 成均館大学校<br>サーベイリサーチセンター | 日本の選挙制度と政党の選挙戦略 |
| 臺丸谷美幸 | 水産大学校 | 記念碑建設 · 顕彰行動に見られる朝鮮戦争期の日本系アメリカ人兵士の戦争認識 |

***討論：ノ・ジヒョン(韓国外国語大学大学院)**

## 4. 期待される成果

–キズナ・プログラムの学術的継続性と外部への展開を目的とした初の公式な集団発表
– 既存の日韓関係論を拡張する東アジア的視座の提示
–ディアスポラおよびメディアという融合的なキーワードを通じて、多様な学術的背景を連携
– 今後の日韓研究者間の共同研究および継続的な交流の基盤構築

# 【パネル】

【パネル1】

# 天皇制をめぐる差別の構造―国家権力と抵抗―

## [パネル概要]

天皇制は日本を日本たらしめる日本ナショナリズムの中核とされるが、天皇制の存在そのものが差別の構造を生み出しているという批判がある。天皇制というと、一般には戦前日本が想起され、「天皇制国家」という概念もしばしば見られる。敗戦を受けて天皇制は戦後民主主義と協調する姿勢をとり、「開かれた皇室」を標榜する象徴天皇制は日本国民の支持を得て現代に至る。
けれども天皇制の問題は終戦と共に消滅したわけではなく、部落差別や在日朝鮮人差別の問題が象徴するように、差別の構造は温存された。このため戦後においても天皇制克服の議論は盛んに行われた。①山本昭宏（日本）「「昭和50年代」の天皇制論」は、「昭和50年代（1975～85）」の天皇制をめぐる議論を総括し、ポストモダン思想が流行し高度消費社会などと呼ばれた時代に、なぜ天皇制論が盛り上がったのか、社会的背景を考察する。「昭和100年」となる2025年に行うにふさわしい報告であろう。
ところで、ここで注意すべきは、天皇制に基づく国家権力の抑圧を告発するという抵抗の試みが、差別を再生産・強化する危険性である。②李慶美（韓国）「外国人被爆者と「動員皇国」日本」は、外国人被爆者を、被爆者として「平等」に扱うことの持つ差別性を指摘する。この点、日本で最も著名な歴史家である網野善彦の天皇制批判も結果的に天皇制を擁護していると非難されており、同根の問題を内包する。③呉座勇一（日本）「網野善彦の天皇制批判とマルクス主義」は、網野の天皇制批判が持つ危うさが日本のマルクス主義全体の問題であることを明らかにする。司会は李礼安（韓国）、討論者は朱坤容（中国）が務める。

## [発表１]　「昭和50年代」の天皇制論

山本昭宏（神戸市外国語大学）

「昭和50年代（1975～85）」は天皇制をめぐる議論がアカデミズムでも論壇でも、盛り上がった時期である。一例を挙げよう。まずは菅孝行による『天皇論ノート』（田畑書店、1975年）と『天皇制：解体の論理』（三一書房、1977年）、そして『現代の部落差別と天皇制』（明石書店、1978年）が挙げられる。また、朴慶植『天皇制国家と在日朝鮮人』（社会評論社、1976年）、松本三之介『天皇制国家と政治思想』（未来社、1976年）、藤原彰『天皇制と軍隊』（青木書店、1978年）。その他にも、新日本文学会編『反天皇制論』（亜紀書房、1975年）や久野収・神島二郎編『天皇制論集』（三一書房、1976年）、杉原泰雄編『国民主権と天皇制』（三省堂、1977年）などの論集がある。なぜこの時期に議論が隆盛したのか。そして、これらの議論の中で、「戦後」の天皇制はどのように問題化されたのだろうか。他方で「昭和50年代」は「ジャパンアズナンバーワン」の時代であり、「ポストモダン思想」の時代であり、高度消費社会などと呼ばれる時代でもあった。改めてこの時代の議論を振り返りつつ、その後の天皇制論の消長をも含めて考察する。

【パネル1】

## [発表2]　　外国人被爆者と「動員皇国」日本

李慶美(東北亜歴史財団)

1945年8月、戦前から戦後への境目に生み出されたのが「被爆者」である。このカテゴリーについては、長らく日本人による「専有」が問題として提起されてきた(一国的・単一民族的)が、近年は日本人「以外」の存在も含めた公論化が進んでいる(多国的・多民族的)。本報告ではとくに後者の言説、いうなれば、「マルチナショナルな被爆者共同体」の有する「両義性」を問うことを目的とする。ここでいう両義性とは、外国人被爆者を、被爆者として「平等」に扱うことが、いかに各々の事例のもつ歴史性を「排除」する言説として機能してしまっているのかを、問題化するための論点といえる。この意味で本報告は、平準化のもつ差別性、あるいはアガンベンのいう包摂的排除の問題を、外国人被爆者論において提示するものともいえよう。具体的には、外国人被爆者として挙げられている各々の事例(朝鮮、台湾、中国、東南アジア、捕虜など)のもつ歴史性を問い質していくことで、それらが「天皇」を頂点に遂行された戦争のために「動員」された存在であったこと、その点で「同じ」被爆者でありつつも、幾重にも「階層化」された「動員皇国」日本の実相を明らかにしたい。

## [発表3]　　網野善彦の天皇制批判とマルクス主義

呉座勇一(国際日本文化研究センター)

網野善彦（1928-2004）は、日本で最も著名な歴史家の一人である。網野の学問的業績は多岐にわたるが、戦後日本の歴史学界の主流であったマルクス主義歴史学を批判し、新しい歴史像を提示した歴史学者として一般には知られている。芸能民や被差別民、女性などマイノリティの歴史を独自の観点から考察したその研究スタイルは、アナール学派の「社会史」との類似性を指摘されている。網野は戦後民主主義の潮流に乗って、天皇制の克服を目指していたが、一方で天皇制が現代まで存続した理由を追究した。そして海民・職人・芸能民ら非農業民が抵抗の根拠として天皇の宗教的権威を利用したという独自の見解を提示した。網野によれば、14世紀に非農業民を組織した後醍醐天皇が敗北することで日本社会から未開の要素が消え、神仏に直結する聖なる存在として畏怖されていた非農業民が差別の対象に転落していったという。

この網野の議論は、天皇制を擁護するものとして日本のマルクス主義歴史学主流から激しく批判されたが、網野はマルクス主義との格闘の中で自身の学説を築き上げていった。網野の天皇制研究の問題点を当時のマルクス主義全体の問題として捉え直したい。

【パネル2】

# 近代日本における国体論の受容と変容

## [パネル概要]

このパネルセッションでは、「国民国家の始発/終焉〈論〉」を多焦点からアプローチすることを目的とする。ここでいう多焦点とは、一つの均質的な視点ではなく、視座の複数性を意味する。

そこで上村静は、儒教的キリスト教と呼ばれる「道会」を設立した松村介石を切り口に、彼の友人であった井上哲次郎や内村鑑三に通底する時代性と思想性を解析する。また鈴木堅弘は、東北地方のムカサリ絵馬に描かれた戦死者を図像学の方法で読み解くことで、地方村落の死者婚姻の儀礼に天皇制を主体とした国民国家の形成理念が流入するプロセスを明らかにする。他方、呉佩遥氏は井上哲次郎が「現象即実在」論の延長線上に提示した「小我を捨て々、大我に従ふの倫理」はいかなる系譜のなかで日本と中国の知識人により再解釈され、個人的主体と近代国民国家との関連性を説明する鍵概念へと変容したかを検討する。さらに鈴木規夫は、戦時中に『国家と宗教』を上梓し、戦後においてもそのテクストを微妙に改稿しつつ自らの主著として不断に蘇生させてきた南原繁におけるクリスティアニティと天皇との思想的緊張関係が、貫戦期（アンドリュー・ゴードンなど）においてどのように変化したのかをその変化の必然的要因としての「敗北と占領」に着目しつつ、探る。

これらの発表を通じて民主主義論から松村介石らに見られる「宗教」と訳された西欧のReligionや地方村落の民俗信仰が国体論とどう結びついたかを解明し、「意識の服従・克服」の方法論を考察する。それはまた国家・権力・文化の呪縛を考え直す作業であり、国民国家の終焉を語る始まりの「閾」になれることを期待できる共同研究発表になるだろう。

## [発表１]　近代日本のキリスト教と天皇制−松村介石を切り口に

**上村静（尚絅学院大学）**

明治から昭和前期にかけて活動した松村介石は、青年期に熱心なキリスト教徒になるものの、キリスト教に見いだされる神話的要素を排除していくことで「道会」という新宗教を立ち上げた宗教家であり、当時は政官財学界に大きな影響力を有していた。同時代の日本を代表する内村鑑三もまた「二つのJ」を標榜し、無教会という日本独自のキリスト教を立ち上げたことで知られる。この内村を批判したことで知られる井上哲次郎は、キリスト教に普遍的価値を認めるものの、それは日本の宗教にするにはふさわしくないのであって、日本には日本独自の新宗教が必要だと考えた。三人に共通するのは、日本には西洋のキリスト教のような国民宗教がなく、それが社会の頽廃を招いているとする問題意識であった。井上と内村の間に親交はなかったようだが、松村と内村の間には長く親しい個人的交流があり、井上は松村の死後も道会の顧問としての役割を果たし続けた。三人は日本が天皇制国家であることを前提し、それを肯定し、その日本をよりよくするために日本の国民宗教が必要だと考える点で同じ問題意識を共有していた。ただ、そこで期待する「宗教」の形がそれぞれに異なっていたのである。

【パネル2】

## [発表2]　戦前民俗の死者祭祀と天皇制−東北のムカサリ絵馬と安丸良夫の民衆思想の差異

鈴木堅弘(国際日本文化研究センター)

昭和を代表する民衆思想家・安丸良夫は『近代天皇像の形成』（1992）において近代国民国家の形成は、天皇の神権的権威性を主軸にそえることで各地域の民俗祭祀を排除することにあったと主張する。この安丸史観は〈天皇制を主体とした国家神道〉と〈地方村落が有する民俗信仰〉を対抗的に捉え、前者が後者を社会的周縁へと排他的に追い込み、村落共同体の俗信的なエネルギーを無力化したとする。しかし、地方の葬祭儀礼や民俗祭祀では、必ずしも安丸が主張する国家神道と民俗信仰の二元論では捉えきれない土着の信仰が現代まで遺っている。その一例が死者婚姻を描いた「東北地域のムカサリ絵馬」である。

本発表では、戦前のムカサリ絵馬に描かれた軍人、軍隊を図像学の方法で読み解き、東北の死者婚姻に天皇制を主体とした国民国家の形成理念が流入するプロセスを明らかにする。冥婚儀礼は韓国、台湾、中国と東アジアに分布する葬祭であるが、東北のムカサリ絵馬は戦死者の婚姻を描くことを特色とする。この点に着目し、地方村落の民俗信仰では近代天皇制の権威性を巧みに取り入れつつ、俗信的な葬祭儀礼を国家権力の弾圧から守り抜く思想的な〈ねじれ〉を提示したい。

## [発表3]　近代日本における「小我−大我」論の展開と仏教哲学：井上哲次郎を中心として

呉佩遥(上海師範大学)

近年、日本の近代アカデミアで構築された「哲学」の国家主義への寄与としての井上哲次郎の国民道徳論や家族国家論に焦点を当てた研究が関心を集め、また仏教思想の哲学的な再解釈が東アジアの知のサークルや政治運動与えた広範な影響も注目されている。例えば「大我―小我」論は、近代日本哲学の源流として明治哲学界を風靡した「現象即実在論」の延長に位置づけられるが、その背後には東アジア仏教で重視される『大乗起信論』の真如縁起説や如来蔵思想があった。起信論と深い関係を有する華厳哲学は康有為などによる清末改革運動に大きな影響を与えたが、仏教教理を踏まえたその検討は不十分である。

本報告は、井上哲次郎が提示した「小我―大我」概念を中心に、それがいかに明治・大正・昭和初期にかけて哲学者、宗教（学）者により再解釈されたかを跡付け、「小我―大我」がいかに個人的主体と天皇制国家との結び付きを正当化する言葉として変容したかを考察し、近代日本における超国家主義的な論理との結合の再検討を行う。また、章炳麟や梁啓超などがいかに「小我―大我」概念を用い、中国にとって喫緊の課題であった「救亡図存」を図ったかを考察する。

## [発表4]　貫戦期の〈天皇〉観－南原繁における世界性の<東洋的還元と日本化>をめぐって

鈴木規夫(愛知大学)

従来、南原たちキリスト教系知識人は、超国家主義論者の抑圧に耐え、これを批判的に対象化した人々として扱われることが多い。それゆえに敗戦後も占領下における自由とデモクラシーの担い手たりえた、ということになっている。絶対的超越者である神に究極の拠り所を持つことによって、地上の国家を対象化し、超国家主義を批判的に見てきたので、戦後日本を新たに建て直す課題もより明確に認識できたのであるというのが、その論拠である。他方、京都学派などのように、汎神論的立場で国家は絶対者を具現するものであり、天皇への帰依を除いて絶対者への帰依はあり得ないといった主張は、結局軍国主義者らにより「巧みに使われ」、天皇とその国家を評価する方向に流され、日の本敗戦後は「懺悔道」（田辺元）を辿ることになった。本報告は、こうした戦前、戦中、戦後を事後的に異なる文脈に置いて成立する言説構造（「天皇制」という概念の濫用もその一端であろうが）の通説に、「貫戦期」における南原繁の天皇をめぐる発話行為の意味を、大川周明や折口信夫といった同時代の言説空間との対比を加えつつ、再構築しようとするものである。

【パネル3】

# 東アジアにおける日本儒学の特質と受容――気論と陽明学を中心に

## [パネル概要]

本パネルは、日本儒学の思想的特質とその東アジアにおける受容の様相を総合的に検討することを目的とする。第一報告は江戸期の貝原益軒に焦点を当て、彼の気論を漢唐・宋明の気論との比較から位置づけることで、日本儒学が東アジア儒学の中で示した独自の思想的位置を明らかにする。第二報告は近代朝鮮の朴殷植を対象とし、中国陽明学の伝統を持たなかった朝鮮において、彼が〈儒教改革論〉などを通じて日本陽明学を紹介し、報刊メディアを通じて「改革」と「興国」の理念を広めた意義を検討する。第三報告は近代ベトナムの学者による日本陽明学理解を分析し、陽明学の本格的伝統が存在しなかったベトナムにおいて、20世紀初頭に受容された際に生じた三つの誤解とその背景を考察する。

## [発表１]　日本貝原益軒の気論

王俊彦(中国文化大学)

明治から昭和前期にかけて活動した松村介石は、青年期に熱心なキリスト教徒になるものの、キリスト教に見いだされる神話的要素を排除していくことで「道会」という新宗教を立ち上げた宗教家であり、当時は政官財学界に大きな影響力を有していた。同時代の日本を代表する内村鑑三もまた「二つのJ」を標榜し、無教会という日本独自のキリスト教を立ち上げたことで知られる。この内村を批判したことで知られる井上哲次郎は、キリスト教に普遍的価値を認めるものの、それは日本の宗教にするにはふさわしくないのであって、日本には日本独自の新宗教が必要だと考えた。三人に共通するのは、日本には西洋のキリスト教のような国民宗教がなく、それが社会の頽廃を招いているとする問題意識であった。井上と内村の間に親交はなかったようだが、松村と内村の間には長く親しい個人的交流があり、井上は松村の死後も道会の顧問としての役割を果たし続けた。三人は日本が天皇制国家であることを前提し、それを肯定し、その日本をよりよくするために日本の国民宗教が必要だと考える点で同じ問題意識を共有していた。ただ、そこで期待する「宗教」の形がそれぞれに異なっていたのである。

【パネル3】

## [発表2]　朝鮮近代知識人朴殷植の儒教改革論と日本陽明学

許怡齢(中国文化大学)

昭和を代表する民衆思想家・安丸良夫は『近代天皇像の形成』（1992）において近代国民国家の形成は、天皇の神権的権威性を主軸にそえることで各地域の民俗祭祀を排除することにあったと主張する。この安丸史観は〈天皇制を主体とした国家神道〉と〈地方村落が有する民俗信仰〉を対抗的に捉え、前者が後者を社会的周縁へと排他的に追い込み、村落共同体の俗信的なエネルギーを無力化したとする。しかし、地方の葬祭儀礼や民俗祭祀では、必ずしも安丸が主張する国家神道と民俗信仰の二元論では捉えきれない土着の信仰が現代まで遺っている。その一例が死者婚姻を描いた「東北地域のムカサリ絵馬」である。

本発表では、戦前のムカサリ絵馬に描かれた軍人、軍隊を図像学の方法で読み解き、東北の死者婚姻に天皇制を主体とした国民国家の形成理念が流入するプロセスを明らかにする。冥婚儀礼は韓国、台湾、中国と東アジアに分布する葬祭であるが、東北のムカサリ絵馬は戦死者の婚姻を描くことを特色とする。この点に着目し、地方村落の民俗信仰では近代天皇制の権威性を巧みに取り入れつつ、俗信的な葬祭儀礼を国家権力の弾圧から守り抜く思想的な〈ねじれ〉を提示したい。

## [発表3]　近代ベトナムの学者による日本の陽明学に関する3つの誤解とその原因

Nguyen Anh Tuan(University of Social Sciences and Humanities )

近年、日本の近代アカデミアで構築された「哲学」の国家主義への寄与としての井上哲次郎の国民道徳論や家族国家論に焦点を当てた研究が関心を集め、また仏教思想の哲学的な再解釈が東アジアの知のサークルや政治運動与えた広範な影響も注目されている。例えば「大我―小我」論は、近代日本哲学の源流として明治哲学界を風靡した「現象即実在論」の延長に位置づけられるが、その背後には東アジア仏教で重視される『大乗起信論』の真如縁起説や如来蔵思想があった。起信論と深い関係を有する華厳哲学は康有為などによる清末改革運動に大きな影響を与えたが、仏教教理を踏まえたその検討は不十分である。

本報告は、井上哲次郎が提示した「小我―大我」概念を中心に、それがいかに明治・大正・昭和初期にかけて哲学者、宗教（学）者により再解釈されたかを跡付け、「小我―大我」がいかに個人的主体と天皇制国家との結び付きを正当化する言葉として変容したかを考察し、近代日本における超国家主義的な論理との結合の再検討を行う。また、章炳麟や梁啓超などがいかに「小我―大我」概念を用い、中国にとって喫緊の課題であった「救亡図存」を図ったかを考察する。

【パネル4】

# 戦後／冷戦期における知識人の越境的移動と文化的実践

[パネル概要]

本パネルは、戦中・敗戦から日中国交正常化・台湾断交以前の東アジアの知識人の文化生産にかかる移動に着目し、彼／彼女らの移動経験及び緊迫化した状況下での文化的実践の意義を動態的かつ多ジャンル横断的に検討するものである。各ジャンルを専門とする発表者が、歴史的実証・表象分析・メディア研究などの方法・視角から、四つのケーススタディを報告する：①「軍楽隊と戦後日本オーケストラとの関係――マキノ雅弘『野戦軍楽隊』（1944）から今井正『ここに泉あり』（1955）へ」（星野幸代）②「国交回復前における日本演劇人の訪中：千田是也の軌跡（1955～1960）を手がかりに」（楊韜）③「冷戦期台湾の日本映画受容：石原裕次郎の台湾訪問（1962）を中心に」（朱宇正）④「学生訪中団「斉了会」の中国体験と情報の再構築（1965～1972）」（温秋穎）。各報告は、戦後直後から日中国交正常化までの約30年間を時系列に、音楽人・演劇人・映画人・大学生といった異なるジャンルの知識人にかかわる諸事象を扱うが、そこから多面的状況が浮かび上がる。各ケーススタディの事例を踏まえて、総合討論では、歴史的背景、同時代の身体／言語／映像の諸コンテンツのあり方、移動する知識人による文化的実践の産出メカニズムを包括的に考える。

## [発表１]　軍楽隊と戦後日本オーケストラとの関係-マキノ雅弘『野戦軍楽隊』（1944）から今井正『ここに泉あり』（1955）へ

星野幸代(名古屋大学)

『野戦軍楽隊』は戦中に軍楽隊を描いたという意味で貴重な映画である。日本軍の楽隊の多くは戦場死したが、生き残って中国大陸、シベリア抑留から帰国した人々は、『ここに泉あり』で描かれたように、日本のクラシック音楽文化を育成した。一方で、彼らの一部が宮内庁の楽団を経て現在のＮＨＫ交響楽団に配属される状況は、戦時を引きずっていたと言える。

【パネル4】

## [発表2]　国交回復前における日本演劇人の訪中：千田是也の軌跡（1955-1960）を手がかりに

楊韜(仏教大学)

千田是也は戦前新築地劇団で活動し、戦後俳優座のリーダー的存在として活躍した。一方、演劇活動の傍ら、千田是也は戦後における日中文化交流に尽力した民間外交家でもある。千田是也の三回の訪中歴（1955・1958・1960）から、彼が携わった交流活動ならびに交友情況の実態や特徴を明らかにすることができる。

## [発表3]　冷戦期台湾の日本映画受容：石原裕次郎の台湾訪問（1962）を中心に

朱宇正(名古屋大学)

1958年の金門砲戦を背景として、日台合作で製作された映画『金門島にかける橋』は、国民党政府の反共路線と植民地時代の日本に対する記憶が交差する、冷戦とポストコロニアリズムの矛盾を示す一例として考えられる。主演俳優・石原の台湾訪問と撮影活動を中心に、当時台湾メディアに現れた言説の分析を通して、冷戦期の日台関係における文化的実践の様態を理解することができる。

## [発表4]　学生訪中団「斉了会」の中国体験と情報の再構築（1965-1972）

温秋穎(京都大学)

「斉了会」は、日中国交正常化前に計8回にわたって中国各地を訪問した、関東地方の大学生を主体とする民間団体である。「斉了会」による自主的な訪中は、大学生のサークル活動、日中友好運動と緊密に連動しており、その行動と認識には、当時の日本政府がとっていた対中国政策や日米安保体制に対する反発、一般世論の「誤った中国認識」を是正しようとする中国理解と日中友好の志向が見られる。

【パネル5】

# Undoing Borders−危機と節合の境界、あるいはポスト国民国家における非−国境的市民のゆくえ

**[パネル概要]**

2024年末、日本の外国人人口は過去最高の約377万人を記録、人々の移住が加速している。就中、朝鮮半島からの移住は1世紀以上の歴史を持ち、背景事由や生活形態も多様化の一途を辿る。背景にはむろん、低賃金労働に餓える資本の欲動があり、国内では「国益」を享受できない庶民が移住者への恫喝を日常化させている。「国境」はついに収奪/被収奪の恣意的な遮断装置たり続けるのか。本パネルでは、日本との繋がり/断絶を強いられた「コリアン」を主題に、「日本人/朝鮮人」「オールド/ニューカマー」「植民者/被植民者」など国内外に偏在する境界がいかに変容、維持されるのかを検証、システムとしての国境線を市民権との関わりで多角的に考究する。まず竹田は、半島南部からの移住と離散をどう血縁ネットワークが再接続、補填するのか、非−公的な市民の力が持つ意義を追跡。柳川は冷戦期の「正規の」移住の実態とその受入れ政策過程を新資料に拠って検証する。韓は、ニューカマーが植民地期起源の在日コリアンと歴史的継続性を共有可能なのか、その通時性の質を分析。金は、日本の社会運動における通有の「市民」概念が在日コリアンに対して抑圧概念として機能した点を解明する。太田は、庇護国家を欠くディアスポラ集団についてパレスチナ人民と比較、その脱−国境的地位と展望について考量する。討論者の辻は、韓江をはじめとする日韓の思想・文学に現れる痛覚が、歴史を超える連帯たることを示し、喫緊の国際的負託に応える議論のステージを形作る。以上の多角的視座を通じて、寛容と危機の琴線たる国境が21世紀にいかなる問題をはらむのか、国民国家の帰趨を視野に、議論提示する。

**[発表１]　朝鮮半島出身者の海を跨いだ親族ネットワークと国境・出入国管理−海を跨いだ離別と再会、そしてその後**

**竹田響(京都大学)**

本発表では、日本による朝鮮半島の植民地支配に端を発し、海を跨ぐ形で親族が離散した朝鮮半島出身者の親族ネットワークがどのように構築されているのかを、国家による出入国管理の変遷と共に明らかにする。日本の内地に渡ってきた朝鮮半島出身者の9割以上は元々の出自が朝鮮半島の南部にある。これらの人びとを大日本帝国政府ならびに日本軍は、第二次世界大戦期に旧樺太・北海道を含む日本全土、ならびに南洋諸島にまで移動させた。1945年に日本の敗戦となるも6年後に朝鮮戦争が勃発、その後大韓民国では軍事政権が敷かれ、日本に暮らす朝鮮半島出身者には「棄民政策」と呼ばれる無関心政策を推進した。一方の朝鮮民主主義人民共和国では1957年から日本に暮らす朝鮮半島出身者に対して「教育援助費」と呼ばれる支援金の贈与を開始、その後1959年から1984年にかけて、日本に暮らす朝鮮半島出身者の朝鮮民主主義人民共和国への「帰国事業」が行われた。その結果元々の出自が朝鮮半島南部にあった人びとの親族の離散が朝鮮半島北部にも広がることとなった。本発表では国境を跨いだ移動に関する議論を元に親族ネットワークの変遷と人びとの葛藤を考察する。

【パネル5】

## [発表2]　私たちは日本に入れますか？−冷戦期における韓国籍の在韓日本人女性とその子どもたちの移住と戦後日本の移民受け入れ

柳川・みん大貴(一橋大学)

本発表では、朝鮮人男性との婚姻で韓国籍となり朝鮮戦争の戦禍を逃れるため韓国から日本を目指した日本人女性とその子どもたちの移住をめぐる政策的な議論と運用を事例に、戦後日本の移民政策における受け入れの論理の形成過程を検討する。近年、日本への人の移住が加速している。その中、日本の移民研究では経済発展と労働市場の拡大を背景に1970年代以降に増加した「ニューカマー」の移住とアジア諸地域の植民地支配を背景に戦前から居住する「オールドカマー」の移住に関し検討が各々行われてきた。一方、冷戦を背景に日本への移住が厳格に規制された1950-60年代は研究の空白地帯とされ、その大部分は「非正規」に行われたと考えられている。そこで、本発表では朝鮮戦争中に入国を許可された約700人の韓国籍の在韓日本人女性とその子どもたちに着目し、誰が「正規」に移住できたかという視点からこの時期の移住を問い直す。ジグムント・バウマンがモビリティの格差をグローバル化する社会の格差の一つとして指摘する中、かれらの移住は現代に繋がる日本の移民受け入れの選別をめぐる論理が、その草創期にいかに形成されたかを検討する一助となる。

## [発表3]　韓国系ニューカマー第二世代にとっての「韓国人であること」の意味

韓在賢(京都大学)

本発表は、韓国系ニューカマー第二世代が「韓国人」「日本人」「在日(コリアン)」の間で、状況依存的に他者から位置付けられ、自らを位置付ける実践を通して、これらの境界が解体・構築される過程を明らかにする。韓国系ニューカマーは1980年代以降に来日した集団を指し、第二世代は日本で生まれ育った者が多い。日本で外国人として生まれ育った背景は、「在日(=オールドカマー)」と類似しており、その類似性から、第二世代が自らを「在日」と位置付けたり、他者から位置付けられる様子が見られる。一方で、「在日」と距離を取ったり、区別する者も見られ、「在日」という境界が、ニューカマーとオールドカマーとの交渉において変容する様子が確認できた。スチュワート・ホールは、文化的アイデンティティを「歴史が介在してきたがゆえに『私たちがなってしまったもの』」と捉えることで、「植民地経験」のトラウマティックな性格を理解することができると主張した。本報告では、ホールの視座を取り入れ、同民族集団内でも、歴史（移民背景）が異なることで分裂したり、連帯したりする現代の「在日」の特異な在り方を、ニューカマー第二世代の語りから明らかにする。

【パネル5】

## [発表4]　日本の社会運動における「市民」とは誰か−不可視化される在日コリアン

金裕賢(大阪公立大学大学院)

本発表では、在日コリアンに関する社会運動を事例に、日本の社会運動研究や運動の現場で言及される「市民」概念が在日コリアンをいかに不可視化しているのかを明らかにする。これまでの日本の社会運動においては、1960～70年代に浮上した安保闘争やベトナム反戦運動を契機として、理想的な運動主体としての「市民」が研究者や運動家によって構想され肯定的に描かれることが多かった。一方、在日コリアンに関する社会運動においては、1970年代から80年代にかけて当事者間で「定住志向」に関する議論が本格化するにつれて、自らを「住民」や「市民」として位置づけるような言説が形成された。近年、「多文化共生」に関する議論では、運動体や行政、社会全体に広く共有されている「日本人／外国人」という二項対立的な構図を問い直す動きが進んでいる。他方で、社会運動研究や運動の現場ではこのような二項対立に疑義を呈することなく、その結果「市民」とは誰かを問う議論はほとんど行われてこなかった。以上の議論を踏まえ本発表では、「市民」概念を再考することで、在日外国人を含むあらゆる背景・経験を持つ人びとによる社会運動への発展可能性を考察する。

## [発表5]　庇護国家を持たないディアスポラ集団−パレスチナ人と在日コリアンの比較から検証する新たな集団性

太田紗菜(東京大学)

本発表では「庇護国家を持たないディアスポラ集団」という視座から、在日コリアンとパレスチナ人の歴史的経験を比較し、植民地主義との「戦い」から見いだされた新たな集団性について検証する。ディアスポラ集団は、エスニックな集団でありつつ、ホスト国の民族国家観に疑義を呈し、新たな国家形態へと修正を迫ってきた存在であり、在日コリアン、パレスチナ人いずれもその役割を果たしてきた。一方で彼らは、庇護国家を欠き、あるいは事実上存在せず、「祖国の建国」を志向してきたという点で、他のディアスポラ集団ではとは異なる傾向を見せる。そしてこの点はディアスポラ論の代表であるロビン・コーエンと彼に続く議論においても看過されてきた。そこで本発表は、先行研究に欠落していた庇護国家の不在という共通の尺度から、とりわけホスト国が人々に付与してきた法的地位とその変遷に着目し、その影響下にあった個人と共同体が、如何なる葛藤やスティグマを経験してきたのかについて議論する。これらを通じ、両者が祖国を希求してきたことの意義を植民地主義との「戦い」において再考し、植民地の犠牲となってきた人々の経験をあらたな形で歴史化、問題提起したい。

【パネル6】

# 同盟、パートナーシップ、ネットワークがつくる東アジア
## －中国と日本の新動向

**[パネル概要]**

2025年１月に第2次トランプ政権が発足して以来、突然の高関税政策など、アメリカ第一主義を露骨に推し進める内政・外交に東アジア各国が振り回される状況が続いている。米国のリベラルな国際秩序を維持する意思と能力の低下は、中国やロシアの覇権主義的行動とあいまって国際情勢をいっそう流動化させている。ロシアとの関係を強化した北朝鮮は、事実上の核保有国として地域安全保障の脅威となっている。同時に、日本、韓国、台湾など民主主義国家の内政は混乱気味で、それは地域情勢のさらなる不安定化を招きかねない。

本パネルは、このように不透明感を増す東アジア地域で、地域を構成する諸国がどのように対応しているのかを明らかにする。具体的には、中国と日本がアジア太平洋の地域諸国との間に構築してきた、またはしつつある同盟やパートナーシップ関係に焦点を当て、その相互作用がどのような国際関係を生み出しているのかを考察する。渡辺報告は、中国と各国のパートナーシップの名称とその推移を分析することによって、中国のパートナーシップの階層性と個別の2国間関係の実体を明らかにする。李報告は、日本社会の北朝鮮に対する否定的なイメージの深まりが、冷戦後の日本の安全保障政策の段階的な変容の大きな要因になったことを指摘し、日朝間の相互作用が近隣諸国との安全保障関係にも波及的な影響を及ぼしていることを論じる。楠報告は、日本が米国以外の友好国や地域諸国との間でパートナーシップ関係を構築する一方で、日本が深化と拡大を続ける日米同盟のなかで自立性を高めようとしている現状を分析し、日本がいかなる地域秩序をめざしているのかを考察する。

### [発表１]　中国のパートナーシップ外交にみられる二国間関係の階層構造

渡辺紫乃(Sophia University)

中国は江沢民政権期の1993年にブラジルとの間で最初の戦略的パートナーシップ（「戦略夥伴関係」）を締結して以来、多くの国とパートナーシップ関係を構築している。そして、2016年では97の国と国際機関とパートナーシップを樹立、今日までに中国が国交を樹立している183国のうち、100ヵ国以上の国とパートナーシップ関係にある。当初は相手国との関係強化を示す用語であって体系的な概念ではなかったが、多くの国との間でパートナーシップを樹立する中で、次第にパートナーシップの名称が多様化していった。そして、「戦略」や「合作」という用語の有無や「夥伴関係」を形容する表現の違いにより、中国と相手国との関係性が反映されるようになった。本報告では、中国と各国のパートナーシップの名称とその推移を分析することで、中国のパートナーシップには階層性があること、現時点でのパートナーシップの名称により中国と相手国のパートナーシップの性質や関係性の実体がわかること、中国の対外関係のなかでの各国の相対的な位置づけが明らかになることを示し、中国の二国間関係の全体像を展望する。

【パネル6】

## [発表2]　「安全保障のワクチン」としての北朝鮮ー日本における脅威認識と政策転換の系譜

李承赫(東北学院大学)

過去20年にわたり日本社会において北朝鮮に対する否定的なイメージが深まったことは、冷戦後の日本の安全保障政策が段階的に変容するうえで、社会および政府の双方に一定の正当性と動機づけを提供してきた。この過程は、北朝鮮が皮肉にも「安全保障のワクチン」とも言うべき機能を、先取り的に果たしたと見ることができる。本報告では、北朝鮮が日本の国家安全保障政策の方向性を規定するうえで、中国やロシアと同等に重要な要因であると主張する。
本報告ではまず、戦後日本における日朝関係の歴史的展開を、社会的・政治的両面から概観するとともに、北朝鮮をめぐる諸問題が一貫して日本の国内政治と密接に関係してきたことを明らかにする。次に、2000年代における日朝関係の展開や世論の変化が、日朝関係の性質を大きく変化させた転換点であったことを強調する。最後に、本報告ではこのような歴史的展開が、現在の日本による北朝鮮の安全保障上の脅威への対応にいかなる影響を与えているかを検討し、あわせて日朝間の相互作用が日本の近隣諸国との安全保障関係にも波及的な影響を及ぼしていることを論じる。

## [発表3]　緩やかな多国間同盟？－日米同盟における日本の自立性の拡大とパートナーシップ形成

楠綾子(国際日本文化研究センター)

2010年代に入るころから、アジア太平洋地域にはハブ・アンド・スポーク型システムの枠外で二国間またはミニラテラルな防衛・安全保障協力が発展した。ハブ・アンド・スポーク型システムは安全保障上の利益を共有する諸国を巻き込みながらネットワーク化している。また、人道援助・災害救援（HA/DR）や海賊対策、越境犯罪、テロ対策やPKOなどの分野別の機能的協力関係は、ハブ・アンド・スポーク型システムとは異なる次元で、さまざまな安全保障上の要請に応える役割を担っている。
一方、2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻以後、日米の同盟関係にはあらたな傾向がみられるようになった。ひとつは、拡大抑止の維持・強化をめぐる協議が活性化したことである。もうひとつは、日本が「防衛力の抜本的強化」に踏み切ったことである。本報告は、日本が米国以外の友好国や地域諸国との間でパートナーシップ関係を構築する一方で、日本が深化と拡大を続ける日米同盟のなかで自立性を高めようとしている現状を分析し、日本がいかなる地域秩序をめざしているのか、また日本の同盟政策の変容が日米関係のなかでどのような意味をもつのかを考える。

【パネル8】

# 近現代日本文化と言葉の多様性

## [パネル概要]

本パネルは、文学、思想、応用言語学、応用色彩学の観点から近代日本の文化と言語の多様性を考察するものであり、その内容はおおよそ以下の通りである。まず、近現代日本文化と言葉の多様性を考える上で、村上春樹の「小確幸」は異文化間コミュニケーションの変容を示す好例である。台湾では日本語を知らない人も「小確幸」を理解し、日常の小さな幸せという意味が共有されている。台湾では、それが社会や時局に対する感謝や願望表現として発展している。これは台湾独自の視点による解釈の広がりであり、異文化間のトランスフォーメーションの一例である。次に明治期、一神教信者ら宗教界は現人神天皇と神道思想に直面し、回避・妥協・受容の対応を示した。新渡戸稲造は天皇の神性を回避しつつ、民主主義を武士道に調和させた。他方、矢内原忠雄と牧口常三郎は信仰に基づき天皇の神性を批判した。本発表は両者の言論を分析し、天皇制イデオロギーへの逆襲を考察する。さらに、台湾の金門・馬祖は冷戦期の戦地文化を伝える地域で、世界遺産候補に注目される。観光と文化保存の両立が課題となる中、日本語ガイド整備の重要性が増す。本発表は現地調査とアンケート通じガイド内容や多言語対応課題分析し、SDGs理念基づく持続可能観光モデル構築を目指す。また、「隠逸」をめぐる明治日本の言論空間に着目し、日本近世までの隠逸思想と隠者文学が、明治の言論・思想界においてどのように評価されたかを分析することによって、日本近世と近代との連続と断絶を具体的に提示したい。加えて、女性ファッション誌の色彩表現を分析し、近現代日本社会における色彩表現の使用実態を明らかにすることを目的とする。

## [発表１] 異文化間コミュニケーションのトランスフォーメーションとしての村上春樹の「小確幸」

曾秋桂(淡江大学)

近現代日本文化と言葉の多様性についは考える際、異文化間コミュニケーションのトランスフォーメーションが起きた現象としての村上春樹の「小確幸」が好例である。日本と同じく漢字圏の台湾社会では、日本語を勉強したことのない台湾人でも、「小確幸」 を簡単に額面通りに受け取れている。台湾における「小確幸」受容の分析に当たり、台湾の新聞記事に出た「小確幸」を予備調査した所、以下のようなことが言える 。日常茶飯事の一齣として味わった「小さくはあるが確固とした幸せ」 と村上春樹が定義した「小確幸」は台湾でそのまま継承されているが、さらに、「小確幸」が社会、政府、時局に向けて、小市民としての小さな願望を表して、それが叶わせてくれた時の有難さ、感謝、喜び、言わば感謝の意味を込めて表現するようになった。このように、社会との関わりを視野に入れなかった村上春樹のただ個人の日常茶飯事から得た「小確幸」が本来持った意味の他に、台湾の独自的な視点を付け加えられ、社会との関わりまでに拡大解釈し、起きたトランスフォーメーションとして捉えるべきであろう。

【パネル8】

## [発表2]　天皇制イデオロギーへの逆襲

簡暁花(中華大学)

現人神天皇と神道などの伝統的思想を中心とした天皇制イデオロギーから衝撃を受けた明治期の宗教界、特に一神教信者においては、回避、妥協、受容などさまざまな思想的様相が見られた。『武士道』の著者である新渡戸稲造はその最も代表的な人物であり、彼はイデオロギーとの妥協に苦心し、「現人神」天皇の神性問題を回避しつつ、最終的に「国体」と矛盾しない新しい武士道・平民道として民主主義を解釈した。しかし一方で、新渡戸主催の読書会に出入りしていた二人の後輩、矢内原忠雄と牧口常三郎は、自らの宗教的信念を貫くため、天皇の神性を公然と批判した。従来の研究では、天皇制イデオロギーと妥協した新渡戸による「仮面武士道」がすでに指摘されているが、その妥協派の周辺に現れた天皇制イデオロギーへの逆襲は、いまだ明らかにされていない。本発表では、矢内原忠雄と牧口常三郎による天皇の神性への批判的言論を分析することによって、天皇制イデオロギーへの逆襲の一端を明らかにしようとする。

## [発表3]　台湾の世界遺産候補地・金門・馬祖における戦地文化ガイドの現状と課題

林玉恵(輔仁大学)

台湾の金門および馬祖は、冷戦期の最前線として独自の戦地文化を築き上げ、現在ではその歴史的価値から世界遺産候補地として注目されている。近年、これらの離島地域では、戦地文化資源を活用した観光振興と文化保存の両立が課題となっている。新型コロナの影響で国内旅行が主流となり、離島観光が人気を集めた一方で、環境負荷や観光の質に関する問題も顕在化した。感染状況の緩和により再び海外旅行志向が高まる中、離島地域は新たな観光戦略の構築を迫られている。本発表では、金門・馬祖における戦地文化ガイドに着目し、現地調査や観光客へのアンケート調査結果を踏まえ、ガイドの解説内容や日中両言語対応の現状と課題を分析する。特に、日本人観光客は台湾での消費額が高く、観光産業への貢献も大きいため、質の高い日本語ガイドの提供は急務である。今後は、地域住民との連携によるガイド体制の強化や、文化的背景の違いを考慮した分かりやすく魅力的なガイドの構築、持続可能な観光人材の育成が求められる。本発表は、SDGsの理念に基づき、戦地文化を活かした平和教育の推進や地域アイデンティティ深化につながる持続可能な観光モデルの実現を目指すものである。

【パネル8】

## [発表4]　「隠逸」をめぐる明治日本の言論空間

陳璐（早稲田大学）

古代から近世まで根強く存在していた隠遁・隠逸思想は、西行、鴨長明、松尾芭蕉らの隠者文学を支えてきた思想的支柱であった。明治日本の西洋化に伴い、特に西洋浪漫主義を受容する際に文学者らが直面した重要な課題の一つは、近世まで続いた隠逸思想や隠者文学をどう評価・再評価するかということであった。本発表では、明治日本における「隠逸」の言論空間を再現し、伝統と近代の葛藤に揺れる明治期イデオロギーに対してこの側面から光を当てる試みを示したい。具体的には、明治初期浪漫主義の拠点である『文学界』や『明星』、また同時代の『国民之友』、『女学雑誌』、『帝国文学』、『太陽』などの雑誌に発表された西行、鴨長明、吉田兼好、芭蕉ら中世・近世の隠逸詩人をめぐる論評、そして「隠逸」をめぐる言説・評論群を精査し、明治の知識人が中世・近世の隠逸詩人と伝統的隠逸思想をいかに評価したかを分析する。これによって、近世と明治の連続と断絶を具体的に示そうとする。

## [発表5]　女性ファッション誌における色彩表現について

陳祥（日本国際学園大学）

私たちの生活には色があふれており、色は視覚的要素としてだけでなく、感情や意味を伝達する重要な手段として使われている。色には固有の象徴性が備わっている一方で、それが喚起するイメージは、時代や社会的背景によって変化する可能性がある。近現代の日本社会において、色彩がどのように表象され、どのようなイメージとともに受容されてきたのかについては十分に解明されているとは言えない。そこで本発表では、女性ファッション誌に掲載された色彩表現を網羅的に収集・分析し、近現代日本社会における色彩表現の使用実態を明らかにすることを目的とする。

【パネル9】

# 20世紀半ばにおけるローカルメディアと文化生産：有線放送を事例に

## [パネル概要]

今、世界各地でフェイクニュースのもたらす分断と対立が深刻化している。メディアは、多様な「我々」というアイデンティティを作り上げる機能を持ち、社会に連帯だけでなく時に危機をもたらす。いかに市民のリテラシーを高めるかも重要な課題であるが、メディアの歴史から現代の「我々」のあり方を相対化する視座が得られないだろうか？

テレビが普及するまで、ラジオはひときわ重要なメディアであった。日本のラジオは肉声を通じて総動員に応じる帝国臣民を作り上げていく国民化の装置でもあった。一方で、20世紀半ばの日本の農村部において有線放送ラジオという、コミュニティ内部だけで通話とラジオ聴取が可能なメディアが普及していたことはほとんど忘れられている。

戦時期にラジオの共同聴取から始まった有線放送ラジオは、1950年代に広がり、探し物や物故者情報、火災の通知などローカルな情報を共有すると同時に、自主番組と呼ばれた独自プログラムを作成し放送していた。村々に、たくさんのプロデューサーやアナウンサーがいた。20世紀半ばの農村部にこそ、極めてローカルな「我々」を作り出すメディアが存在したのである。

本パネルでは、まず鄭知喜が北海道における占領期の共同聴取システムの発達を扱い、次いで安岡健一が1960年代の日本農村に普及した有線放送番組を取り上げる。松本章伸は沖縄県に展開した親子ラジオを取り上げる。これらの検討を通じて、戦後日本が抱えた地域差や冷戦について考察することができる。以上の報告に、キアラ・コマストリがコメントを加え、ローカルな文化生産がもたらした多層的なアイデンティティをめぐって参加者との意見交換を行いたい。

## [発表１]　不均等発展とローカルの生きられた経験：占領期北海道におけるラジオ共同聴取

鄭知喜（ソウル大学）

本発表は米軍占領期北海道で行われたラジオ共同聴取という草根ローカルメディア実践に注目し、民主・平和・繁栄で象徴される日本の「戦後」という時空間が形成される過程に予期せぬ屈折と亀裂が存在したことを照明する。共同聴取施設は親機で受信した放送をスピーカーを設置した各戸に架空線で伝送し、配電線や受信機なしでも聴取できるように設計された再送ネットワークを指す。主に無電化地区や僻地の難聴地域で使われた。その施設数が最も多かった北海道の場合、親機のマイクを通じた自らの放送やスピーカーを使った「開放的相互通話」にも活用された。先行研究でこの施設は北海道の「後進性」の副産物或いはGHQによる放送「マイクの開放」の結果とみなされた。本発表はGHQの北海道地区民事部資料を発掘し、北海道の共同聴取が占領当局が承認したことのない、ローカルの放送専有事例であることを明らかにする。また、米国の冷戦的覇権下で「進歩する時空間」としての「戦後」という物語に還元できない様々な層位の時間と経験が重なって共存する現象を示す事例であり、こうした共存が「後進性」の証拠ではなく、近代性が伴う不均等な発展の表出であることを論じる。

【パネル9】

## [発表2]　有線放送自主番組にみる農村文化活動

安岡健一(大阪大学)

1950年代半ば以後、「昭和の大合併」を経て拡大した農山村のメディアとして、国の新農山漁村建設計画に基づき有線放送網が普及した。ラジオの共同聴取システムは、戦後に通話機能が付与されることで、電話の代替機能を持つようになっていた。当時は、電話の普及はまったく遅々としていたため、有線放送は農業協同組合を主な受け皿として急速に広がり、1960年代末に2000以上の放送施設が320万の加入者を持っていた。本報告では、長野県南部の下伊那地域に存在した有線放送番組を素材として、その実態を紹介し、メディアの意味を考察する。有線放送では農村メディアとして様々な中央からの情報が届けられるとともに、地域住民は生活の微細な情報を共有していた。そこでは、戦争犠牲者の語りや若者たちが作り上げた劇作品、そして地域の災害を祈念した。高度成長期に多くの人が流出し、また機械化が進展することでそれまでの農業のあり方が変化していっても、地域の人々の強い地元意識は変わらなかった。コミュニティFMや、ミニコミが流行する以前の時代の地域の文化生産者たちに注目する必要がある。

## [発表3]　ハイパーローカルな有線放送に宿るグローカルな眼差し

松本章伸(早稲田大学

第二次世界大戦後の米国統治下の沖縄において、家庭にスピーカーを設置し、地域単位で放送を共有する有線放送施設（通称、親子ラジオ）が、琉球列島米国軍政府（以下、米軍政府）によって1950年代頃から100ヶ所以上の地域に導入された。こうした施設は、米軍政府が制作指導を行なった無線の「琉球の声」放送局による放送を補完することを目的としていた。運営は、役場の職員や電気店の店主をはじめとする一般市民が主体となって行われていた。運営のための活動資金は、毎月聴取者から徴収される聴取料よって賄われていた。加えて同施設は、米軍政府制作の番組を放送するだけでなく、地域情報の伝達機能も担っており、日常生活に深く根ざしたメディアの一つだったと考えられる。本報告では、沖縄北部の地域一帯において、地域の音や声を集めて番組を制作、放送していた有線放送施設の一つ、渡久地親子ラジオ社による470時間を越える有線放送番組の音源を手がかりにする。米国統治と冷戦が交差する時代の沖縄において、有線放送はどのような文化を形成し、いかなる文化が番組からこぼれ落ちたのか、その過程を番組形式とトランスナショナルな視座から明らかにする。

【パネル10】

# 映画文化と沖縄
## ―戦後から1980年代にかけての歴史と政治、そして表象の交錯

**[パネル概要]**

本パネルは、戦後から1980年代にいたる沖縄のローカルな映画文化、さらには日本本土や台湾といった外部からの視点で描かれた沖縄表象を対象とし、それらの歴史的・政治的文脈における意義を探究する。かつては琉球王国と呼ばれる独立国だったものの、明治時代に日本に併合された沖縄は、第二次世界大戦後から1972年5月までの27年間にわたってアメリカの統治下におかれた特異な歴史を有する。映画においては、日本復帰や東アジアの文化交流といった文脈のなかで、沖縄はしばしば政治的抑圧や異文化の交流の舞台として描かれてきた。米軍統治期の教育映画、沖縄を舞台とした日本と台湾の合作映画、沖縄の米軍統治をアレゴリカルに表現した日本映画の沖縄での受容、女性アクション映画における香港や沖縄のエギゾティックな風景の意義、平和教育アニメーション映画におけるジャンル性とオーサーシップという多角的な視点を通して、映像のなかの沖縄が地域の特異性とグローバルな文脈をいかに橋渡ししてきたかを体系的に分析する。これらの発表は、沖縄をめぐる映画が多様なテーマを通じて地域の歴史的経験を反映し、グローバルな対話と抵抗の場を構築してきた過程をあきらかにするだろう。沖縄の映画文化と映画に表象される沖縄の双方がもつ重層的な意義を把握し、その現代的価値を学術的に再評価する作業を通して、単なる地域文化のケース・スタディーを超えた東アジアの地政学をめぐる学術的議論に貢献することこそが、本パネルの目的である。

**[発表１]　米統治期沖縄における教育映画政策**

**名嘉山リサ(和光大学)**

一九六〇年代に日台合作映画は合計四〇本である。二〇一九年、米国のサンフランシスコで日台合作映画『琉球の恋』と『夕陽西下』が発見された。

戦後台湾の権威主義において、国民党が中国語（国語）を推進するため、政府や国民党に属する映画会社は中国語映画を製作したが、日本映画会社と合作した映画は「反共大陸」に関する背景を内容とした作品である。それに対し、台湾語映画は主に中小規模の民間会社が低予算で製作したが、日本映画会社と合作した映画はロマンスやアクションなどの作品である。

一九六〇年代に入り、中国語映画はカラー映画になったが、ほとんどの台湾語映画はまだ白黒映画である。言い換えると、『琉球の恋』と『夕陽西下』は貴重なカラー台湾語映画である。本報告では、以下の問題を分析する。まず、なぜ多くの台湾語映画は白黒映画なのか。次に、『琉球の恋』と『夕陽西下』の人物や時代の設定を台湾の文脈において分析する。最後に、一九六〇年代日台関係の視点から『琉球の恋』と『夕陽西下』を含む日台合作映画を探究する。

【パネル10】

## [発表2]　『琉球の恋』と『夕陽西下』から一九六〇年代の日台合作映画を探究する

李政亮(政治大学)

武智鉄二が監督した映画『黒い雪』（1965）は、日活系映画館での公開後にワイセツ映画として警視庁の摘発を受けた。捜査の手は武智や日活だけでなく映倫にまで及び、日本の映画業界は激震に見舞われる。その後の裁判では「芸術かワイセツか」が争点となり、被告側の証人として三島由紀夫や大島渚が出廷するなど、社会的な注目を集めた。

この映画は「米軍基地周辺の娼家に育った一青年の歪められた青春を通じて、現代の日本の状況を描かんとしたもの」という触れ込みだった。そして本作に「反米民族主義」の主張を込めたとする武智監督は、摘発と裁判について「エロ摘発に名を借りた反米思想の弾圧だ」と検察を批判し、作中の一場面がアメリカの暴力的沖縄侵略を象徴していると主張した。

『黒い雪』は東京での封切りから2か月半後、未だ米軍統治下に置かれていた沖縄でも公開される。そして現地の新聞では、この映画に対する反響や裁判の経過が報じられた。本発表では映画『黒い雪』が沖縄でどのように受け止められたのかについて、当時の社会的・政治的状況を踏まえながら分析を行う。

## [発表3]　沖縄における映画『黒い雪』の受容

世良利和(法政大学)

武智鉄二が監督した映画『黒い雪』（1965）は、日活系映画館での公開後にワイセツ映画として警視庁の摘発を受けた。捜査の手は武智や日活だけでなく映倫にまで及び、日本の映画業界は激震に見舞われる。その後の裁判では「芸術かワイセツか」が争点となり、被告側の証人として三島由紀夫や大島渚が出廷するなど、社会的な注目を集めた。

この映画は「米軍基地周辺の娼家に育った一青年の歪められた青春を通じて、現代の日本の状況を描かんとしたもの」という触れ込みだった。そして本作に「反米民族主義」の主張を込めたとする武智監督は、摘発と裁判について「エロ摘発に名を借りた反米思想の弾圧だ」と検察を批判し、作中の一場面がアメリカの暴力的沖縄侵略を象徴していると主張した。

『黒い雪』は東京での封切りから2か月半後、未だ米軍統治下に置かれていた沖縄でも公開される。そして現地の新聞では、この映画に対する反響や裁判の経過が報じられた。本発表では映画『黒い雪』が沖縄でどのように受け止められたのかについて、当時の社会的・政治的状況を踏まえながら分析を行う。

【パネル10】

## [発表2]　風景の中の女、女たちの空間 － 戦後日本の女性アクション映画の変遷について

黄均啟（釜山大学映畫研究所）

本発表は、東アジア映画における女性アクションの系譜という大きな枠組みの中で、日本映画における女性アクション映画の身体性および空間性の変化に焦点を当て、考察を行うものである。とりわけ1960年代後半から1970年代にかけて、映画産業の斜陽化が進行する中に登場した女性アクション映画は、従来のジャンル的特徴――特に任侠映画や時代劇――を受け継ぎながらも、女性の身体が能動的に暴力を行使し、空間を横断する主体として再構築されるという新たな様相を示している。これらの作品群は一括りにし難い多様性を示しながら、いずれも女性身体がアクションを通じて社会規範を越境する姿を描いている。さらに注目すべきなのは、これらの映画が設定する物語の空間に見られる変化である。かつての「日本的な風景」に代わって、香港、沖縄、あるいは新宿といった異国的または都会的で匿名性の帯びる空間が映画の舞台となった。本発表では、このような時代背景および空間設定の変容と、アクションの主体としての女性身体の表象との相互関係を明らかにした上で、女性アクション映画のジャンル的試みとその意味を解明していきたい。

## [発表3]　『対馬丸−さようなら沖縄−』におけるオーサーシップとジャンルとしての平和教育アニメ

藤城孝輔（広島大学）

『対馬丸―さようなら沖縄―』（小林治監督、1982年）は、1944年8月22日に沖縄から九州へと向かう疎開船「対馬丸」が米軍により撃沈され、学童集団疎開の784名を含む1484名が死亡したとされる事件を描いたアニメ映画である。沖縄初の芥川賞受賞作家として知られる大城立裕が嘉陽安男、船越義彰とともに上梓した共著書『悪石島　疎開船学童死のドキュメント』（1961年）を原作とし、大城はアニメ作品の制作に際しても資金集めの募金活動に参加するなど奔走した。だが、劇中で原作者としてクレジットされているのは大城一人である。また、1982年に『対馬丸』に改題、改稿された版においては、奥付にこそ三名の氏名が見られるものの、表紙を飾る著者名は大城のみである。またアニメの映像を使用したアニメ絵本版『対馬丸　さようなら沖縄』も大城の単著として位置づけられている。本発表では、大城の芥川賞作家としての知名度を必要とした映画の制作背景と関連づけて以上のようなオーサーシップの変遷をたどる。さらに、作家性とは対極的なものとして見られがちなジャンル映画として本作を分析し、同時代の平和教育アニメとの共通点を明らかにする。

【パネル11】

# 東アジアからみた日本美術−外来文化輸入の再検討−

[パネル概要]

## [発表１]　神変からみた東大寺大仏蓮弁線刻画 −東大寺二月堂本尊光背線刻画との比較を中心に一

閻志翔(京都大学人文科学研究所)

東大寺大仏の銅製台座蓮弁の請花28枚それぞれには、大海に浮かぶ大蓮華に坐る1躯の如来と、22躯の菩薩衆、またこの大蓮華によって包括される三千大千世界が刻まれている。蓮弁線刻画（天平勝宝8歳〔756〕8月から翌年正月までの間に制作された）の典拠に関しては、これまで数多くの解釈が提示されてきたが、その図様が『梵網経』に説かれる世界観とよく一致している点に関しては、ほぼすべての研究者が同意している。そして、そこには鑑真来朝に伴う『梵網経』重視の影響が及んでいると早くに指摘された。

発表者は以前、線刻画全体の図様について、『華厳経』「十地品」に説かれる第十地に至った菩薩の神変として新たに解釈し、第十地の菩薩の神変と『梵網経』の世界観が蓮弁線刻画に重層的に表現されていると指摘した。この成果を受け、本発表では、華厳思想と密接に関わる「観音の神変」を基本構想とする東大寺二月堂本尊光背線刻画（8世紀後半）を取り上げ、蓮弁線刻画と二月堂本尊光背に共通する神変のイメージを詳しく検討する。その上で、大仏蓮弁線刻画の図様に反映される、日本における『梵網経』受容の独特な様相をさらに明確にしたい。

## [発表2]　桓武・嵯峨朝における王羲之受容論再考 −入唐僧の請来書跡との関わりから−

陳雪湊(渥美国際交流財団)

古代における日中書法交流史の議論では従来、正倉院所蔵の『東大寺献物帳』に記載された王羲之の諸模本、及びそれを基盤とする王羲之書風の受容が重点的に論じられてきた。しかし、東アジアの書跡の流通実態とその歴史的文脈を検討すると、平安前期に入唐僧が日本に齎した新様式も視野に入れる必要があろう。延暦年間に入唐した空海と最澄が請来した書跡や拓本は、初唐期に規範化された様式に関連していた。特に王羲之様式については、唐代宮廷において集積された王羲之遺墨に基づき再編集された「集王行書」様式の作品が請来品に含まれていたと推察できる。一方、平安前期の天皇が唐の文化に対して抱いた憧憬は単なる個人的好尚ではなく、王権の形成過程において何を規範とすべきかという戦略的な選択の一環であり、それが具体的な書の様式として表出するという現象は、日中文化交流史を再構築する上でも極めて重要な意味を有する。本研究では、桓武・嵯峨朝における入唐僧の請来品や正倉院の出蔵記録といった文献史料に基づき、現存する尺牘、銘文、勅額、仏教関連文書など多様な実例を照合・分析することで、平安前期における王羲之の受容と変貌について再検討を試みたい。

【パネル11】

## [発表3]　日本製緯錦の特質に関する一試論

広谷妃夏(渥美国際交流財団)

古代日本には、朝鮮半島および中国南部からの渡来系工人により、大陸の紋織技術がもたらされた。また奈良時代には、錦綾などの高級織物生産は律令制に組み込まれ、当時の東西ユーラシア大陸全体に広まった先進技術である複様綾組織緯錦をも生産したと考えられる。法隆寺や東大寺正倉院に伝わった染織品の中にも、中国からの輸入品のほか、この日本製の緯錦が多く含まれているとみられ、先行研究では、主に紋様表現や類例の多寡からその判別がなされてきた。ユーラシア大陸の東西の出土品で比較すると、紡織技術の地域的差異により、同じ複様綾組織緯錦であってもその糸質や表現の細部は異なる。発表者は所属する東京国立博物館において、日本古代の錦類を悉皆的に調査しており、本発表ではその顕微鏡画像をもととして、その後の中世日本の錦にもつながる日本製緯錦の技術的特徴の一端を明らかにしたい。

## [発表34　五−七世紀弥勒像の坐勢についての再考 −東アジアの半跏形像を中心に−

馬歌陽(渥美国際交流財団)

古代日本には、朝鮮半島および中国南部からの渡来系工人により、大陸の紋織技術がもたらされた。また奈良時代には、錦綾などの高級織物生産は律令制に組み込まれ、当時の東西ユーラシア大陸全体に広まった先進技術である複様綾組織緯錦をも生産したと考えられる。法隆寺や東大寺正倉院に伝わった染織品の中にも、中国からの輸入品のほか、この日本製の緯錦が多く含まれているとみられ、先行研究では、主に紋様表現や類例の多寡からその判別がなされてきた。ユーラシア大陸の東西の出土品で比較すると、紡織技術の地域的差異により、同じ複様綾組織緯錦であってもその糸質や表現の細部は異なる。発表者は所属する東京国立博物館において、日本古代の錦類を悉皆的に調査しており、本発表ではその顕微鏡画像をもととして、その後の中世日本の錦にもつながる日本製緯錦の技術的特徴の一端を明らかにしたい。

【パネル12】

# “異”なるものとの邂逅
## －日本の信仰・伝承・養生における外来知の受容

[パネル概要]

### [発表１]　日本化する〝異〟なる儀礼－真言密教における舎利信仰を中心として

郭佳寧(名古屋大学)

本パネルは、外来の知識がどのように日本文化の中に受容され、表象されるのかを明らかにするものである。東アジアの中にあって、日本は歴史的に外来の知識を学び、それを取り入れて、独自の文化を形成してきた。このパネルでは、そうした日本文化の概要を確認しながら、外来知としての信仰や知識が社会に受容され、それらが個人の生活で実践されるに至るまでの過程を取り上げ、論じる。
はじめに、東アジアと日本の文化事象における関係性や位相を確認する。郭は、日本における舎利信仰の受容を通して、日本にとって〝異〟なる儀礼であった舎利信仰の日本化が示す文化的・宗教的な意義について述べる。
そして、外来知の体系化とその後の派生的展開について考察する。松山は、東アジアで共有される暦の知識が暦注書等を介して民俗儀礼へ展開する事例を通して、知識の流布や新たな文化事象の再創造について述べる。
次に、外来の説話・伝承の日本的変容を検討する。江口は、長恨歌由来の楊貴妃伝承と結びついて独自の展開をみせる尾張国（現名古屋市）熱田の蓬莱伝承を取り上げる。関連の説話、物語の分析から、伝承の発展過程を明らかにする。
最後に、より実践的な観点から外来知の変容を論じる。畑は、中国から伝来し、近世日本で独自の展開を遂げた本草書の中でも、薬酒、すなわち養生を目的に摂取する酒の記述に注目し、養生をめぐる外来知の展開について考察する。
その後、討論者およびフロアを交えた議論を行う。
以上のように本発表は、信仰、伝承、養生をキーワードとして、前近代日本が”異”なる文化、知識体系と接触することで生じた文化変容のダイナミズムを明らかにするものである。

### [発表2]　書物から民俗信仰への知の変相 －五郎王子説話を中心に－

松山由布子(中京大学)

本発表は、インドから中国を経て日本に伝わった舎利信仰の日本化の過程を、宗教儀礼の視座から検討するものである。特に、真言密教においては、舎利信仰がどのように受け入れられ、再構築されたのかを中心に考察を行う。まず、唐宋時代を中心に中国における舎利会の実態を概観し、東アジアにおける舎利信仰の歴史的背景を明らかにする。次に、弘法大師空海の入唐を契機に、真言密教における舎利信仰の変遷を、『御遺告二十五箇条』や『弘法大師入定勘決記』、『高野山秘記』などの舎利に関する宗教言説や、『諸尊要抄』、『秘抄』といった密教修法のテキストを通じて辿る。中世日本において新たに構築された舎利信仰については、宗教言説と舎利を用いた儀礼の交差点から検討を加える。さらに、舎利信仰の日本化の過程における変化として、舎利から「如意宝珠」へと展開する日本独自の信仰についても考察する。最後に、〝異〟なる儀礼としての舎利信仰がどのように日本化され、そしてその日本化が示す文化的・宗教的な意義について論じる。

【パネル12】

## [発表3]　熱田の蓬莱伝説－日本に内包された異国・異境－

江口啓子(名古屋市立大学)

蓬莱とは古代中国において東方の海上にあり、不老不死の仙人が住む島とされている。蓬莱については『竹取物語』にも「東の海に蓬莱といふ山あるなり」とあることから、東方の海上にある仙境のイメージは日本においても共有されていたことがわかる。ところが、やがて蓬莱は日本国内にあるという言説が流布していく。富士や熊野を蓬莱とする説も有名であるが、本発表では尾張国（現名古屋市）の熱田の地を蓬莱とする伝承に注目する。熱田を蓬莱とする言説は鎌倉時代の仏教書『渓嵐拾葉集』が初出であるが、同書では熱田明神が楊貴妃であるとも述べている。熱田の蓬莱伝説は長恨歌由来の楊貴妃伝承とともに構築された。楊貴妃の魂を求めて方士がやってきた先の蓬莱とは日本の熱田なのである。このとき、蓬莱は異境であると同時に、中国の故事が展開する異国ともなる。
かつては中国と同じく東方の海上というここではないどこかとして受容されていた蓬莱が、日本こそ東方の海上の蓬莱であるという認識に変容する。中世から近世にかけての熱田を蓬莱とする説話、物語を分析し、そのイメージの形成過程を明らかにする。

## [発表34　酒を用いた養生−本草書に見る薬酒の製法と効能をめぐって−

畑有紀(名城大学)

近世日本では、『本草綱目』をはじめとする中国本草書の伝来により、本草学が隆盛を迎えた。当初、日本の本草書は中国本草書からの引用を主としていたが、次第に日本の風土や習慣に根差した独自の記載を持つ本草書が増加していった。
本発表では、そのような日本本草書の中でも、薬酒、つまり養生を目的として摂取する酒に関する記述に注目し、中国からもたらされた養生の知識が、近世日本でどのような展開を見せるのかを検討する。一般に薬酒の製法には、生薬や食材を酒類に浸漬する方法（浸法）、発酵途中のもろみに投入する方法（醸法）の二種があり、中国薬酒では後者が、日本薬酒では前者が多いとされるなど、中国からの外来知が日本で独自の発展を遂げることが知られている。さらに注目すべきは、このような外来知が本草書のみならず、料理書、重宝記などにも掲載され、幅広い層に受容され得るものとなっていた点である。本発表では、近世日本の本草書および料理書、重宝記などの関連文献に見える薬酒の記述を体系的に整理し、中国本草書から受容した知が、日本においていかに変容・展開したかを考察する。

【パネル13】

# 戦後東アジア分断国家における『祖国観』
## −沖縄・台湾・韓国の事例を中心に−

**[パネル概要]**

戦後の冷戦期、東アジアでは多くの分断国家が生まれた。台湾海峡を挟む中国本土と台湾、38度線を境に分かれた韓国と北朝鮮、統一前の南北ベトナム、そして復帰前のアメリカ統治下にあった沖縄と日本本土の分断がその例である。国家の分断は、民族統合の動きを促す一方で、独自のアイデンティティ形成をもたらす契機にもなった。

本パネルでは「分断国家」と「アイデンティティ」の関係に注目し、沖縄、台湾、韓国の事例を通じて、戦後における「祖国像」とその変遷を検討する。

3地域の状況は必ずしも一致しないが、いずれも国家や民族の動向に翻弄され、アイデンティティが流動化するなどの共通点が見られる。

台湾海峡や朝鮮半島では、すでに約80年が経過した現在も分断状態が続き、南北朝鮮はそれぞれ独立した国家として、台湾と中国本土も異なる体制の下で発展してきた。時間の経過とともに「同じ国家の国民」という意識は薄れ、共通のアイデンティティの共有は困難となっている。

沖縄は1972年に「祖国復帰」を果たしたが、分断期に築かれた米軍基地の存在が復帰後も「心の距離」となり、現在も本土との間で国民統合やアイデンティティのずれが表面化しつつある。

このように、国家の分断は「祖国像」やアイデンティティの動態を形成する重要な要因となってきた。

渥美国際交流財団からの応募。

**[発表１]　戦後沖縄社会の「祖国像」**

**鳥山淳(渥美国際交流財団)**

10万人以上の民間人が犠牲になった沖縄戦とそれに引き続く米国の占領統治によって、戦後沖縄の「祖国意識」は大きく揺らいだ状態から始まった。1870年代末に琉球王国が解体されてから60年以上続いてきた日本国による統治は実質的に終焉を迎え、日本国への帰属意識に縛られないかたちで沖縄の歴史と将来を見つめようとする人びとも現れた。

しかし1950年代初頭にかけて米国の占領統治が長期化することが確定的となり、その統治が沖縄の戦後復興を重要視しないものであることが明らかになるにつれて、日本国からの断絶が解放ではなく閉塞状況をもたらしているという意識が高まり、日本国への帰属を求める「祖国意識」が高揚していった。そこにおいて、沖縄が日本国に帰属することは歴史的な必然として捉えられ、沖縄解放の願望は「祖国意識」に強力に接続されることになった。

ただしその接続には、無視できない軋轢が伴っていた。1960年半ばから日米協調の統治政策が前面に押し出されていく中で、沖縄解放の願望と「祖国意識」との間に潜在していた軋轢がしだいに表面化し、1970年代以降はその軋轢を直視することが重要な思想的課題となっていった。

【パネル13】

## [発表2]　戦後韓国社会の「祖国像」

金崇培(渥美国際交流財団)

かつて独自の国家を築いた琉球や韓国とは異なり、台湾は歴史上、自立した国家を建国した経験がない。さらに、台湾はわずか400年の歴史を持つ移民社会であるため、台湾人の祖国観は他の東アジア諸国の人々とは大きく異なる。

第二次世界大戦中、日本人は台湾人にとって戦友であった。しかし戦後、台湾人は敗戦への悲しみを抱きつつ、日本統治からの解放への感謝と、「祖国」中国への期待に胸を膨らませていた。当時、台湾人は政治的に自由な国民となり、もはや植民地主義者に二級国民として扱われることはないと信じていた。しかし、どれだけ台湾人が「祖国復帰」を歓迎しても、中国政府は彼らを「皇民化教育」を受けた中国文化に馴染まぬ二級国民と見なした。

つまり、「祖国」に加わった後も台湾人は二級国民の扱いから脱せず、次第にその祖国に失望するようになったのである。その後、台湾では「祖国なき植民地支配」が行われ、さらに中国本土からは武力による威嚇が続き、台湾人の中国への距離感は一層広がっていった。その結果、国際社会との統合や独立国家の樹立を主張する者に加え、中国や韓国では考えにくい「日本を祖国と見なす者」さえ現れるようになった。

## [発表3]　戦後台湾社会の「祖国像」

李明峻(渥美国際交流財団)

「戦後」という言葉には二つの戦争後を意味している。一つはアジア・太平洋戦争であり、もう一つは朝鮮戦争である。前者は日本による植民地解放後であり、後者は朝鮮戦争によって朝鮮半島の分断が膠着化したという状況にある。

これらの時代性を前提とし、また報告者が在日韓国人三世という点から以下の内容について報告する。第一に、日本から解放されたことから在日コリアンらの祖国像について考える。これについては在日コリアン、在日韓国人、在日朝鮮人という名称が関連してくる。第二に、北朝鮮との関係についてである。分断の起源は1945年以前に探すことができ、共産主義と反共主義のイデオロギーの衝突が朝鮮戦争であった。この朝鮮戦争を公式的に終わらせるものが平和条約であるが近年韓国でも論議された。また韓国の憲法にある領土条項、北朝鮮に対する韓国の進歩と保守の見方などを提示する。第三に、現在韓国にある統一認識について考察する。過去と比べると北朝鮮との統一認識は低下してきた。果たしてこのような傾向をどのように把握すべきを考える場とする。

【パネル14】

# 日本国憲法をめぐる論議と東アジアの視点
## -法・政治・文化からの考察

**[パネル概要]**

従来の日本における比較憲法学においては、近代的視点からの憲法理解を行うにあたって、主に、欧米の憲法・政治思想や憲法運用が参照されてきており、東アジアの動向などをふまえた比較検証は必ずしも多かったとはいえない。もっとも、近年では、グローバルな憲法研究において「東アジア」という地域に視点を置く分析も見られるようになってきており、日本における憲法現象を見る場合にも、東アジア的文化から影響や、日本と近隣国との関係からのアプローチを採ることが求められる時代となりつつある。

そこで本パネルでは、東アジアの視点を重視し、近年注目される日本における多様な憲法論議―DNAデータベース・ルッキズム・同性婚・憲法改正論議―を取り上げ、法・政治・文化の観点から紹介することとする。具体的には、①日本における憲法関連の諸現象が、日本以外の東アジア諸国からどのような影響を受けているのか、または受けていないのか、②日本国内の憲法論議が、東アジア諸国においてどのように受けとめられているのか、さらに、③東アジアの他の国と日本とを比較する場合に日本における憲法論議の固有の特徴を見出すことができるのか、といった点を適宜ふまえて検証する。なお、討論者からは、法制史的視点からの議論を提起していただき、現代の視点に歴史軸を絡めたパネル報告としていきたい。

**[発表１]　日本における警察DNA型データベースの課題と韓国法からの示唆**

**韓修玭(慶応大学)**

本報告は、日本における警察DNA型データベースの法的根拠及び運用について、韓国法との比較を中心にその課題を検討する。日本の現行制度は、憲法上の個人情報保護の要請を満たしていないとして、かねてより憲法学から批判を受けてきた。近年、無罪判決確定者が請求した自己のDNA型記録等の抹消を警察が拒否した事案について、昨年、名古屋高等裁判所は、原判決を支持し、原告の抹消請求を認容する判決を下した。その判断過程では、東アジア、特に韓国の立法が多く参照され、日本の現行制度には改善の必要があることが明示的に指摘された。本報告は、同判決の判旨を紹介しつつ、立法の指針を探ることを目的とする。

【パネル14】

### [発表2]　東アジア的文化のなかのルッキズムと憲法

新井誠(広島大学)

本報告は、近年、SNSなどにおいて自分自身の外見を公開する文化が世界的に広がるなかで、外ぼうや身体を美しく見せるため、人々の間で、美容整形やフィットネスなどを行うことが多くなっているように見受けられる。そうしたなかで、外見至上主義に由来する差別その他の問題が、かつてよりも深刻になってきているといえそうである。こうした問題は、日本のみならず東アジアの国々でも広く見られる現象であるが、他方で、各国における外見をめぐる固有の問題も生じたりもしている（日本の場合には、イレズミをしている者をめぐる差別問題などがある）。本報告では、こうした「ルッキズム」から生じる憲法問題について、憲法の視点からはいかなる対応が可能であるのか、検討する。

### [発表3]　同性婚をめぐる憲法理論－日本の裁判動向と東アジア的文脈における比較検討

岡田順太(独協大学)

本報告は、同性婚に関する憲法上の論点について、日本における裁判例の動向を中心に、東アジア諸国におけるLGBTなど性的マイノリティをめぐる法制度・政治・文化的背景を踏まえた比較的検討を試みるものである。近年、日本では同性婚を認めない現行制度が憲法に違反するとの訴訟が相次いで提起され、複数の高等裁判所において違憲または違憲状態との判断が示されている。この点について、年内にも最高裁判所から統一的な判断が示される可能性があり、社会的関心が高まっている。そこで本報告では、各高裁判決における法理論の相違点を分析することを通じて、憲法が同性婚に対して含意する意義を考察する。その際、欧米諸国との社会的背景の相違に配慮しつつ、東アジアの文脈における議論の意義についても検討を行う。

### [発表4]　日本の憲法改正論議における「外国」の視点

横大道聡(慶応義塾大学大学院)

本報告は、同性婚に関する憲法上の論点について、日本における裁判例の動向を中心に、東アジア諸国におけるLGBTなど性的マイノリティをめぐる法制度・政治・文化的背景を踏まえた比較的検討を試みるものである。近年、日本では同性婚を認めない現行制度が憲法に違反するとの訴訟が相次いで提起され、複数の高等裁判所において違憲または違憲状態との判断が示されている。この点について、年内にも最高裁判所から統一的な判断が示される可能性があり、社会的関心が高まっている。そこで本報告では、各高裁判決における法理論の相違点を分析することを通じて、憲法が同性婚に対して含意する意義を考察する。その際、欧米諸国との社会的背景の相違に配慮しつつ、東アジアの文脈における議論の意義についても検討を行う。

【パネル15】

# 戦時下の日本における社会科学の諸像：内地と外地における知の位相

**[パネル概要]**

本パネルは、戦時期日本における社会科学者の学問的営為について、個人アクターおよび組織の活動に焦点を据え、複数の個別事例の分析を通じた再検討を試みるものである。農村恐慌、国際経済秩序、植民地問題、都市部における労働争議の激化といった課題は、戦前から戦時にかけて、社会科学者の知的関心と実践の主要な対象であった。本パネルは、内地に加えて外地における事例も視野に収めつつ、戦時下社会科学の複雑な様相の一端を明らかにすることを目指している。

蔭木達也は、労農派を代表する論者・猪俣津南雄による農村経済発展構想に着目し、それがソ連との関係のもとでいかに形成されたのかを検討する。牧野邦昭は、石橋湛山による国際経済秩序論の形成過程に着目し、金融関係者や経済学者との連携のもとに構想された自由貿易主義的国際秩序論の特質を明らかにするとともに、戦時下の国際環境におけるその構想の意義と戦後日本における現実的含意について考察する。阪本尚文は、京城帝国大学に赴任した西洋経済史家・高橋幸八郎に注目し、新たに発掘された資料をもとに、その戦時動員体制への協力実態を明らかにする。周雨霏は、社会科学における知識生産の制度的基盤に着目し、京城帝国大学附置「朝鮮経済研究所」の設立と活動を整理し、あわせて基礎研究の実践を社会科学者の思想的志向と照らし合わせながら、植民地朝鮮における経済知の編成過程を明らかにする。

本パネルは、以上四つの報告を通じて、戦時下の社会科学における知識生産の実態とその制度的・思想的背景の解明を試みる。

（司会・討論者：国際日本文化研究センター　松田利彦）

**[発表１]　猪俣津南雄と「日本村落共同体」論：昭和農業恐慌と『農村問題入門』をめぐって**

**蔭木達也（明星大学）**

昭和農業恐慌期において、マルクス主義の洗礼を受けた経済学においては、「日本資本主義論争」で広く知られるように、日本の資本主義がどのような段階にあるか、そしてどのように進行すべきかを明らかにすることが焦眉の課題であった。山田盛太郎、山田勝太郎、稲岡暹、相川春喜といった講座派の論者たちは、現下の日本農村を「半隷農制」と規定し、貧農がおかれた状況を日本の資本主義化の過程で必然的に発生したものと論じ、中貧農ひいては小地主も順次プロレタリア化して、都市労働者とともに社会主義革命へと身を投じる未来の到来を予測した。これに対して労農派のマルクス経済学者である猪俣津南雄は、農業問題の解決を革命ではなく「農業の進歩」「農業生産力の増大」に求め、その実現を「村落共同体」が「集団耕作」へ転化すること、つまり日本におけるコルホーズの創設にみている。本報告は、ソ連を参照しながら、社会主義経済を農村から立ち上げる可能性を「日本村落共同体」の歴史的展開の先に論じた猪俣の論を軸に、昭和農業恐慌期の社会科学における農村の位置づけを再検討し、それがなぜ農村のファッショ化に対抗できなかったのかを、改めて問うてみたい。

【パネル15】

### [発表2]　石橋湛山の戦時下における国際経済秩序論

牧野邦昭(慶応義塾大学)

石橋湛山（1884-1973）は、戦前の日本において植民地を不要とするいわゆる小日本主義を説いたことで知られるが、石橋はその後朝鮮や満州国などが日本にとって利益を生む存在になるとその存在を追認していくなど、植民地や日本の支配下の地域が拡大していくこと自体に抵抗したわけではない。一方で石橋は日本が世界から見れば狭い範囲に「蹐蹐」すること（縮こまること）を一貫して批判し、貿易を通じて日本が世界を相手にして利益を上げていくことの重要さを説き続け、国際的なブロック経済の進展にも異を唱え、日本が率先して市場を開放していくことで世界を動かしていくことを主張した。そして石橋は第二次世界大戦勃発から終戦まで、英米の大西洋憲章や連合国のダンバートン＝オークス提案、日本の大東亜共同宣言などの内外の公的な戦後構想案を参考にしながら金融関係者や経済学者を集めて望ましい国際経済秩序の在り方を研究した。石橋の国際経済秩序論は自由貿易を基軸とするものであり、当時の日本においては理想論であったが、それは同時に敗戦により満州、朝鮮、台湾を失う日本にとって生存のために不可欠な現実的条件でもあった。

### [発表3]　「京城」の高橋幸八郎

阪本尚文(福島大学)

アナール学派の黎明期を担うマルク・ブロックやジョルジュ・ルフェーブルとの親交を通してその理論に早くに通じるとともに、英語圏で展開された「封建制から資本主義への移行論争」において独自の論陣を張った高橋幸八郎は、大塚久雄と並んで比較経済史研究を牽引した、戦後日本を代表する西洋史家として知られている。1941年秋に京城帝国大学に着任した高橋は、アジア・太平洋戦争期に植民地朝鮮で学問的基礎を積んだのだが、生涯を通じて当時について語ることはほとんどなく、この時代の高橋の思想と行動は、闇に包まれてきた。本報告の目的は、高橋の「京城」経験を、近年遺族から福島大学附属図書館に寄贈された日記やそれを基に発見された新資料に拠りながら、検討することにある。具体的には、①高橋が現地の新聞において「大東亜戦争の世界史的意義」を積極的に喧伝していた、②国民総力朝鮮連盟の依頼を受けて朝鮮各地で「大東亜戦争の世界史的意義」を講演して回っていた、という事実を摘示したうえで、③宣伝戦を戦ったことへの「罪の意識」が戦後の朝鮮への沈黙、さらには戦後の政治史・現実政治へのコミットメントの忌避につながった可能性を指摘する。

### [発表4]　植民地における経済知の編成：　京城帝大「朝鮮経済研究所」の調査・研究活動を中心に

周雨霏(国際日本文化研究センター)

本報告は、京城帝国大学法文学部附置「朝鮮経済研究所」における調査・研究活動の実態を明らかにするとともに、これらの活動が同学教員による学術的知識生産にいかなる形で寄与していたのかを解明することを目的とする。

「朝鮮経済研究所」は1928年4月に設立され、叢書『朝鮮経済研究』の刊行で広く知られている。終戦までに同研究所は、研究座談会や見学会の開催、各種経済資料の収集・整備、図書目録の作成、さらには重要資料の借覧・複写など、多岐にわたる活動を展開し、朝鮮経済に関する体系的研究のための基盤を築いた。朝鮮の経済実態を把握する上で、官庁による統計・調査が最も重要な情報源であったことは言うまでもないが、「朝鮮経済研究所」の活動は、京城帝大に籍を置いた経済学者たちによる学術研究に特化した形で進められており、彼らの政策論や経済分析を理解する上で不可欠な手がかりとなっている。

同研究所は官製機関ではなかったため、これまでその実態について十分に解明されていない。かつて朝鮮経済研究所の研究員を務めた桜井義之氏の旧蔵資料（東京経済大学所蔵）を手がかりに、同研究所の活動の全体像を明らかにすることを試みる。

【パネル16】

# 現代児童文学に見る戦争の記憶と継承
## ー東アジア地域において児童文学は戦争をいかに描いているのか

**[パネル概要]**

本パネルセッションでは、現代の児童文学が戦争の記憶をどのように継承し、語り継いでいるのかを多角的に検討する。各地域の児童文学作品を通じて、戦争の経験がどのように語られ、子どもたちにどのような影響を与えているのかを分析することが目的である。本セッションは、地域ごとの視点を重視しながら、戦争の記憶と児童文学の関係性を明らかにしていく。
テーマの焦点: 東アジアにおける児童文学が戦争をどのように描いてきたかを考察する。日本、中国、台湾の作品を取り上げ、それぞれの地域が持つ戦争の記憶と児童文学の語り方の特性を分析する。

**[発表１]　日本の「戦争児童文学」のこれまでと課題ー前川康男『ヤン』と薛涛『満山打鬼子（マンシャン鬼を打つ）』を通じて**

**成実朋子(渥美国際交流財団)**

反戦・平和をテーマとする児童文学作品のことを日本では、「戦争児童文学」と呼ぶ。ここで言う「戦争」の主たる対象は十五年戦争のことであり、第二次世界大戦後の日本の児童文学界において、一九六〇年頃より多くの作品が書かれてきた。今日対象として描かれる「戦争」の範囲は必ずしも十五年戦争に限定するものではなくなったが、「戦争児童文学」は、今なお日本の児童文学の中心的な領域の一つであると認められる。戦地となった中国を舞台にした作品も存在し、乙骨淑子『ぴいちゃあしゃん』や前川康男『ヤン』が知られる。戦争を経験した作家によるこれらの作品は日本国内で評価される一方、海外での翻訳や受容には困難が伴う課題もある。本発表においては、日中両国の「戦争児童文学」の中から、前川康男の『ヤン』（1967）と薛涛の『満山打鬼子（マンシャン鬼を打つ）』（2009）を取り上げ、改めて「戦争児童文学」について考えていきたい。日本と中国の児童文学が、「あの戦争」をどのように描いてきたのかということを通じ、改めて日本の「戦争児童文学」が戦争の「記憶」をどのように描いてきたのかということを捉え、その特色を明らかにしていきたい。

【パネル16】

## [発表2] 日本の児童文学は戦争の記録と記憶をどう紡いできたのか－沖縄戦を題材とした児童文学は、子どもたちの未来に何を届けうるのか

斎木喜美子(渥美国際交流財団)

アジア太平洋戦争において、日本本土で一般住民を巻き込んだ地上戦が3カ月余りも続いたのは沖縄だけであった。しかしこの特異な戦争は住民の犠牲があまりにも大きかったため、体験の物語化は遅々として進まなかった。また1972年の沖縄施政権返還まで27年もの年月がかかったことで、本土にも沖縄の実態は伝わりにくい状況が続いていた。

1960年代半ば頃から、ようやくひめゆり学徒隊や対馬丸遭難事件を題材にした長編児童文学が登場し始め、戦場での体験がさまざまな媒体で発信されるようになっていった。

以降、沖縄戦を題材にした児童文学作品は、悲惨な戦争体験の記憶を次世代に語り伝えるとともに、「二度とこのような悲劇を起こしてはならない」、「命(ヌチ)どぅ宝(沖縄の方言で命は宝の意)」という民衆の思いを届ける役割を担ってきた。その背景には、愛国調や殉国美談の物語ではなく、沖縄戦の真実を体験者の記録と記憶に基いて語り継いでいかねばならないという使命感が芽生え始めたことがあった。

2025年は戦後80年目を迎える節目の年である。沖縄戦の記録と記憶の物語の歴史的考察を通して、今後沖縄戦をどう語り継いでいくのか総括したい。

## [発表3] 台湾児童文学における戦争の語りと記憶の継承　－　『夢想中的陀螺』と『冷不防』が描く戦争体験

張桂娥(渥美国際交流財団)

台湾の児童文学において、戦争はどのように描かれ、どのように記憶として継承されてきたのか。本発表では、台湾戦争児童文学の変遷を俯瞰し、陳玉金の『夢想中的陀螺』（2016）と楊雲萍の詩絵本『冷不防』（2022）を取り上げ、それぞれが戦争の経験をどのように語り、子どもたちへ伝えているのかを分析する。

近年、台湾の戦争児童文学は、歴史的記録や悲劇的なナラティブから、より個人的な視点と情緒的な共感を重視したものへと変化している。『夢想中的陀螺』は、戦争の記憶を象徴的な遊び（陀螺）と関連付けることで、個人の視点から戦争の影響を描き、平和への願いを表現する。一方、『冷不防』は戦争詩を視覚化し、戦争の突然性と庶民の生活への影響を詩的かつリアルに描き出している。

これらの作品は異なる時代背景を持ちながらも、台湾児童文学における戦争記憶の語り方の変容を示しており、記憶の継承がどのように児童文学を通じて未来世代へ伝えられるのかを考察する。本研究では、台湾の戦争児童文学の新たな語りの特徴を明らかにし、児童文学が戦争の記憶をどのように継承し、どのような価値を未来世代に提供するのかを探求する。

【パネル17】

# 現代児童文学に見る戦争の記憶と継承
## ー戦争児童文学は何をどのように語り継ぐのか

[パネル概要]

本パネルでは、児童文学が戦争の記憶をどのように語り継ぎ、子どもたちの戦争認識を形成してきたのかを検討する。戦争の語りは時代や地域によって変化し、各国の児童文学は独自の視点で戦争を描いている。本セッションでは、戦争経験の記憶が児童文学を通じてどのように再構築され、伝えられているのかを多角的に探る。

テーマの焦点: 戦争の語り継ぎに着目し、児童文学が戦争の現実をどのように捉え、次世代へと伝えていくのかを探る。国際的な視点を取り入れ、異なる文化圏の児童文学作品が戦争をどのように表現し、どのようなメッセージを発信しているのかを論じる。

本パネルを通じて、戦争の記憶と児童文学の関係を再考し、児童文学が未来世代にどのような役割を果たすのかを議論する。

[発表１] **記憶と物語の交錯 － イタリアと日本を結ぶ視点：『パンに書かれた言葉』とイタリア児童文学が描く戦争と災害**

Maria Elena　Tisi(渥美国際交流財団)

東日本大震災および原子力災害の発生後、日本の児童文学作家は、災害の記憶をどのように伝え、希望のメッセージを示すべきか模索してきた。その一つの方法として、直接的な描写ではなく、第二次世界大戦の記憶を日常の物語に組み込むことで共感を喚起する手法が取られている。

朽木祥の『パンに書かれた言葉』（2022）は、災害を出発点とし、広島からイタリアへと舞台を広げながら戦争の記憶をめぐる旅を描く。主人公エレオノーラの視点を通じ、読者は知られざる歴史と向き合い、記憶の継承の重要性を理解する。本発表では、本作品と福島の災害・広島の原爆を扱うイタリア人作家による二作、Vichi De Marchi の『広島で生まれた』（Nato a Hiroshima, 2020）と Sergio Rossi の『福島のヒーロー、マサオ』（Masao, l'Eroe di Fukushima, 2018）との比較検討を行う。

日本とイタリアの児童文学は、他者への理解を促し、記憶の共有を通じて希望を描く機能を持つ。本研究では、「記憶の力」に焦点を当て、文学がどのように戦争と災害の記憶を未来へと継承していくのかを考察する。

【パネル17】

## [発表2] ウクライナの児童文学における戦争の変遷 － 受け継がれた記憶から、子どもたちの身近な現実へ －

Olga　Khomenko(渥美国際交流財団)

ウクライナの児童文学における戦争の語りは、20世紀から現代にかけて変遷してきた。ソビエト時代、英雄的・愛国的な物語として描かれ、子どもたちの不安や恐怖を直接扱うことは避けられていた。1990年代のウクライナ独立後、ミリタリズム的な語りは排除され、戦争の描写自体が少なくなった。

この沈黙は、2014年に勃発したウクライナ東部での戦争によって破られた。避難、親との別離、身近な死といった現実を背景に、児童文学は初めて子どもの視点から戦争を描くようになった。2022年の全面侵攻以降、『パトロン犬』『私の長い休暇』『ジェラール・パルチザン』『ロンドを変えた戦争』などが刊行され、戦争の心理的影響に寄り添う文学が増加した。戦争は「遠い過去」ではなく、「日常の現実」として認識されるようになり、児童文学はそれに応じて、子どもたちが現在を生き抜くための支えとなる機能を果たしている。

こうした変化を通じて、ウクライナの児童文学は、戦争に関する記憶を継承する段階から、子どもの日常および心理に根ざした文学へと進化を遂げている。この変化は単なる文学的変容にとどまらず、社会全体の変容とも深く結びついている。

【パネル18】

# 東アジアの災難と回復力構築のための融複合研究

## [パネル概要]

本パネルは、東アジアにおける災難・災害と復興の過程を、多層的かつ学際的視点から再考することを目的とする。東日本大震災をはじめとする近年の大規模災害を踏まえ、復興における公共投資の時空間的分布、インフラ再建過程において浮かび上がる感情の文化政治、そして災難をめぐる知的枠組みの再構築といった多角的テーマを扱う。これらの研究を通じて、災難・災害と復興をめぐる空間的配置、制度的枠組み、感情の作用、そして知的構築物に対し横断的にアプローチし、東アジアにおける災難・災害からの回復力（レジリエンス）構築の新たな地平を模索する。このように融複合研究を志向し異なる軸の交錯に注目する本パネルでは、災難・災害を「ただ起きたもの」としてのみ認識するのではなく、「いかに経験され、再構成されるもの」かとして理解する視座を提供する。

## [発表１]　　災害復興事業における公共投資の時空間的特性

田村史記(ソウル大学)

大規模な自然災害が頻発する日本において、災害の発生に対する備えや発生時の対応とともに重要なのが災害発生後の復興事業であり、これは災害レジリエンスの効果的な作動において中核的な地位を占めている。このような復興事業に携わる主体は多岐にわたるが、国土政策の名のもとに政府主導で行われる復興事業では、公平性の確保のために政策遂行における地域間の格差が最小限なものになるよう求められる。しかしその一方で、効率性の追求に伴う地域間格差の発生に対する懸念も持続的に提起されてきた。本研究はこのように提起されてきた懸念にもとづき、国土政策の遂行結果である公共投資に対する時空間的分析を通じ、政府によって行われた復興事業における時空間的差別性を導出することで、地域間格差の有無の検証を試みる。

【パネル18】

## [発表2] 復興のインフラと感情の文化政治−福島避難市町村におけるインフラ再建と復興の社会ドラマ

呉殷政(江原大学)

이 연구는 도쿄전력 후쿠시마 제1원전 폭발 사고 이후 후쿠시마의 부흥을 위해 진행되는 인프라의 재건 프로젝트를 감정의 문화정치라는 측면에서 바라보고자 한다. 후쿠시마현의 12개 피난 시정촌에서 폐로를 비롯한 인프라의 재건은 어떻게 부흥을 약속하고 있는지, 그러한 부흥의 약속은 어떠한 시간과 주체를 소환하면서, 어떻게 특정한 세계를 당연한 미래로 상상하고, 그리고 그 미래를 위한 현재를 특정한 방향으로 나아가도록 틀지우는지를 감정의 체계와 함께 살펴본다. 재후의 시공간에서 왜 특정한 인프라의 재건에 긍정적 감정들을 동원하고, 어떤 감정들은 체계적으로 배제하는가? 후쿠시마에서 인프라의 재건이 부흥을 위한 자원으로 번역되고 실행되는 과정에서 귀환한 주민과 새로운 이주민들은 어떠한 공동체를 상상하고 희망하는지, 그리고 이를 위해 어떠한 관계를 매개하고 만들어 가는지에 관해 질문한다.

## [発表3] 災難学のすすめ

張政遠(東京大学)

日本では「災害」は一般的に自然現象による被害という意味であることに対して、「災難」は天災だけではなく、戦争や事故など思いがけず起こる人禍という意味もある。韓国では、日本に比べて地震などの自然災害が少ない一方で、地下鉄火災や将棋倒し事故といった人為的事故も「災難」とされている。本発表では、「災」「害」「難」は何をさしているか、そして私たちが「災難学」から何を学べるかについて考察したい。

【パネル19】

# 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略

[パネル概要]

本討論は、「アフリカのMZ世代と気候ネクサス」をテーマに、アイデンティティと世代変動の力学をめぐって深く議論することを目的としています。まず、急速に変化する社会・文化的環境の中で、アフリカの若者世代のアイデンティティがどのように形成されているのかを考察し、さらに気候危機が彼らの生活と未来に及ぼす多層的な影響を検討します。
特に、彼らを気候危機の単なる被害者としてではなく、国際開発協力（ODA）の主体であり、AIやブロックチェーンなどのデジタル技術を通じて気候イノベーションを牽引する能動的なアクターとして捉える可能性に焦点を当てます。
また、アフリカ若年世代の台頭が国際秩序および知の権力構造に対して持つ地政学的な意味を考察し、最終的には、気候・デジタル・開発の交差点に立つ彼らを「ネクサス世代（Nexus Generation）」という新たなフレームで理解し、今後の戦略的方向性を探る場といたします。

[発表１]　**政治的文脈における移動性と地政学的空間認識**
**― 国際協定・移民ネットワーク・連帯形成の相互作用**

**梁基雄(翰林大学校 グローバル社会貢献研究所 HK3.0 アフリカ・ネクサス研究団)**

本研究は、アフリカの若者世代が直面する移動性（mobility）を、単なる人口移動ではなく、政治的空間を再構成する行為として捉えるものである。特に、域内移動の自由化や気候移民に関する国際ガバナンス、そしてディアスポラや青年ネットワークがどのように相互作用し、新たな連帯（solidarity）を形成するかを分析した。研究の中心課題は、第一に移動が若者にどのような政治的主体性と連帯の場を与えるか、第二に国際協定や移民ガバナンスがどのように移動性と関わり、地政学的空間を再構築するか、第三に青年主導の移動やネットワークが国家中心の地政学をいかに転換するか、である。セネガルの青年運動「Y'en a Marre（イアン・ア・マール）」およびアフリカ連合（AU）による域内移動自由化政策を事例に検討した結果、移動性は権力・アイデンティティ・連...

【パネル19】

[発表2]　　グローバル・サウスにおけるAI規範化：アフリカ諸国の事例研究

チュ・ハンナ(ハンリム大学 グローバル協力大学院)

本研究は、国際的なAIガバナンス規範がアフリカ諸国において開発協力を通じてどのように**現地化（ローカライズ）および制度化**されているかを探究するものである。UNESCOの「AI倫理勧告」やOECDの「AI原則」、アフリカ連合（AU）の「大陸AI戦略」など、国際・地域レベルの規範が拡散する中、多くのアフリカ諸国はドナー機関の支援を受けながら、それらの原則を自国のAI国家戦略に反映させている。本研究はルワンダ、ガーナ、ナイジェリアを比較事例として、各国のAI戦略文書とAI関連の政府開発援助（UNDP、GIZ、USAID、世界銀行など）を分析する。
**予想される結果：** ODAはグローバルAI規範を**伝達**すると同時に**変容**させる「二重的政策移転メカニズム」として機能すると考えられる。この二重の過程は、規範の拡散と現地適応が交差する様相を示し、アフリカのAIガバナンスが単なる規範受容ではなく、共創（co-creation）と再解釈（reinterpretation）のプロセスであることを示唆する。

[発表3]　　セネガル「Y'en a marre 運動」の審美的軌跡：リクール、行為主体性、そして審美性

卞 熊（翰林大学校 グローバル社会貢献研究所）

本研究は、セネガル市民運動 「Y'en a marre（YAM)」の軌跡を、ポール・リクールの「有能な人間存在」と「物語的行為主体性」の概念を通じて探求するものである。従来の社会運動理論（POSやフレーミング）では説明不可能な、YAM成功の核心的メカニズムである 「審美的因果性(Aesthetic Causality)」を解明する。審美的因果性とは、運動のヒップホップメディアが政治的不満を大衆的な情動的動員へと変換するプロセスを指し、リクールの解釈学的円環、ミメーシス三段階過程、イデオロギーとユートピアの弁証法を統合することにより、YAMの進化を人間的能力の弁証法として再構成した。特に、第 I 段階（2011～2012年）は、YAMの攻撃的な審美性がセネガル青年の潜在的な能力を構成・現実化し、「新種のセネガル人(NTS)」という政治的主体を形成したユートピア的瞬間として分析される。一方、第 II 段階（2012年以降）は、制度化（NGO化）とドナー依存が運動の行為主体性を制約し、ユートピア的衝動を緩和する 「審美的な浸食(aesthetic erosion)」を引き起こしたイデオロギー的再捕捉のプロセスとして検証される。本論文は、審美的・象徴的次元が単なる政治的メッセージの「入れ物」ではなく、政治的行為主体性と能力が構成、表現、究極的には損なわれるまさにその媒体であることを実証し、大陸哲学と経験的社会科学のギャップを埋め、政治的変革における文化の役割を理解するための多角的かつ繊細なモデルを提示する。

【パネル19】

## [発表4]　サハラ以南アフリカにおける再生可能エネルギーの拡大と水ストレス

ペク・ヨンジュン

本研究は、国際的なAIガバナンス規範がアフリカ諸国において開発協力を通じてどのように**現地化（ローカライズ）および制度化**されているかを探究するものである。UNESCOの「AI倫理勧告」やOECDの「AI原則」、アフリカ連合（AU）の「大陸AI戦略」など、国際・地域レベルの規範が拡散する中、多くのアフリカ諸国はドナー機関の支援を受けながら、それらの原則を自国のAI国家戦略に反映させている。本研究はルワンダ、ガーナ、ナイジェリアを比較事例として、各国のAI戦略文書とAI関連の政府開発援助（UNDP、GIZ、USAID、世界銀行など）を分析する。

**予想される結果：** ODAはグローバルAI規範を**伝達**すると同時に**変容**させる「二重的政策移転メカニズム」として機能すると考えられる。この二重の過程は、規範の拡散と現地適応が交差する様相を示し、アフリカのAIガバナンスが単なる規範受容ではなく、共創（co-creation）と再解釈（reinterpretation）のプロセスであることを示唆する。

## [発表5]　セネガル「Y'en a marre 運動」の審美的軌跡：リクール、行為主体性、そして審美性

Lee Kyeongeun(翰林大学校 グローバル社会貢献研究所)

アフリカは世界の排出比は低い一方、気候災害の被害が最も大きく、再生可能エネルギー潜在力に比してグリーン投資・気候資金アクセスの不均衡が深刻である。2023・2025年のアフリカ気候サミット（ACS）はナイロビ／アディスアベバ宣言により、補助金中心の気候資金拡大、公正な移行、グリーン産業化、適応・レジリエンス、技術移転・若者能力強化を大陸共通アジェンダ化した。しかしEUのGlobal　Gatewayと韓国の対アフリカ協力戦略がこれら需要者中心アジェンダとどれほど整合し、どこに実施ギャップがあるかの体系的検証は不足する。そこで本研究はOECDのPCD視点から、ACSとEU・韓国のプログラムの目標・手段・実施の整合性を比較し政策的空白を特定する。予備分析ではEUはエネルギー・産業転換、韓国は再エネアクセス・適応で相対的強みがある一方、補助金・損失と被害・債務軽減には共通の改善余地がある。本研究は宣言を実行可能な設計改善へ結びつける根拠を提供する。

# 【ラウンドテーブル】

【ラウンドテーブル１】

# 歴史的日本語・方言と生成AIの接点

[パネル]
相田満(日本女子大学)
坂井美日(鹿児島大学)
関野樹(国際日本文化研究センター)
橋本雄太(国立歴史民俗博物館)
山田奨治(国際日本文化研究センター)

[概要]

発展著しい生成AIを人文学に活用することに関心が集まっている。このラウンドテーブルでは、現代人の多くには理解が難しい歴史的な日本語と、低資源言語としての日琉諸語・方言の生成について、生成AIを活用する可能性について議論する。具体的には、①「みんなで翻刻」によりボランティアが翻刻した古文書のテキストデータに対して生成AIの検索拡張生成（RAG）を適用することにより、現代語訳としての精度を保ちつつ古文書の理解を深めることができるかどうか、②明治から大正時代に国家プロジェクトとして編纂された日本文化事典・「古事類苑」の全文テキストデータにRAGを適用することで、利用者が指定した用語に関する記述を現代語訳しながら要約して提示することの有効性、③方言の生成におけるAI活用を事例として議論する。議論のポイントとしては、生成AIの精度と信頼性、プロンプトやパラメータの工夫とRAG・追加学習等の手法、人文学研究の方法論との融合可能性、低資源言語の保存における課題、そして教育・研究現場や社会での実践的応用などが挙げられる。また、AIによる翻訳・要約、方言生成における原文の意味の保持や、解釈の重層性についても重要な論点となるだろう。このラウンドテーブルは、人文知と情報知の学際的交流の場として、多様な視点からの議論を歓迎する。生成AIの技術的側面やその人文学への応用に関心を持つ研究者のみならず、歴史学や近代以前の文学・文化史、日本語史や方言学、さらには実践的応用を模索する方々の参加を期待する。

【ラウンドテーブル２】

# 生成AI・音声認識・学習分析を活用した日本語教育の実践と評価

林俊成(東京外国語大学)
甘利実乃(東京外国語大学大学院)
孫彤(東京外国語大学大学院)
[パネル] Chaoshen CHEN(東京外国語大学大学院)
王睿琪(東京外国語大学)
李佳瑩(東京外国語大学大学院)
WANG CAIXUAN(東京外国語大学)

[概要]

本ラウンドテーブルでは、生成AI・音声認識・学習分析を活用した日本語教育の実践と評価に関する6件の研究を取り上げ、AIと日本語学習支援の融合がもたらす可能性と課題を考察する。第一に、AIによる聴解過程の可視化が日本語学習者の聴解ストラテジー再構築と理解力向上に与える影響を、アイディアユニット評価を通じて実証的に検討する。第二に、大学院に在籍する中国人留学生を対象に、AI支援による敬語学習の効果と学習不安の軽減を測定する実践研究を報告する。第三に、日本語学習者による生成AI活用の実態と意識を、他言語学習者との比較を通して分析し、言語教育への導入における文化的・学習的要因を考察する。第四に、教師の負担を抑えつつ柔軟な運用を可能にする反転授業用視聴覚教材のAI生成手法とその学習効果を紹介する。第五に、語彙と文法の自然習得を促すAI多読教材の設計と評価方法を共有する。第六に、AI発音矯正システムの評価実験を通じて、音声フィードバックの効果と課題を明らかにする。AI技術を介した日本語教育の革新について多角的に議論する場としたい。

【ラウンドテーブル３】

# 「中選挙区制度」を捉えなおす
## -政治学、歴史学、法学による学際共同分析

清水唯一朗(慶応義塾大学)
マッケルウェイン・ケネス・盛(東京大学)
[パネル] 孫斉庸(立教大学)
安野修右(日本大学)
益田高成(新潟大学)

**[概要]**

日本の選挙制度に関する議論は、研究が政治学、歴史学、法学、さらには戦前、戦後、現代研究で分断してしまっていることで錯綜している。それは現実政治にも色濃く反映され、昨年で30年を迎えた小選挙区比例代表並立制への批判と相まって、中選挙区制への復帰論などが、学術的知見を離れてきわめて感覚的に提示される状況を生み出している。

本研究はそうした問題を克服すべく、政治学、歴史学、法学を主たるアプローチとしながら、隣接する分野にも関心と理解を持つ研究者が集まり共同研究を行う。具体的には、その評価が錯綜している中選挙区制を主たる題材として、「日本の選挙制度がどう作られ、変更され、どんな影響を及ぼしてきたのか」を問いとして、その展開を多面的、総合的に明らかにする。

まず、マッケルウェイン（東京大学）から、現行の小選挙区比例代表並立制に対する市民の評価と改革志向を有権者の意識調査に基づいて分析した結果を示す。続いて、孫斉庸（立教大学）が、1900年導入の大選挙区単記投票制（SNTV）と選挙取締制度の関係から中選挙区制における選挙運動規制の法的起源を掘り起こす。次に安野修右（日本大学）から、そうした規制がどのように海外から学び取られ、土着化したかを示す。最後に益田高成（新潟大学）が、中選挙区制との関りから、戦後における選挙運動規制の持続と変容について論じる。

以上の提示を契機として、フロアの皆さんとともに日本の選挙制度、運動規制、後援会のありようを論じることで、日本政治を構造的に理解し、その変化を提案する入口としたい。

# [個人発表]

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 東アジアにおける「民事訴訟の近代化」の比較史的検討

名前：　岡崎まゆみ

所属：　立正大学

庶民の生活に密着した紛争の法的解決の場である民事訴訟において、「行政と司法の未分離」や「判決の確定的効力の欠如」は、東アジアの初期近代に共通して見られる現象だった。ところが19世紀後半から20世紀前半にかけて、各地域で訴訟手続や執行制度をめぐる法整備が進められ、これらの現象は徐々に見られなくなった。こうした民事訴訟のあり方の変容は、東アジアに暮らす人々にとっての「訴訟」・「法」のイメージや存在意義に、一定の動揺と変化を同様にもたらしたと考えられる。ただしこの点に関する先行研究は地域・個別的考察にとどまり、東アジア地域を通観した「民事訴訟の近代化」の全体像は未だ判然としていない。そこで本報告は、朝鮮(旧韓末期)・中国(清末～民国期)・台湾(日治期)・日本(明治期)の各地域における、判決の確定的効力を担保する民事訴訟手続と、権利実現を担保する民事執行制度の法整備過程を明らかにし、東アジアにおける超域的な「民事訴訟の近代化」プロセスおよび意義の同異や相互比較の可能性を探る。これらの法整備過程では各地域で日本人の関与があったことを考慮し、帝国日本による「法の越境」という視点を踏まえ考察する。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 日本赤十字社と植民地朝鮮

名前：　松田利彦

所属：　国際日本文化研究センター

日本赤十字社（日赤）は、戦前、台湾・朝鮮・関東州など日本帝国圏に支部組織をつくった。朝鮮では、日清戦争後に常設組織がつくられ、「韓国併合」直後に日赤朝鮮本部と改称した。日本に本部をもつ在朝日本人団体の中では最大規模の組織であり、また、朝鮮総督府の医療衛生事業を補完したにもかかわらず、従来、その事業を包括的に明らかにした研究はなかった。　本発表は大きく三つのパートによって構成される。1910年代における朝鮮人会員の取りこみを中心とする組織の確立過程、1920年代の大韓赤十字会との競合と日赤朝鮮本部病院を中心とした医療衛生活動、日中戦争以降の社員・業務の拡大を検討する。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 明仁皇太子夫妻の訪韓問題

名前：　河西秀哉

所属：　名古屋大学

本報告は、昭和終盤に起こった明仁皇太子夫妻の訪韓問題を論じる。「国際親善」の名の下に展開されていた「皇室外交」は、中曾根康弘首相・全斗煥大統領の下、日韓関係を新しく展開するなかで、政治性を帯びた明仁皇太子夫妻の訪韓問題へと展開していく。しかし、それには日韓国内で大きな反対論が起こり、最終的には訪韓は断念される。本報告は日本側の史料をもとに、この問題の歴史的意味を論じる。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# なにが「戦争体験」の継承意識を促すのか
# ：継承に関する計量分析

名前：　那波泰輔

所属：　成蹊大学

本報告の目的は、アジア・太平洋戦争の「戦争体験」継承意識に影響を与える要因を計量分析で明らかにすることである。戦争体験者の減少が進む中、非体験者による継承の重要性が増している。しかし、現代日本において、どのような要因が継承意識に関連するのかは十分に解明されていない。本報告では、この継承意識の規定要因を計量的に分析する。分析には、2024年度「2024年社会階層とライフコース全国調査」（20～60代の男女対象）のデータを用いた。被害の「戦争体験」継承意識と加害の「戦争体験」継承意識を従属変数とし、回帰分析を実施した。回帰分析の結果、被害・加害双方の継承意識に対し、年齢と青少年期における家族での墓参り経験が有意な影響を与えていることが示された。年齢が高いほど継承意識は強く、若いほど弱い傾向が見られた。また、青少年期の家族での墓参り経験は、継承意識を強める要因であることが判明した。これらの結果は、年齢や家族経験が継承意識の形成に重要な役割を果たしていることを示唆している。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 近代日本の植民地統治下における清潔観の形成と展開
## ―公衆浴場を手がかりに―

名前：　川端美季

所属：　立命館大学

現代においては入浴＝清潔という価値観が自明視されているが、これは近代衛生思想の中で構築された新しい文化的認識でもある。本発表では、近代日本における公衆浴場の制度化から、身体衛生や清潔に関する認識の変化をたどり、入浴習慣が社会的・道徳的規範として構築されてきた過程を考察する。この「清潔」概念が近代日本の植民地統治下とされた台湾や朝鮮半島などにおいて、入浴習慣の導入や浴場の設置を通じて、現地の衛生観や自己認識の形成に影響を与えたのかどうかを検討する。植民地統治下では、入浴を通じた「清潔化」が文明化・近代化の象徴として制度的に推進され、教育や生活の場に組み込まれていった側面がある。ただし、入浴回数の少なさや入浴習慣の違いは「不潔」とされ、蔑視や差別の根拠ともなった。「清潔」であることが優越であるという証と位置づけられる一方で、「不潔」であるとされた存在や行為は劣位に位置づけられた。こうした清潔／不潔の規範は、支配・被支配の構造を強化し、同化と差異化の装置として機能したといえる。入浴という日常的行為の背後にある規範と政治性に注目し、清潔観の形成とその広がりを再検討する。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 動物を悼む帝国の記憶－日本統治期動物慰霊碑の戦後的展開と東アジア三地域の記憶文化

名前：　真辺将之

所属：　早稲田大学

日本が旧植民地や占領地に遺した軍馬碑や獣魂碑等の「動物慰霊碑」は、記憶や戦争遺跡をめぐる研究の中で十分注目されてこなかった。本報告では戦後現代にいたる中国、韓国、台湾におけるその扱われ方の変化を、歴史的な変遷を踏まえて比較検討する。中国ではこれらの碑が「日本侵略」の痕跡として再意味化され、愛国主義教育の装置として用いられてきた。台湾では戦後も動物慰霊の文化が自律的に継承・展開されてきている。韓国においても、動物慰霊が国家的記憶の中で独自の展開を見せており、その持続性は注目に値する。これら三地域における動物慰霊碑の表象と機能の変遷を、(1) 戦争・植民地の記憶、(2) 動物という「他者」との関係性の変化、(3) ナショナル・アイデンティティの形成という三つの視点から分析することにより、東アジアにおける歴史認識の差異と共通性、そして記憶の継承の方法について考察する。戦争記憶研究、ナショナル・アイデンティティ研究、さらには環境史・動物史の交差点に位置づけられる本報告は、ポスト植民地主義的な比較視角から、帝国の遺産がいかに再編され、語られ、あるいは消し去られてきたのかを捉える新たな試みである。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 日本留学時代の地質学者・朴東吉
## ―近代日本の工業教育と韓国人留学生―

名前：　長沢一恵

所属：　天理大学

現代韓国の科学技術の発展を築き上げた科学者の中には、解放以前の日本留学を通して欧米で発達した近代技術を学んだ経験を持つ者は少なくない。本発表では、日本の高等専門学校や帝国大学を卒業後、韓国に帰郷して工業教育に携わり、解放後には韓国の科学技術界を担う存在となる地質学者の朴東吉（박동길）を取り上げ、日本留学時代における勉学活動とその体験について考察する。　朴東吉の学問人生については、伝記である『教授生活　50年：雲巌　朴東吉博士伝』（雲巌地質学賞運営委員会編、서울・正宇社、1981年）が韓国で刊行されており、日本留学時代の様子を知ることが出来る。伝記の中には、日本で経験した近代科学技術の学習内容のみならず、日本における植民地出身の留学システムや、日本で出会った人々との関わり、日本での韓国人留学生の生活や交流、など多くの興味深い事柄が記されている。本発表では、こうした貴重な証言に基づきながら、これら諸点に関して日本側に所蔵されているアーカイブ資料を用いて検証を加えることによって、朝鮮植民地支配期の日本へ留学した韓国人留学生の実態と動向について考察を深めるよう試みたい。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# The Japanese Writer Tsuji Takeo and Chinese Literature: Focusing on Sophistication with Chinese Classical Verse and Prose, as Seen in the Journal Kyōiku Jiron

名前： 小島明子

所属： 新潟大学

Tsuji Takeo is well known for some works on Chinese dramas. In addition, he was the editor-in-chief of the journal Kyōiku Jiron, which would later contain reports of his observations and opinions in China. From these reports, I have already pointed out that Tsuji was involved in translating for the journal The World of Education; however, I can also confirm that his interest in Chinese culture and literature was not limited to dramas. In this presentation, I will focus on some of his articles.

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# Three Misconceptions of Modern Vietnamese Scholars about Japanese Yomeigaku and their Cause
# (近代ベトナムの学者による日本の陽明学に関する3つの誤解とその原因)

名前： 阮英俊(Nguyen Anh Tuan)

所属： VNU Hanoi University of Social Sciences and Humanities

In modern Vietnam, the appearance of works mentioning Japanese Yomeigaku by modern Vietnamese scholars not only is a prominent phenomenon but also provides fundamental knowledges and perceptions about this distinctive Confucian school. However, there are some serious misconceptions in their perceptions. This paper focused on analysing three of these misconceptions about Japanese Yomeigaku and initially pointed out the cause leading to those.

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 皇統と廟制 ―後漢献帝の帝位継承と董卓政権―

名前： 渡邉将智

所属： 就実大学人文科学部

皇帝や王が祖先を祀る宗廟は、東アジアの王権を象徴する礼制建築である。中国古代の漢王朝では、皇統と帝位継承順、ひいては皇帝の正統性を示すにあたり、宗廟にどの皇帝を祀るのかがしばしば議論されてきた。後漢末期、董卓は弘農王（霊帝の子、在位：189）を廃位して献帝（霊帝の子、弘農王の弟、在位：189～220）を擁立し、政権を掌握した。董卓は蔡邕とともに、初平年間（190～193）に廟制（宗廟制度）を改めるよう奏上し、それに基づいて廟制改革が行われた。本報告では、初平年間の廟制改革に関する複数の史料を比較・検討し、董卓政権が廟制改革を断行した政治的な背景を検証する。本来、後漢の皇統は「霊帝―弘農王」というように受け継がるべきものであった。しかし、献帝は皇帝（弘農王）の廃位という異例の事態をうけて帝位を継承した。この点において、献帝は正統性に不安を抱えていた。そこで、董卓は廟制を改めることにより、弘農王を排除した「霊帝―献帝」という皇統を新たに創出し、献帝の正統性を補強しようとしたと考えられる。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# 鎌倉時代の災害と日蓮宗の宗団形成
## ー表象文化論の視点からー

名前：　婁訳倫

所属：　東北大学

鎌倉時代の災害頻発期、日蓮宗がいかに危機に応答し、独自の宗教的災害観・救済論を提示して人々の信仰を獲得、宗団を形成したか。本研究はその過程を、表象文化論を援用し、特に災害の意味づけと宗教的言説の力に着目しつつ宗教学的に解明する。理論的にはS.ホールの表象文化論を基軸とし、モスコヴィッシの社会的表象理論による宗教的世界観の構築、及び物語論による日蓮の布教・救済ナラティヴ戦略を分析の柱とする。構成は、まず第当時の災害に関する諸宗教（仏教・神道・陰陽道等）の観念が織りなす宗教的世界観を明らかにする。続いて教義伝達における多様な宗教的メディアの特性と機能、災害解釈の正統化プロセスと信徒による意味の内面化、そして形成された信仰共同体におけるアイデンティティの確立と結束の強化という宗教的機能を段階的に明らかにする。本研究は、日蓮宗の宗教思想的特質と、危機下における宗団形成・展開の力学を明らかにし、日本宗教史・宗教コミュニティ研究及び災害・危機対応の宗教学研究に貢献することを目指す。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# 西川満と日本天后会における日蓮信仰の研究
## ―日本の新宗教研究の視座からの分析－

名前：　黄耀儀

所属：　文藻外語大学

西川満（1908－1999）は、日本統治期の台湾において最も活躍している日本人作家の一人であり、台湾で「天上聖母」または「天后」として信仰される媽祖に強い関心を抱いている。戦後に日本へ引き揚げた後は、占いの仕事に携わり、1960年には日本で「日本天后会」という宗教組織を創立した。　しかしながら、これまでの西川満研究においては、彼の宗教的信仰や日本天后会の実態についてあまり注目されていない。筆者は、西川の媽祖信仰について分析を進める過程において日本天后会の機関誌に、日蓮の逸話や教説が掲載されていることに注目するに至った。これは、天上聖母への信仰に加えて、日蓮信仰も天后会の信仰において重要な位置を占めているのではないかと考えている。　本発表は、西川満の日本天后会における日蓮信仰を中心にして、日本の新宗教研究の視座から日蓮信仰が同会においてどのような役割を果たしているのかを考察したい。具体的には、西川満が自分の教説に日蓮の思想をどのように取り込んだのか、媽祖信仰との思想的共存の様相などを検討する。これにより、天后会の全体像をより立体的かつ明晰に把握することを目的とするものである。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 日中韓における正月七日の節会の文化的展開

名前：　日高愛子　　厳茹蕙

所属：　熊本大学大学院　　北京理工大学

古代中国では旧暦正月七日の「人日節」に吉凶を占い七種の菜の羹を食して無病息災を願った。一方、日本では「白馬の節会」が正月七日の宮廷行事であったが、のちに「若菜摘み」と「供若菜」が行われるようになり、江戸時代になって五節句の一つとして人日節が一般に広まった。発表者の厳は、第6回EACJSで、中国中世の人日節習俗の変化と日本の王朝時代の七日節会の変遷、さらに江戸時代の人日節の民間における実施状況（七草粥を食すること、「松の内」などの習俗）について発表した。本発表では、近世韓国宮廷と江戸時代における人日節の実施状況を比較検討する。人日文化は中国で誕生し、人の安全と健康を祈願し人を重視する意味を持っていたが、日韓両国の人日習俗は中国の唐宋時代から継承し、長く伝承され、さらに発展した。このような越境した文化現象は、注目するに値する。中国で人日節が漢詩に詠まれたのに対し、日本では平安時代以降、「若菜摘み」が和歌を中心に新たな展開をみせる。さらに江戸時代には人日節の定着とともに文芸のなかで「人日」が表現されるようになる。文芸にみる文化表象としての「若菜摘み」と「人日」の展開についても考察する。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 日本の労働力不足産業における移民労働者の不安定雇用

名前：　渡辺宏彰

所属：　立命館大学

この論文は、なぜ日本の労働力不足産業における東アジアからの移民労働者の多くが不安定雇用の状況にあるのかを分析する。非正規労働市場の拡大など関連する経済社会的要因に加え、「政治的要因」を見出すことを目的とする。まず最初に、関連する移民、労働法などにおいて、労働者保護規定がなぜ不充分であるのかを、2018年入国管理法改正における「特定技能制度」導入の問題点、技能実習制度に関する問題点（その将来的な廃止ならびにそれにとって代わる「育成就労制度」導入の分析も含む）、さらには関連する労働法における最近の変化といった、政治的要因を分析する。次に、企業別組合や頂上団体としての連合など主流組合、ならびに「コミュニティユニオン」などの個人加盟組合が、この問題にどのように、また、なぜそのように対応してきたのかを、「社会運動的ユニオニズム」の趨勢なども含めて分析する。当該論文は日本をケーススタディとして、経済社会的要因の分析にとどまらない「政治学」的視点に基づき、労働力不足産業における移民労働者の不安定雇用を分析し、関連する学術文献に理論的、実証的貢献を果たす意義を有する。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 華僑華人の起業と地域コミュニティ―社会統合の視点から

名前：　陸麗君

所属：　福岡県立大学

これまで外国人による起業は、エスニックコミュニティを拠点とし、同胞を主な対象とする「エスニックビジネス」として展開されてきた。しかし近年、グローバル化により人の越境移動が活発化し、外国人起業の形態も多様化している。起業の場もエスニックコミュニティ内にとどまらず、ホストコミュニティにまで広がりを見せている。本報告は大阪市のインナーシティを対象に、華僑華人によるトランスナショナル起業と地域コミュニティとの関係性の変化を、過去10年の展開を踏まえて三段階に整理し考察する。第一段階では民族経済の形成と地域再生の可能性が見られる一方で、ホスト社会との軋轢も生じた。第二の対立段階では、「中華街構想」への地元商店街の反発に象徴されるように、経済的台頭に対するホスト側の防衛的な動きが顕在化し、対立の様相を呈した。第三の共生段階では、華僑華人が建設した関帝廟が地域に開かれたことで、宗教施設を超えた多機能な「トランスナショナル・スペース」として機能し、地域との共生が進展した。本報告ではこのようなプロセスを「競合→妥協→共生」の三段階モデルとして捉え、日本社会における移民の社会統合の在り方を考察する。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 日本のムスリム移民の埋葬地選択における宗教・家族・ジェンダー

名前：　岡井宏文　　本多真隆

所属：　京都産業大学　　立教大学

グローバル化の進行にともない、家族研究では移民への関心が高まっている。さらに近年では移民の定住と連動して、高齢化、埋葬地選択という問題が浮上している。日本においてこれらの問題は、欧州に比べて現在進行中の問題であり、研究も発展途上にある。本報告では移民の「死」、特に埋葬地選択に関する問題を取り扱う。「死」および埋葬地選択は、移民の宗教的背景、経済的事情、移住国で形成した家族の関係、ジェンダーなどの要素が交差する複合的な問題である。本報告では、こうした埋葬地選択をめぐる問題について、日本のムスリムを事例とする。日本のムスリム人口は、1980年代以降の労働力不足を背景としたニューカマーの来日と共に急増した。現在、ムスリムコミュニティでは、高齢化と「死」を巡る問題が浮上している。モスクでは、葬儀の執行（出身国等への送還、遺族との交渉などを含む）、設備・施設整備（湯潅スペースの設置、土葬可能墓地の取得）などの活動が行われている。本報告では、2022年3月から2025年5月に実施したモスク関係者、信者への調査を中心に、「死」に関連する活動実態、さらに当事者たちの埋葬地選択の要因を整理する。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 日本と台湾における闘茶の歴史的変容

名前：　石橋健太郎　　廖育卿

所属：　福山大学　　淡江大学

闘茶は宋代の中国で発祥し、茶の品質や淹れ方を競う文化的実践として発展した。日本では、中世、特に室町期には近世以降の茶道とは対照的な茶の湯のあり方の一つとして闘茶が存在した。その闘茶は、茶の香りや味などから産地を推測するなどして複数の茶を飲み分けて勝負する遊びである。『花園天皇宸記』などに記録される中世特有の茶の湯の一形式と推測されるが、その内容は不明なことが多い。本発表では、現代の茶道の源流を探る一環として、『看聞日記』を主たる資料に、新春あるいは春の行事としての闘茶の実態を探りその意味について考察する。一方、台湾の闘茶は清代に中国福建系移民により伝えられ、19世紀の茶業の隆盛とともに各地で在地化した。特に南投や北部山間部では闘茶が農民の技術競争であると同時に地域儀礼や共同体の象徴的行為として根付いた。20世紀以降、闘茶は農会による品評会として制度化され、地域ブランドが確立し、観光文化資源ともなった。この過程で伝統的な慣習が近代的な社会・経済構造と交差し、新たな文化的意味を獲得している。そこで、台湾における闘茶の受容と変容を検討し、伝統文化の再編とその社会的意義についても考察する。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 日本語の語彙からよみとく日本人の自然観と信仰 －「やま（山）」・「もり（杜・森）」・「山（サン）」観念の共生に着目して－

名前：　岩松文代

所属：　北九州市立大学

日本の風土は、多くの地域で山を眺めることができ、現在でも国土の約7割が森林であるように山川草木が豊かである。日本人は古来、山や森を神聖なるものとして畏敬の念をいだく自然観を持ってきた。本研究では、日本人の自然観、とくに自然への信仰について山や森に関連する語彙をもとに考察する。日本語は、漢字の導入によって古くからの大和言葉と漢字の音読みが複合している。しかし、それぞれの意味は明確に一致するわけではないため、その差異をふまえつつ、歴史的に多くの語義が蓄積されてきた「やま（山）」、日本的な意味を持つ「もり（杜・森）」、音読みとして日本語となってきた「山（サン）」の語彙の意味と用法を検討する。「やま（山）」の語彙には、平地であっても野生の生物や恵みへの信仰を表すものがあり、「もり」は本来、神木や神社の神聖な杜の意味が強く、漢字の「山」や「森」では観念が表現されにくい信仰心がある。「山（サン）」には、仏教寺院の山号の意味もある。日本では自然界に神仏が共生する信仰が形成され、修験道なども生まれた。日本語の語彙からも、複層的な自然観の存在、複合的な信仰の共生をよみとることができる。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# TPACKモデルから日本語の学習・教育を再考する ―生成AIとの共存を見据えて―

名前：　尹智鉉　藤本かおる　麻子軒

所属：　中央大学　武蔵野大学　京都外国語大学

生成AIの登場と普及によって日本語の学習は大きな転換点を迎えており、日本語教育はイノベーションの必要性に迫られている。本発表では、発表者らが東アジア地域を中心に行ってきた３つの日本語教師研修の事例を取り上げ、その可能性と課題を考察する。【事例１】は、日本と韓国にいる日本語教育関係者が協力して行ったオンラインワークショップである。アメリカ発祥の問いづくりメソッドを援用して企画、実施した。【事例２】は、日本にいる主催者がCanva　認定教育アンバサダーを講師に迎え、計3回のシリーズで企画したオンラインワークショップである。講師による解説や事例紹介のほかに、日本語授業用のリソース作成等を行った。【事例３】は、台湾の大学院生および日本語教師を対象として対面で実施した講習会である。学習者または教師の立場で使える生成AIの活用方法を中心に情報提供と質疑応答を行った。これらの研修デザインおよび実施内容をTPACKモデル（Mishra & Koehler，2006）に基づいて分析し、今後の日本語教育における生成AIとの共存を見据える機会を提供することを本研究の目的とする。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 表音文字の読みにおける書字・音韻処理の過程の解明：日本語の仮名に注目して

名前：　加藤志織

所属：　東北大学

識字に困難のある人は、単語の視覚情報である書字の処理、あるいはそこから聴覚情報である音韻を結び付ける処理に問題があるとされる。心理言語学的研究により、視覚的な単語の理解は順次に進行し、書字を処理する段階から書字に対応する音韻を処理する段階、そして意味理解のために書字と音韻を統合する段階へと進むことが明らかになっている。このような視覚単語処理の段階についての知見は、識字の困難が単語処理のどの段階で生じるのかを特定し、根底にあるメカニズムを解明するのに有用である。しかし、これらの知見は音素文字を用いるヨーロッパ言語を対象に構築されてきたものである。したがって表音文字の中でも音素文字ではなく音節文字や、また文字と音の対応がより複雑、または単純な文字体系についてもヨーロッパ言語で確立された枠組みと同様に捉えることができるのかという点は未解明である。本研究は、日本語の仮名を対象に、その視覚処理における書字・音韻情報の処理の過程を明らかにすることで、日本語母語話者の単語理解のメカニズムを解明することを目指す。本発表では主にその理論的枠組みを紹介し、具体的な実験手法も提示する。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 現代日本語における臨時的な四字漢語動名詞の構造と自他性に関しての研究

名前：　陳志文

所属：　国立高雄大学

本研究は、「臨時的四字漢語動名詞」を対象に、その構造的特徴および自他性との関係を明らかにすることを目的とする。「臨時的四字漢語動名詞」とは、「二字漢語＋二字漢語」という形態で構成される一時的な複合動名詞を指し、新聞や雑誌、専門書などの書き言葉において高頻度で使用されるにもかかわらず、これまで体系的な研究が十分に行われてこなかった。本研究では、まず国立国語研究所が提供する「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」を用いて、該当する四字漢語動名詞の例文を抽出する。その上で、語構成（語彙的結合関係）と統語構造を分析し、それぞれの構造タイプが自動詞的・他動詞的性質、ならびに使役・受身・使役受身といった文法的振る舞いとどのように関係するのかを考察する。本研究の分析を通じて、①四字漢語動名詞の構造と品詞的結合における規則性、②統語構造における自他性の現れ方、③使役・受動構文との相互関係について、一定の類型化が可能であることが示されると期待される。以上の分析は、複合語構造と文法的自他性の関連性に関する理解を深めるとともに、現代日本語の語形成および文法体系に新たな視点を提供できるものを期待してい

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 成田空港の大規模拡張に伴う地域資料・文化財の緊急保全調査の現状と課題

名前： 相川陽一

所属： 長野大学

本報告では、現在、成田空港の拡張によって生じている大規模な村落移転に学問領域を横断して対応している地域資料・文化財等の保全活動の到達点と課題点を示す。そして東アジア各国で空港建設や機能強化が進行するいま、グローバル・ネットワークの構築が地域社会に不可避的に与える負の影響に学問領域を横断して向き合う意義を提示する。現在、成田空港の面積を倍増させる開発が進行し、複数の村落が全戸移転を余儀なくされている。数年のうちに、村落、田畑、里山が埋め立てられ、家屋、土蔵、集会所、景観が滅失する。日本では高度成長期の大規模開発の進行下で埋蔵文化財の保全制度が整備された。だが、地上物の保全にかかる制度やガイドライン等は未発達である。そこで本報告は、史学、建築学、考古学、民俗学等の専門家が学問領域を横断して地方自治体とともに進めている地域資料・文化財等の緊急保全活動の経過と現状を示す（区有文書、家文書、建造物、石造物、地域景観の保全と記録保存、地域文化を記録する聞き取り調査等の実施態勢と明らかになった知見）。そして、大規模開発下の地域資料・文化財等の緊急保全活動で最低限必要な実施事項とは何なのかを議論する

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 金原明善による更生保護事業と〈社会改良〉

名前：　伴野　文亮

所属：　**鹿児島大学**

金原明善（1832-1923）は、1882年（明治15）に静岡県で勧善会を設立し、以降半世紀にわたって刑期を終えた受刑者の更生と社会復帰を支援した。金原は、浜松典獄署内で「囚徒」に仏教僧による説教を施すことを試みて説教場の設立費用を寄附したほか、模範囚を表彰するために「賞与金」を施与するなど、更生保護事業の黎明期にあって刑期を終えた受刑者たちの社会復帰に主体的に取り組んだ。かかる実践の背景には、免囚を「善導」することで「昭代ノ良民」として社会復帰させ、近代天皇制国家を下支えする存在として更生させようという金原の思想が存在した。　金原による更生保護事業の実践については、いくつかの先行研究が存在するものの、研究蓄積は決して多くない。加えて、既存の研究史では、社会改良を目指して様々な実践に取り組んだ主体としての金原の思想全体における当該事業の位置付けも、十分に検討されているとは言えない。　以上の研究状況に鑑み、本発表では、近代日本社会で実業家として活躍した金原が展開した免囚保護活動の内実を検討し、受刑者の社会復帰を支援した金原の思想と行動の歴史的意味を検討するものである。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 牛鬼伝説にみる朝鮮半島

名前：　片岡樹

所属：　京都大学

牛鬼は愛媛県では祭礼の練り物として知られるが、牛鬼をめぐる伝説は周辺の四国・瀬戸内地方にも濃密に分布している。それは時には牛馬を害する妖怪として、また別の事例では人を襲う水辺の妖怪として描かれるなど、全体に共通する属性を見出しにくいという意味では、家族的類似にもとづく多配列的な範疇とみることができる。ここで注目すべきは、さまざまな類型の牛鬼伝説の中に、しばしば朝鮮半島モチーフが登場することである。それはたとえば神功皇后による三韓征伐、加藤清正の朝鮮出兵、朝鮮半島から連れてこられた技術者、新羅からやってきたとされる鬼などである。これらが何を意味するのか、またどのような社会状況を反映しているのかについてはまだ明らかになっていないが、まずは本報告を通じて日本国外の研究者と情報を共有することで、牛鬼と朝鮮半島モチーフの結合をいかに解釈するかを考察する上での一助としたい。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 国鉄労働者の演劇運動と女性労働者（1945-1950）
## ―プランゲ文庫内の国鉄労働組合機関紙の分析を中心として―

名前：　長島祐基

所属：　早稲田大学先端社会科学研究所

本報告では1945～1950年の国鉄労働者の演劇運動（労働者が劇を作り、上演する活動）を扱う。プランゲ文庫の中にある各地の国鉄労働組合の機関紙と当時刊行された戯曲集から、男性労働者が職場をテーマとして創作した戯曲の中での女性労働者の位置づけと、女性労働者が創作した戯曲のテーマを分析する。戦後、国鉄労働組合では全国鉄演劇コンクールが開催され、各地の機関紙にも演劇運動の記事や創作された戯曲が多数掲載された。創作された戯曲の多くは男性労働者が創作した戯曲だが、1945～1950年に創作された戯曲の中には女性労働者が創作した戯曲もあり、女性労働者が登場する戯曲もある。敗戦直後の国鉄では戦時中の勤労動員などを通じて若い女性が多数働いており、電話交換手を対象とした戯曲では女性労働者が登場した。また、女性労働者の中には戯曲を創作する人もいた。しかし戦後に男性が復員すると女性労働者は職場から追われて行く（豊田 2007）。異動によって女性作家が所属していた演劇サークルの活動から離れざるをえなかったとの記述もあり、女性作家が創作した戯曲では人員整理に直面する女性労働者達の苦悩も描かれた。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 〈境域〉における夢幻性の文学
## －又吉栄喜「冥婚」を中心に－

名前：　柳井貴士

所属：　愛知淑徳大学

沖縄県浦添市出身の又吉栄喜は1995年下半期の芥川賞を「豚の報い」で受賞している。又吉の作品は生まれ育った浦添の生活圏（半径2キロ）に根ざしたものが多く、それまでの沖縄の文学作品があらわした米兵の相対化（「カーンバル闘牛大会」等）の試みの他、沖縄の文化性を表象した作品を書き記している。本発表では又吉作品の夢幻性に注目したい。例えば又吉は短編集『夢幻王国』（2023年）において、沖縄戦を「名も無い生活者のレベルから俯瞰し透視」（大城貞俊）した。所収された「全滅の家」では、曖昧な領域としての幽界が舞台とされ、生と死の再接触が描かれる。ここには南米文学において用いられる「マジックリアリズム」的手法との通底が指摘できる。本発表で扱う「冥婚」（2015年）は、沖縄戦での戦災を免れた幸地集落を舞台として、生き残った女性と戦死した男性との婚姻が果たされるまでを描いている。本作の集落を生と死の交じり合う〈境域〉ととらえ、夢幻的な空間における時間を曖昧にした死者と生者の出会い直し、また死の痛みを死者そのものが共有する可能性について考察を進めていく。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 虚構の焼却から現実の隠喩へ―村上春樹「納屋を焼く」とイ・チャンドン監督『バーニング』におけるメディア横断的・文化横断的改編の考察

名前：　梁蘊嫻

所属：　Yuan Ze University

本研究は、村上春樹の短編小説「納屋を焼く」と、韓国の映画監督イ・チャンドンによる映画『バーニング』との間に見られる語りの差異と文化的翻訳の過程を分析することを目的とする。原作は第一人称による省略的かつ内省的な語り口を用い、実在と虚構のあいだに揺らぐ存在の不確かさを描き出す。一方、映画『バーニング』は原作の核となる主題を保ちつつ、視覚的表現とストーリーの拡張によって、個人の不安を現代社会における階級・資本・構造的暴力への批判へと昇華させている。本研究では、改編理論およびカルチュラル・スタディーズの視点から、語りの構造、登場人物の描写、主題的象徴、社会的背景の四つの側面に注目し比較分析を行う。特に、映画が物語の舞台を韓国社会にローカライズすることで、原作では暗示的に描かれていた階級対立や無関心な暴力をより明確に表現している点を論じる。また、映画における女性キャラクターの再構築によって、社会的に疎外された存在としての「ヘミ」の象徴性も強化されている。本研究は、『バーニング』が村上作品に対する忠実な翻案であると同時に、文化的再構成とローカルな再解釈による創造的作品でもあることを示す。こうし

[個人発表]

⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家

# 半導体サプライチェーンの再構築と今後の見通し

名前：　葉東哲

所属：　台湾国立台中科技大学

半導体産業におけるグローバルサプライチェーンの再構築の動きが近年クローズアップされるようになった。それは、各国にとって半導体の安定供給は、市場の潜在性の観点からだけではなく、経済安全保障の観点からも、重要な課題となっているからである。半導体が世界的に戦略物資としての性格を強めている今日において、米中の覇権争いが続く中、先端半導体の確保が重要視されるようになり、多くの国が補助金や優遇政策を打ち出し半導体工場の誘致と育成に動き出している。その中で、2025年に第2次トランプ政権が発足し、America　Firstに象徴される自国第一主義を掲行われた保護主義的な通商政策は、グローバルサプライチェーンの分断を加速し、より複雑化した。グローバル半導体企業が如何にサプライチェーンの再構築をはかるか、それを明らかにするのが本稿の目的である。第一節において、半導体産業におけるグローバル企業の動きを概観する。第二節では、その動向に深く影響する要因を先行研究と合わせて考察する。第三節では、台湾の半導体関連企業が直面する課題について考察する。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 日本における「記憶の法」の考察

名前： 小谷順子

所属： 静岡大学

近年、各国（又は法域）の法制度を「記憶の法（memory law）」---歴史上の何らかの重要な出来事を国家または国民の「記憶」として継承する機能・効果をもつ法---という観点から分析・考察する研究が展開している。先行研究では、「記憶の法」をその機能や目的に着目し、(a)過去の重大な出来事に関する公定の解釈から逸脱する言論に刑罰を科す立法と、(b)刑罰は科さないものの何らかの歴史上の出来事の記憶の継承を目的として設けられる法制度に大別したうえで、歴史の記憶を公定することの可否、公定する主体（たとえば立法府、司法府、歴史学専門家、社会全体（「思想の自由市場」）ほか）、公定の手法について分析するものが多いが、さらに「記憶の法」の内容に着目し、(c)自責・自省型（self-inculpatory）と(d)責任否定型（self-exculpatory）型とに分類して考察するものもある。本研究では、先行研究の分析手法を用いつつ、日本の法制度にみられる「記憶の法」を特定しつつその分析を試みることを通し、東アジアの一国としての日本における今後の「記憶の法」のあり方に示唆を与えることをめざす。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 冷戦終結後、日本における安全保障言説の変化 －国際貢献からウクライナ戦争まで

名前：　加藤博章

所属：　朝日大学

本報告では冷戦終結後の日本における安全保障言説の変化を分析する。冷戦終結後、東アジアにおいては北朝鮮の核・ミサイル問題や中国の経済的、軍事的台頭といった安全保障環境の変化が生じた。一方、日本にとっては、冷戦終結という国際情勢の変化の中の中で日米安全保障関係が行われるのではないかといういわゆる「見捨てられる」可能性が指摘されてもいた。こうした状況の中で、日本においては国際社会に貢献する日本と言う言説が登場することになる。憲法9条に縛られ、消極的な対応を行うのではなく、もっと積極的に人的な役割を果たすべきという議論である。冷戦終結後はこの種の言説が政策担当者やオピニオンリーダーに生まれ、2000年代以降は日本外交において主流の考え方となっていく。それでは、安全保障言説の変化が如何に生じ、政策決定にどのような影響を与えたのか。この点については必ずしも明らかになってこなかった。本報告では、1990年代から現代に至るまでの日本における安全保障言説の変化を分析し、政策決定過程にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 日本のレアアース政策と経済安全保障

名前：　楊雯婷

所属：　国立政治大学

中国はトランプ大統領の関税措置への報復として、2025年4月4日、7種の中・重希土類元素および関連製品に対する輸出規制の対象に加えると発表した。レアアースサプライチェーンの中国への過度な依存問題は、再び世界の注目を集めている。この動きは、2010年の中国による対日レアアース禁輸制裁を想起させる。この出来事は、日本のレアアース政策と経済安全保障政策にどのような影響を与えたのだろうか？本稿の目的は以下の問題を答えることです。2010年の中国による対日レアアース禁輸事件は日本のレアアース政策にいかなる変化をもたらしたか？「経済安全保障促進法」の策定過程において、レアアースと2010年の禁輸措置についてどのような議論があったのだろうか？現在の経済安全保障政策、特に重要鉱物政策にはどのような変化があり、これらの政策は特定の国からのレアアースおよび関連製品への依存を効果的に低減させたのだろうか？

[個人発表]

⑭東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# 大阪・関西万博のレガシーをめぐる住民意識 ―東アジアメガイベント論の視点から

名前：　丸山真央

所属：　大阪大学

オリンピックや万国博覧会などの国際的な大規模イベントは「メガイベント」と呼ばれ、観光、文化交流、都市などの分野で学際的に研究が進められている。21世紀に入って東アジアでは、五輪と万博の開催が相次ぎ、中東と並んでメガイベントのホットスポットになっている。こうした背後には、メガイベントに否定的でない開催地住民の意識があると考えられるが、そうした実証的な研究はまだ多くない。本報告では、2025年大阪・関西万博の開催地元の住民意識に着目し、開催への賛否と開催後のレガシーの認知を、大阪府民を対象に実施した2回のウェブ調査のデータにより検討する。それによると、財政負担などの負のレガシーの認知より、インフラ整備や経済的利益などの正のレガシーの認知のほうが開催自体への態度を強く規定しているのが明らかである。東アジアのメガイベントの研究では、国家主導の誘致・開催や経済成長・都市開発志向といった特徴が指摘されてきたが、万博開催が都市再開発や経済活性化と結びついて住民が開催を受け入れているという点で、大阪・関西万博の地元世論にも、そうした指摘は当てはまる。こうした特徴が他の東アジア諸国でもみられるかは、今後

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# コリアン・ディアスポラの他己像
# ー小説パチンコの映像化をめぐって

名前：　梁仁実

所属：　岩手大学

最近、在米コリアン作家であるイ・ミンジンの原作小説『パチンコ』が、2022年3月からグローバルOTTサービスであるApple　TVにてドラマとして放映された。このドラマは、植民地時代の朝鮮・釜山を出発点に、大阪、アメリカ、東京などを舞台に、時代の流れとともに4世代にわたる在日コリアンの歴史を、主人公・ソンジャの視点から描いている。現在、シーズン2まで制作されたこのドラマにおいて、本発表が注目する点は、シーズン1（全8話）が在米コリアンのジャスティン・チョンとコゴナダの両監督により、それぞれ4話ずつ演出されたこと、そしてシーズン2（全8話）では在日コリアンの監督である李相日が演出を担当したという点である。在日コリアンの物語は、朝鮮半島や日本にとどまらず、世界中で受け入れられるコンテンツとして定着したのである。本研究では、在日コリアンの物語構造を持つ文化テクストが翻訳・翻案される過程において、コリアン・ディアスポラのアイデンティティがどのように再現されるかを、原作と翻案・翻訳作品の比較、そして創作者・翻案者・翻訳者を通じて考察する。

[個人発表]

⑮ 地政学の回帰：技術、気候、通商を揺るがす変化の波

# トランプ政権の関税政策が東アジア半導体産業に及ぼす地経学的リスクとサプライチェーンへの影響

名前：　呉嘉鎮

所属：　真理大学

本稿は、台湾の半導体大手TSMCによる日米進出を中心に、トランプ政権の関税政策を踏まえ、日台半導体連携の地政学的意義と現状を分析する。2024年の米大統領選後、米中対立が再燃し、半導体供給網の安定性が国際的課題となっている。TSMCは地政学的リスク分散のため、熊本県に日本先進半導体製造（JASM）を設立し、ソニー、デンソー、トヨタと連携して工場を建設、2024年末に稼働を開始した。一方、日本政府は2022年、北海道にラピダス株式会社を設立し、2nm世代の最先端ロジック半導体の国産化を目指している。2020年以降、日台の半導体連携は順調に進行しているが、トランプ政権の圧力により、TSMCは2024年春から米国への投資を増大させ、日本の半導体産業への影響が懸念される。また、韓国、中国、欧州の半導体投資も変動が予想される。本研究では、日台連携の深化と米中対立下における半導体供給網の再構築を考察し、地政学的リスクを踏まえた持続可能な半導体エコシステム構築の課題と展望を明らかにする。

[個人発表]

⑬ 国際開発協力の新しいパラダイム：東アジアの役割と戦略

# 国際観光を通じた持続可能な先住民文化の保護と活用：台湾原住民のケーススタディより

名前：　池見真由　　陳堯柏

所属：　札幌国際大学　　札幌国際大学

本研究は、台湾の先住民観光を事例として、外国人および台湾人の旅行者（ゲスト側）と、体験型観光を企画・提供する台湾原住民のスタッフおよびガイド（ホスト側）の双方への調査結果を基に、国際観光を通じた先住民文化の持続的な保護と活用の可能性について検討することを目的とした。ゲスト側には、観光に対するイメージや情報源、参加動機、体験内容、体験後の満足度などを、ホスト側には、個人属性、業務内容、先住民観光に対する認識、地域の発展や経済効果への見解、自身の仕事に対する評価、観光客への要望などを調査した。その結果、ゲスト側では文化的好奇心や伝統的パフォーマンスへの強い関心や高い評価が認められる一方で、情報源の乏しさや交通の不便さといった問題点も指摘された。ホスト側では文化を伝える仕事への誇りや国際交流の機会に高い価値が見出されている一方で、地域の経済発展への期待に加えて、政府に対する観光産業への支援策や交通などの環境整備の要望も示唆され、持続可能な先住民観光のあり方についての諸課題が明らかとなった。

# [次世代発表]

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 人びとにとっての戦争責任論－山本慈昭による遺骨の処遇をめぐる実践を中心に－

名前：　山本潤子

所属：　大阪大学

本報告は、中国東北部（旧満洲、以下満洲）への満洲農業移民を多く送出した長野県飯田下伊那地域において、引揚者が主導した日本人の遺骨収集と現地慰霊を求める運動を取りあげる。この運動は、当時国交がない中華人民共和国と日本の帰国三団体（日中友好協会、日本赤十字社、日本平和連絡会）の民間交流を回路として、日本人引揚をめぐる交渉との相関のもとで展開した。また、引揚問題の交渉過程において、日本側からはアジア・太平洋戦争中に日本国内に連行され、過酷な労働や虐待により犠牲になった中国人の遺骨送還が提案される。こうして、戦後処理としての文脈に規定された民間交流を媒介に、引揚者である元開拓団幹部については、中国人と日本人、ふたつの遺骨の処遇をめぐる実践が前景化されていく。　本報告では、戦時末期に開拓団員として渡満し、「中国残留孤児の父」として知られる阿智村長岳寺住職・山本慈昭による、ふたつの遺骨の処遇をめぐる戦後の実践を検討する。「他者」認識への契機となった、個人史における社会運動との交差経験を跡づけながら、民衆の戦争責任論について検討する。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 戦時期における中国語教育の再解釈
## －戦後初期の中国語学習誌からみる中国認識－

名前：　野﨑雅子

所属：　早稲田大学

戦中の日本では、大東亜共栄圏構想の下、「侵略」を目的とした中国語教育が活発に行われてきた。終戦後の日本において、中国語教育をはじめとする言語教育の目的は一変し、言語教育の目的は、「侵略」から「国際交流」へと大きく転換した。多くの言語教育では、この転換の過程において戦中の侵略を目的とした教育に対する振り返りが行われなかった一方で、中国語教育においては、戦後まもない時期に様々な媒体で戦争への加担に対する振り返りが積極的に行われてきたことが指摘されている。しかし、中国語教育関係者がどのように戦中の中国語教育を振り返ってきたのかに関する詳細な研究は未だみられない。　本研究の目的は、戦後初期の日本における中国語教育関係者が、戦中に行われた中国語教育の戦争加担をどのように振り返り、それをふまえて戦後の中国語教育の役割をどのように位置付けてきたのかを、その背景とともに明らかにすることである。本研究では、戦後まもない1946年に発行された『新中華』およびその後続誌である『中国語雑誌』（1951年廃刊）における中国語教育関係者の言説を中心に分析を行う。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 近代日本・中国における銀行制度の変容比較
## ―政府と地方銀行に着目して―

名前：　王春佶

所属：　筑波大学

銀行制度は欧米の先進制度として東アジアに伝来した後、日本と中国を代表とする近代東アジア諸国においてそれぞれ独自の銀行制度が創設された。そして、金融の面で国家の力を基層社会に浸透してゆく。本稿の目的は日、中両国の事例を比較し、基層経済と関与する地方銀行の誕生から朝鮮戦争の1950年までの間に、両国の政府が地方銀行に対する整備の過程を歴史学の視点から検討し、それぞれの銀行制度変容の背景と特徴を明らかにすることである。日本では銀行に対する姿勢は最初の強勢の介入から、徐々に市場経済による諸銀行の自然な合同に変化した。地方銀行は、私立銀行や銀行類似会社を吸収しつつ、政府からの自主性を形成していた。この自主性は「経済社会の要求を洞察し、これに即応したの経営」という日本の地方銀行の特徴を形づくった。一方、中国では清朝政府の壊滅に伴い、地方銀行が地方勢力の中央からの独立を支えるす経済基盤になった。中央政府は政治的統一を目指して国家系銀行の力を強化し、地方銀行を行政的手段によって中央政府の支配下に置いた。この動きは、最終的に中華人民共和国の成立とともに、国家統制による単一式銀行制度へと結実した。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 歴史認識をめぐる〈教育〉―帝国日本の暴力の歴史を伝えるノンフォーマル教育に着目して

名前：　小谷英里

所属：　一橋大学大学院

本報告の目的は、歴史認識をめぐる〈教育〉について、帝国日本による侵略戦争や植民地支配の歴史を伝えるノンフォーマル教育に着目して論じることである。歴史認識をめぐる論争が先鋭化する昨今の状況に呼応するように、歴史教育のあり方をめぐる議論が蓄積されている。従来の議論が着目してきたのは、とりわけ学校教育における教師の実践やカリキュラムのあり方などである。一方で、学校教育が制度的、政治的制約を受けやすいなかで、そうした状況に対峙しつつ豊かに発展してきた草の根による取り組みは、教育的な実践を含み込むにもかかわらず十分に焦点化されてこなかった。そこで、本報告では、「ノンフォーマル教育」という概念を手がかりとして、学校教育にとどまらない多様なかたちで営まれてきた歴史認識をめぐる教育的な取り組みの人間形成作用を検討する。より具体的には、ノンフォーマル教育の場が人びとの生き方や生活様式に影響を及ぼしたありようの一端を、生活史の分析を通じて明らかにすることを目指す。この作業を通じて示唆されるのは、他者や環境との種々の相互作用が、人びとが歴史を自己と繋がる問題として捉え直す契機を与えるという可能性である。

[個人発表]

① 東アジアの歴史認識問題

# 17世紀欧州における徳川家康の表象について

名前 ： 竹内洪介

所属 ： 就実大学

本発表は、17世紀欧州において、徳川家康が世界的に著名な偉人として伝記・絵画の形で表象されたことを前年度に本学会で発表した「17世紀欧州における豊臣秀吉の表象について」に続く形で指摘し、当該地域における日本への興味について分析するものである。前回の発表では、主に以下の三点を示した。

①オランダ、ドイツ、オーストリア、イタリアの四か国において、17世紀に秀吉の伝記・絵画が出版・流通していたこと。

②秀吉が17世紀欧州では世界的な偉人として注目されていたこと。

③日本ではなくアジアの武将として秀吉が認知されていたこと。

これらの成果を踏まえ、本発表は欧州諸国に伝わる複数の家康肖像・伝記の類を紹介し、前回示した成果と併せて分析することで、17世紀欧州における日本人への興味・知識を把握したい。まず、従来家康は17世紀欧州において秀吉と対立的に示されるとされてきたが、実際には秀吉と家康は個々に顕彰されてきたことを指摘する。次に、調査範囲を欧州全域に広げ、秀吉・家康への興味が中央ヨーロッパに偏っていることを示す。最後に、当該地域における日本への関心の理由を同地におけ出版社の活動の側面から闡明する。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 化政期における佐藤信淵の「処士横議」としての思想と学問的交流 - 経世論および国家論の形成に着目して -

名前： **金時煥**

所属： 東北大学

佐藤信淵(1769～1850)は、父祖からの家学をもとに当代のあらゆる矛盾を解決するために、分野を問わず多方面に工夫していた経世家である。信淵が経世済民の志を抱くようになった頃、幕府では改革の一環として「処士横議の禁」を断行、幕府の方針に反すると看做される諸学問を禁止した。しかし、そのような措置は政局を安定させようとする幕府側の意図とは異なり、むしろ幕藩体制の構造的危機をさらに顕在化させる結果を招いた。その背景を踏まえ、信淵はより新たな国家構造として、民生の安定と国の興起などを図るための彼なりの斬新な議論を繰り広げていくに至った。この諸議論は、経世学はもちろん、蘭学、兵学、国学に至るまで多様な学問の受容を通じて形成されたと言える。則ち、当時の信淵の国家改革案における学問の受容及び交流とその議論との関連性を考察することは、当代の諸学問の要素がどのような特徴を帯びて形成していき、それが後代の国家観に示唆するところが何であるかに対する一面を把握するのに役立つと考える。　　従って、本研究では、所謂「処士横議」としての信淵の経世論、国家論の形成に注目し、それが持つ意義について明らにしたい。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 宗教の価値論：明治啓蒙期における西周と津田真道の思想的接点と分岐

名前：　李心羽

所属：　総合研究大学院大学

西周と津田真道は幕末から明治期にかけて活躍した洋学者であり、明六社においてそれぞれ独自の宗教観を展開した。その背景には、明治初期に推進された神道の国教化政策やキリスト教解禁といった宗教政策、さらに西洋の科学技術および文化の流入に伴うキリスト教信仰の拡大がある。　本研究では、西と津田の宗教論を中心的な検討対象とし、両者が宗教の本質、信仰の自由、宗教の国教化といった問題に対して示した理解と主張を分析する。資料として、西の『教門論』（一～六）および『霊魂一元論』、津田の『開化を進る方法を論ず』と『唯物論』（一～十五）を用いる。両者は、儒学による教養を基盤とし、青年期に蘭学を修めた後、蕃書調所の同僚として共にオランダに留学しており、少なくとも青年期までの知的背景において高度な類似性を示している。明六社期においては両者の見解にしばしば相違が見られたものの、晩年には思想的収斂が徐々に顕著となっていく。　本研究を通じて、両者の宗教論を明らかにするだけでなく、当時の無宗教的立場を取った知識人の思想の一端も考察することが可能となる。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 化政期における佐藤信淵の「処士横議」としての思想と学問的交流 - 経世論および国家論の形成に着目して -

名前： **金時煥**

所属： 東北大学

佐藤信淵(1769～1850)は、父祖からの家学をもとに当代のあらゆる矛盾を解決するために、分野を問わず多方面に工夫していた経世家である。信淵が経世済民の志を抱くようになった頃、幕府では改革の一環として「処士横議の禁」を断行、幕府の方針に反すると看做される諸学問を禁止した。しかし、そのような措置は政局を安定させようとする幕府側の意図とは異なり、むしろ幕藩体制の構造的危機をさらに顕在化させる結果を招いた。その背景を踏まえ、信淵はより新たな国家構造として、民生の安定と国の興起などを図るための彼なりの斬新な議論を繰り広げていくに至った。この諸議論は、経世学はもちろん、蘭学、兵学、国学に至るまで多様な学問の受容を通じて形成されたと言える。則ち、当時の信淵の国家改革案における学問の受容及び交流とその議論との関連性を考察することは、当代の諸学問の要素がどのような特徴を帯びて形成していき、それが後代の国家観に示唆するところが何であるかに対する一面を把握するのに役立つと考える。　　従って、本研究では、所謂「処士横議」としての信淵の経世論、国家論の形成に注目し、それが持つ意義について明らにしたい。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 大正期における経済関係者の日華親善論の検討
## -1917年内藤久寛と日置益の訪中を中心に-

名前：　何琦璠

所属：　東北大学

本研究は、大正期における中国人留学生支援活動に関する日本側の動向、とりわけ民間中国人留学生支援団体「日華学会」や東亜高等予備学校に関わった人物に注目するものである。とりわけ、本発表では石油業者であり、かつ日華学会創設者の一人である内藤久寛に焦点を当てる。内藤は1917年、同じく政界に関わりのある日置益とともに中国を訪問しており、この訪中経験がその後の彼の中国観や日中関係に関する思想に大きな影響を与えたと考えられる。本研究では、この訪中旅行の記録や、内藤・日置の対中認識、さらには当時の新聞報道などを手がかりに、両者がこの旅を通じて何を見て、何を感じ取ったのかを考察する。本旅行は、「対支文化事業」として中国人留学生支援政策が本格化する直前、また「二十一か条要求」事件の前後という、極めて政治的に重要な時期に行われており、この旅が両者の政策判断や対中姿勢に与えた影響を検証することは意義深い。本発表では、この旅行を切り口として、日本の民間による対中支援政策の変容を読み解くことを目的とする。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 安藤昌益の人間論的視座－公共哲学への接続可能性

名前：　尹馨憶

所属：　東北大学

本稿は、安藤昌益の思想における人間理解のあり方に注目し、その存在論的基盤を明らかにすることを通じて、公共哲学への接続可能性を探ることを目的とする。昌益は近世倫理の表層化と制度的偽善を批判し、人間存在の本質から理想社会の在り方を構想した。彼は、人間を自然内存在と捉え、「直耕」による自然との直接的関係を人間の本来的な在り方とみなしていた。この自然主義的な人間観においては、個の多様性と共の等価的なつながりがともに本質的なものとされ、社会の原理もまた人間の在り方そのものに支えられるべきものとされる。したがって、「万人直耕」の理想社会論も、制度的平等ではなく、相互扶助的な関係性に根ざした公共性の構想と読みうる。先行研究では、昌益の平等社会論が公共哲学的観点から注目されてきたが、本稿はそれを支える人間論的前提に立ち返る必要性を主張する。昌益における自然観は、人間を自然の一部として位置づけ、主客二元論を超えた共在的な理解を促すものであり、そこに他者との共生や公共性の原理の基盤が見出される。以上の観点から、昌益の思想に内在する人間論的契機と公共哲学の接点を明らかにする。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 儒教における楽学思想の日本受容
## －江戸初期の心学的傾向を中心に

名前：　石咏絮

所属：　東北大学

儒教思想史において、「孔顔楽処（孔顔至楽）」は古くから儒者にとって最高の人生境地とされ、君子の理想として追求されてきた。この命題は宋代の程朱理学において、精神生活の核心課題として位置づけられた。しかし、宋明儒学では、体系的な楽学思想としては十分に発展しなかった。一方、日本では江戸初期に独自の思想的背景のもと、儒教の楽学思想が展開された。その代表例が中江藤樹による安楽論であるが、彼がなぜ「楽」に注目したのか、またその背景にどのような要因があったのかについては、依然として十分に解明されていない。本発表では、江戸初期における楽学思想の受容と独自の展開の背景を明らかにすることを目的とする。この目的に基づき、まず儒教における楽学思想の発展とその意義を整理し、次に江戸初期の時代的背景として、心学的傾向の形成を仏教・儒教・文学の三つの側面から分析する。儒教における楽学思想の日本への受容は、これまでの先行研究において十分に注目されてこなかった。本研究の意義は、そうした先行研究の見落としを補い、江戸初期における楽学思想の伝播を可能にした歴史的背景を明らかにする点にある。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 海をまたぐ亡命儒者朱舜水―近世東アジアと易姓革命

名前：　徐燕斌

所属：　東京大学

朱舜水（1600～1682）は異民族統治の清に抵抗し明の復興を志して奔走の末、長崎に渡来して筑後柳川立花家中の儒者安東省菴（1622～1701）の援助を受けて暮らし、後に水戸藩主徳川光圀（1628～1700）の招聘で江戸へ移住した。そのため、安積澹泊（1656～1738）ら水戸藩家臣・儒者が彼に師事する縁が生まれ、水戸学の形成に多大な影響を与え、さらに明治維新（革命）の推進力となった人物として物語られている。朱舜水は明治日本にとどまらず、清末中国へ再び逆輸入され、当時の排満反清の知識人らに利用されたのである。このような「維新の推進力」「排満反清の忠臣」という位置づけは、あくまでも近代になってから付加されたものである。しかし、朱舜水という近世の人物が近代の東アジアの「革命」と連関されたのは実に近世と近代の思想の連続性を見せている。そこで、本報告は明末清初という歴史の場に戻り、これまで故意に誇張・誤読された朱舜水を改めて検討し、従来先行研究で注目されてきた華夷秩序の枠から脱し、儒者としての朱舜水の正体および彼の「易姓革命」に対する認識を明らかにする。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 明治・大正期におけるアジア主義と自由主義の交錯：宮崎滔天の「国家の相対化」思想

名前：　辜傲然

所属：　名古屋大学

明治後期から大正期においては、公的領域を規定する中心概念として、「国家」に代わって「社会」が思想的に顕在化する転回が生じた(「社会の発見」)。従来の研究では、明治中期以来の国家主義と民主主義がこの思想的転回を経て結合し、昭和期の東アジア帝国秩序を正当化するイデオロギー(アジア主義)へと回収されいく過程が解明されてきた。しかし、ナショナリズムに重点を置く従来の視座では、アジア主義に内包された自由主義的な要素への検討は不十分である。本論文では、「社会の発見」とほぼ同時期に展開された、「国家の相対化」というアジア主義自体の社会化過程に注目し、そこに自由主義と交錯する思想的位相が存在することを明らかにすることで、アジア主義に対する一元的理解の克服を試みる。具体的には、アジア主義者・宮崎滔天の思想を媒介とし、アジア主義と自由主義の交錯状況を明らかにする。その際、宮崎が中国革命の支援活動に携わった思想的動機と、大正期における彼の「社会主義」的言論を分析し、両者の内在的連関を析出する。これにより、近代日本におけるアジア認識の思想的多様性を再検討し、アジア主義の新たな全体像を提示する。

[個人発表]

② 東アジアの思想交流

# 日本賦役令の丁匠の継受と匠丁の創出―古代東アジアの技術労働力徴発体制について

名前：　宋兆輝

所属：　東北大学

古代の日本と中国は、共に律令格式を社会の根幹としていた。中国では、儒教のイデオロギーをもとに、各時代の需要に応じて、律令格式が重層的に構築され、唐の時代において、一つの到達点に至った。この成熟した法律体系は、数回にわたって、日本に導入された。日本の賦役令斐陀国条は、独自の条文であり、飛騨国の「匠丁」に対する徴発方法と当国の特殊な調庸規定が記されている。この「匠丁」は、日唐の賦役令の他所からは見出せない概念であり、律令にしばしば現れる「丁匠」との違いが検討され、徴発制度としての匠丁制が日本の雇役制と別に存在していたと指摘されている。しかし、「匠丁」と斐陀国条の律令における位置付けや実際の役割などは、不明のままである。本論では、まず唐の「丁夫雑匠」と「丁匠」の意味を再確認し、日本における「丁夫雑匠」と「丁匠」の継受を検討する。さらに、慶雲三年格と養老四年格を考察し、日本の大宝令において「匠丁」が創出された意義と、斐陀国条の日本令における位置付けを考える。律令思想に対する日本の継受と調整を検討し、日唐の徴発体制や新たな社会問題に面した際の日唐の律令体系の異なる対応を比較する。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# 日中仏教の交流から見る20世紀前半中国仏教の近代改革―日中仏教の相違点に着目して

名前：　何雨

所属：　筑波大学

本研究は20世紀前半の日中交流をめぐって、日本仏教の近代改革方法は中国国内に導入され現地化された過程において、日中仏教が直面した共通する課題を明らかにした上で、中国仏教改革における日本仏教の要素を捉える一方で、中国仏教の独自性を提示するものである。廟産興学運動は清朝政府が列強の侵略、財政困難などの内憂外患を克服するために打ち出した方針であり、中国の固有の歴史的背景の中で誕生した独特なものである。一方、国家の近代化を図った日本でも、仏教は廃仏毀釈の危機を迎えた。その際に、仏教への攻撃に応じた改革の共鳴が、日中両国の仏教界の間において引き起こされた。清末に日本に遊歴した中国人僧侶は、日本仏教改革の一環である社会事業から感銘を受けて、帰国した後に、中国の各地で社会事業を行った。20世紀20年代に至り、近代日本の仏教改革を模倣し、寺廟の財産を社会事業のために利用するという仏教の「社会化」が呼びかけられた。本研究は、東アジア諸国が近代化を進める中で、各国の歴史の民族性や特性を理解する上で、仏教の近代的な社会化改革を多角的に提示することを目指したい。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# 黄檗僧杲堂元昶に関する考察

名前：　沈駿楠

所属：　浙江工商大学

隠元隆琦（1592－1673）以降、明清期に中国から日本へ渡って黄檗宗の法脈を継承した僧侶たちは、江戸時代における臨済禅を伝播する中核的担い手となった。そのなか、万福寺第十二世住持を務めた杲堂元昶（1663－1733）もその一人である。清康熙六十（1721）年の夏、浙江省石門県出身の禅僧杲堂は法兄である旭如蓮昉（1664－1719）の遺書を受け取り、海商の船に搭乗して日本へ渡航した。その後、万福寺に入山して住持となり、布教活動を開始した。杲堂は黄檗宗本山万福寺の住持であったにもかかわらず、現在公開されている関連資料は極めて少なく、先行研究はほとんど見られない。本発表では、『黄檗東渡僧宝伝』『通航一覧』等の文献を手掛かりに、杲堂元昶の渡日前後の行跡を追跡し、日本に現存する関連遺品の調査を試みる。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# 王族・貴種の出家から見る古代東アジア諸国の仏教受容

名前：　阿部栞央

所属：　東北大学大学院

東アジア諸国には、古くより自ら出家する王族・貴種が存在する。六世紀、南朝梁では初代皇帝・武帝が菩薩戒を受け、新羅の法興王・真興王・真興王妃などは出家し寺院に起居したといわれ、名僧慈蔵は王子であった。時代は下るが契丹の興宗も律学僧・澄淵から受戒したとされる。ただし概して単発的であり、特に中国では剃髪が「孝」に背くとされ、仏教興隆は支配者層の出家を意味するとは限らなかった。しかし日本では皇親の出家が継続的に確認でき、更に十一世紀になると出家した高位官人が世俗における権力を維持し続けるようになる。このような日本の特異な状況は如何にして生まれたのか、新羅をはじめとする東アジア諸国と比較することで背景を明らかにしたい。具体的には、剃髪行為そのものが各文化において如何なる受け止められ方をしていたのか明らかにし、出家が王族・貴種の立場・生活に齎す変化を比較する。また出家した王族・貴種が僧尼集団のあり方に与えた変化もあわせて考えたい。

[個人発表]

③ 東アジアにおける宗教交流

# インディオスと僧侶のあいだ －近世カトリック世界における日本と東アジア

名前： Victor Laubenstein

所属： 東京外国語大学

近世東アジアにおけるイエズス会の初期布教活動は、欧州とアジア双方の学界で注目されてきたが、地域間の学術対話には依然として重大な課題が残されている。この断絶により、それぞれの学術的伝統に根差した視点が強化されがちである。本報告では、16世紀日本におけるキリスト教法と仏法の出会いが、近世のより大規模な世界的潮流の一部を形成していたことを論じる。この出会いは、インドや南米における先行する宣教的・殖民地的経験に影響を受けつつも、独自の神学的論争や文化的交流を生み、逆に世界的なキリスト教の展開にも影響を与えた。これを実証するため、16世紀後半の日本で作成された二つの文書（『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』と『Manuale ad Sacramenta Ecclesiae Ministranda』）を分析する。これらは西洋の宗教的枠組みと東アジアの文脈との複合的な相互作用を示し、地域におけるキリスト教の発展について新たな知見を提供する。これらの史料を宗教的交流の広範なナラティブに位置づけることで、地域的・世界的な宗教的景観において看過されがちな多様な遭遇への統合的理解に貢献することを目的とする。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# アジアから日本への若者移民
# ー2010年代以降の留学生に注目して

名前：　渋谷淳一

所属：　法政大学大原社会問題研究所

日本に中長期的に滞在する外国人は約358万人（2024年6月末）であり、日本の総人口の約3％を超え、コロナ禍前の水準を大きく上回った。増加率を見ると2016年以降6％を超える規模である（コロナ禍以降は減少したが、22年6月では7.6％増加）。　この増加を担っているのはアジアからの若者移民である。彼らは「留学」「技能実習」「技術・人文・国際」の在留資格で日本に滞在している。国籍別に見ると、東南アジア、南アジア出身の若者がほとんどを占める。　一方、彼ら/彼女らについての受け入れ国日本の認識は貧しい国からの出稼ぎという側面が強い（ミクロ構造）。しかし、彼ら/彼女らの出身国の経済成長率は7％前後であり、他の国にも移民のルートが確立されている。その意味で彼ら/彼女らは日本を選択して来ている。よって、本発表ではネパール人、ベトナム人などへのインタビューや彼ら/彼女らの本国と日本をつなぐネットワークに注目し、日本への移民がどのようなプロセスで決定されのかというミクロ構造を検証するとともに、留学後の就労や帰国など、日本留学がどのような結果をもたらしたかについて考えたい。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 植民地・戦争の記憶はいかに展示されるか
## ―植民地在住日本人の引揚げをめぐる記憶と表象

名前：　劉罡

所属：　愛知大学

引揚げは、戦後日本の脱植民地化や戦争をめぐる歴史認識を理解する上で重要な歴史事象である。本報告では、植民地などの旧帝国圏在住の日本人の引揚げを主題とする記念館の展示物とそこにおける多様な取り組みに着目することで、戦後日本社会における引揚げの記憶化とその限界を明らかにしたい。具体的には、まず近年日本国内外で進展していった引揚研究を再検討した上で、引揚者の記憶をいかに展示するのかという本報告の問いを明言する。そして、日本全国の引揚記念館をリストアップし、とりわけ舞鶴引揚記念館（舞鶴市）、満蒙開拓平和記念館（長野県）、帰還者たちの記憶ミュージアムを取り上げて展示物や語り部による証言活動を中心に、引揚者の記憶がどのように展示され、語られているのかを比較的に考察する。最後に、引揚記念館の機能を批判的に考えつつ、その可能性を提示する。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 修道院手話の自然言語的な語彙変化
## ― 日本と韓国の修道院における実地調査をもとに ―

名前：　柴田香奈子

所属：　東京大学

本研究では、中世ヨーロッパで生まれた修道院手話が長年の運用の中で自然言語としての側面を持つようになったことを検証する。　修道院手話は、聖ベネディクト（5世紀末~6世紀）戒律に従って生活する修道会の中で、沈黙の規則を守るために作られたコミュニケーション手段である。聾コミュニティの中で自然発生的に生まれた手話言語は自然言語として認識されているが、修道院手話は、第一言語を習得したものが用いる代替手話（secondary sign language）、つまり人工言語と理解されている。しかし、修道院手話は、修道院という閉鎖的なコミュニティの中で長年の運用される中で自然言語的な側面を持つようになった。　本来、修道院手話は、人工言語なので効率的に情報伝達することを目的としているため、語彙は抑制された形で作られている。しかし、本修道会が辿ってきた長い歴史の中で、多くの言語が混じり合い、生活の多くの場面で用いられことで語彙がより修道生活に即した形に変化していることがわかった。本発表では、日本と韓国にある4つの修道院での調査データを対象にして、修道院手話の語彙の運用変化について明らかにしたい。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 難民支援の暗黙知・実践知の言語化
## －緒方貞子の伝記分析からの検討

名前：　伴野崇生

所属：　慶応義塾大学

難民支援における高度な専門性や実践的対応は、多くの場合、理論やマニュアルだけでは説明できない暗黙知や実践知に基づいている。しかし、こうした知識は明示が難しく、後進への継承や現場での共有が課題となっている。本研究では、この課題に対し、元国連難民高等弁務官・緒方貞子の人生を伝記分析(大野2023)の手法で詳細に検討することを通じて、難民支援における暗黙知・実践知を具体的に抽出し、言語化することを試みる。緒方の生涯にわたる活動や回想を整理・分析し、難民支援の現場において意思決定を支える実践的判断力や倫理的感受性、調整能力といった要素を言語化することで、難民支援の実践知の構造について検討する。また、その成果をパターン・ランゲージ(井庭2013)を用いて難民支援の現場に還元可能な知として記述を行う。井庭崇編著(2013)『パターン・ランゲージ－－創造的な未来をつくるための言語』慶応義塾大学出版会大野久編著(2023)『アイデンティティ研究のための伝記分析－－生涯発達の質的心理学』福村出版

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# アジアから日本への若者移民
# ー2010年代以降の留学生に注目して

名前：　渋谷淳一

所属：　法政大学大原社会問題研究所

日本に中長期的に滞在する外国人は約358万人（2024年6月末）であり、日本の総人口の約3％を超え、コロナ禍前の水準を大きく上回った。増加率を見ると2016年以降6％を超える規模である（コロナ禍以降は減少したが、22年6月では7.6％増加）。　この増加を担っているのはアジアからの若者移民である。彼らは「留学」「技能実習」「技術・人文・国際」の在留資格で日本に滞在している。国籍別に見ると、東南アジア、南アジア出身の若者がほとんどを占める。　一方、彼ら/彼女らについての受け入れ国日本の認識は貧しい国からの出稼ぎという側面が強い（ミクロ構造）。しかし、彼ら/彼女らの出身国の経済成長率は7％前後であり、他の国にも移民のルートが確立されている。その意味で彼ら/彼女らは日本を選択して来ている。よって、本発表ではネパール人、ベトナム人などへのインタビューや彼ら/彼女らの本国と日本をつなぐネットワークに注目し、日本への移民がどのようなプロセスで決定されのかというミクロ構造を検証するとともに、留学後の就労や帰国など、日本留学がどのような結果をもたらしたかについて考えたい。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 米軍統治期沖縄の農業開発における植物学者たち
## －1950年代の琉球政府関係者によるネットワーク構築の試みに着目して－

名前：　座間味希呼

所属：　大阪大学

本報告は、米軍統治期の沖縄で、住民側の統治機構であった琉球政府で農業開発による開拓移住政策を担当していた職員と、かれらが戦前から有していた植物学者のネットワークを再活性化させ、政策を立案する過程を検討する。米軍側の統治機構であるUSCARの指示に応じて、琉球政府は1953年末から経済開発計画の作成にとりかかり、この計画のなかで開拓移住部門にも取り組んでいく。計画の農業部門を担当していた経済局農務課の天野鉄夫は、本土の植物学者らに植物標本の提供や手紙でのやりとりを通じて、開拓移住計画への協力を求めていった。本報告では、まず天野の手紙の内容を読み解き、また本土の植物学者らの経歴を調査し、かれらの関係性を再構成する。次に天野の働きかけを、帝国日本のなかで形成されたネットワークが再活性化される過程であると同時に、米軍の圧政から抜け出るための一種の「本土復帰運動」として考察する。資料には、琉球新報や沖縄タイムスなどの沖縄現地の新聞、天野鉄夫のスクラップブック、天野と本土の植物学者らのやりとりを示す手紙を用いる。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 日本のマスメディアにおけるウクライナ避難民の表象
## ―報道写真のビジュアル分析から―

名前：　大茂矢由佳

所属：　埼玉大学

2022年2月のロシア＝ウクライナ戦争以降、日本はウクライナ避難民を積極的に受入れてきた。2025年4月末現在、1966人が日本に居住しており、出国者も含めるとこれまでに2777人を受入れている。難民に冷たいと言われてきた日本で、大きな社会的混乱や反発もなく数千人規模の受入れが実現したのは画期的である。背景にはウクライナ避難民への同情的な世論の存在が指摘されている。本研究ではこの世論形成に一定の効果を与えたと考えられるメディア報道に注目し、新聞に掲載されたウクライナ避難民の写真の分析を行う。分析期間は戦争勃発の翌日から2ヶ月間、分析対象は発行部数最多の読売新聞と朝日新聞とした。分析の結果、朝日新聞では「ウクライナAND避難民」というキーワードを含む写真・図表付きの記事は185件あり、うち避難民の写真付きの記事は48件であった。読売新聞では108件であった。最初期の報道写真は、表情に乏しい子どもが映し出されるなど「かわいそうな難民」としての表象が目立ったが、4月以降は避難先国で新生活を開始した避難民の写真が増え、「生き抜こうとする主体」（佐々木200）としての表象へと変化していた。

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 東アジア情勢と南太平洋ー20世紀前半の仏領ニューカレドニアにおける対日政策のトランスインペリアルな変化ー

名前：　友寄元樹

所属：　同志社大学大学院

本研究は、19世紀末から20世紀前半における東アジア情勢の変化が太平洋の島嶼地域に及ぼした政治的影響の解明が目的である。帝国史や植民地主義の研究において、注目されてこなかったニューカレドニアへの日本人移民史をトランスインペリアル・ヒストリーの視座から考察し、当地おける対日政策の変化を取り上げる。　これまでニューカレドニアにおける日本人移民史は日本側の文献によって書かれたものが主だった。現地資料を用いた研究も見られたがそれまでの研究を補完するものであった。これらは、第二次世界大戦後、現地でタブーであった日本人の歴史を明らかにした点で重要な研究である。一方で、歴史叙述を重要視しているため、世界情勢や日本の対外政策としての移民送り出しという政治的視点が不十分である。　本研究では、トランスインペリアルな世界状況からこの歴史を再検討し、フランス政府とニューカレドニア当局はもちろん隣国のオーストラリア当局の主張も取り上げ対日本人政策を明らかにする。そうすることで帝国政府の思惑と現地当局の実情がより鮮明に浮かび上がる。日本人移民がいかなる存在として見られていたのか、現地の資料を用いて解明していく

[個人発表]

④ 東アジアにおける人とモノの移動と変化

# 近代日本におけるペスト流行と職工教育の拡がり
## ー金巾製織会社の事例を通してー

名前：　亀井大樹

所属：　流通科学大学

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界各国で猛威を振るったのは記憶に新しい。グローバル化の進展により、人とモノが国境を越えて移動する一方で、感染症の拡大は現地の労働者に深刻な影響を及ぼすことは過去の歴史にみても明らかである。本報告は感染症拡大が企業の労務政策に与えた影響を歴史的に明らかにするものである。周知のように明治期の日本では紡績業が工業化の先駆けとなった。金巾製織会社（以下、金巾製織と略す）は近江商人系の資産家らによって1888年に創業し、翌89年に大阪で営業を開始した兼営織布企業であった。同社は中糸生産と綿布輸出に強みをもち、特に粗布を朝鮮半島に輸出していた。しかし1899年から1900年にかけて発生した第一次ペスト流行により同社は感染源とみなされ、操業停止や職工離脱といった深刻な打撃を受けたのであった。金巾製織は近代日本において大規模感染症に直面した初の近代企業であったといえる。こうした状況に対して、金巾製織は工手の母新聞社と連携し、幻灯を用いる職工教育を導入した。同社の職工教育は衛生観念の普及と風紀の改善を目的とし、結果として職工の人員回復に貢献した。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 戦後初期『思想の科学』における「コミュニケーション」の概念分析

名前：　宮崎悠二

所属：　京都文教大学

本発表は、戦後日本において「コミュニケーション」という言葉をいち早く紹介した『思想の科学』誌上における「コミュニケーション」という言葉の用例を概念分析の観点から分析し、どのようにこの言葉が理解可能なものとしてテクスト上で組織化され、またこの言葉の使用によってどのような実践が可能になっているかを明らかにするものである。　「コミュニケーション」という言葉は、科学的言語としての出自を持ちつつも意味内容を自在に変化させながら政治的な力を発揮するような「プラスチックワード」の代表例であるとされている。本発表では、日本におけるその導入最初期において、とりわけ人文学の研究上の用語としてどのように「コミュニケーション」が理解可能なものとしてテクストで用いられ始めたのかを分析し、その科学的言語としてのあり方を整理するとともに、「コミュニケーション」概念の前身であるとされる戦前における「交通」概念との異同について示唆される点があるかを考察する。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# AI支援による聴解過程の可視化と言語習得：アイディアユニットの重要度評価を通した日本語学習者の聴解ストラテジー再構築

名前：　王睿琪

所属：　東京外国語大学

本研究は、人工知能技術を活用した聴解過程の可視化が日本語学習者の聴解力向上に与える効果を検証した実証研究である。従来の聴解評価は選択式や穴埋め問題など聴解結果のみを評価対象としており、理解過程を分析するプロトコル分析は時間と労力を要するため教育現場での実用が困難であった。本研究では、AI技術を用いて学習者の筆記再生を自動的に評価し、アイディアユニットの重要度に基づいた理解過程を即時に可視化するシステムを開発した。漢字圏・非漢字圏学習者を対象に、三つの同難度の聴解教材を用いた実験を実施し、学習者が母語で再生した内容をAIが分析することで多言語対応を実現した。分析の結果、(1)可視化された理解過程の提示により学習者のメタ認知的内省が促進され、(2)聴解ストラテジーの再構築が生じ、(3)二回目以降の聴解テストで統計的に有意な成績向上が確認された。本研究の独創性は、AIによる即時フィードバックと理解過程の可視化を組み合わせることで、従来不可能であった聴解プロセスのリアルタイム分析を教育現場に導入可能にした点にある。これにより、学習者特性に応じた聴解指導の個別最適化への道が開かれた。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 中国語を母語とする日本語学習者における機能動詞結合の産出に関する一考察 ―文法的意味の観点から―

名前：　林燕燕

所属：　東京外国語大学

本研究は、村木（1991）の定義に基づき、「連絡をとる」「期待をかける」などの漢語動作名詞＋和語動詞による「機能動詞結合」に着目し、中国語を母語とする日本語学習者（CJL）がその文法的意味（ヴォイス・アスペクト・ムード）をどのように習得しているかを明らかにすることを目的とする。80名のCJLを対象に、空所補充形式の産出テストを実施し、機能動詞結合の正用状況と対応する漢語サ変動詞の使用傾向を比較した。その結果、CJLの機能動詞結合の正用率は全体的に低く、特にムード的意味において顕著であった。一方、漢語サ変動詞の方がより高い正用率を示した。これらの結果から、意味や用法が明確な漢語サ変動詞が優先的に習得されており、ムード的意味を含む機能動詞結合は母語転移が起こりにくいため習得が困難であることが示唆された。また、習熟度が高い学習者ほど機能動詞結合の正用率も高くなる傾向が見られ、習熟度の向上が機能動詞結合の習得に寄与していることが確認された。

[個人発表]

⑥ 東アジアにおける日本語研究関連問題

# 日本語学習者の生成AI使用実態に関する意識調査：外国語学習者との比較に基づく特徴分析

名前：　CHEN SHAOSHEN

所属：　東京外国語大学

近年、生成AIの発展とともに、その教育利用に関する議論が盛んになっているが、日本語教育において学習者の視点から使用実態の把握が依然として不十分である。本発表では、生成AIの使用に関する学習者の態度・動機・評価などの使用意識に焦点を当て、100名の中国人日本語学習者を対象としたアンケート調査の結果を報告する。本調査は2024年4月に実施され、学習者の使用傾向および主観的評価に関わる項目について、記述統計による量的分析と自由記述に対するテーマ的質的分析を行った。その結果、日本語学習者は生成AIを翻訳や情報検索に加え、作文補助や対話相手、感情発散など多様な目的で使用しており、利便性や実用性への評価が高かった。また、堀（2024）による第二外国語学習者を対象とした調査結果との比較を通じて、外国語学習者間に共通する傾向および日本語教育に特有の要因を明らかにした。以上の分析を通じて、多くの外国語学習者が日常的にAIを学習に取り入れており，学習ストラテジーの一要素として位置づけている実態が明らかとなった。本調査の結果から、学習者視点から生成AIの教育的導入を再考する必要性と課題を提起する。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 近代日本における皇后の軍事的役割
## ：貞明皇后と戦艦「陸奥」進水式を例に

名前：　頼宇韓

所属：　名古屋大学

本発表は、近代日本における天皇制とジェンダー秩序の交差点において、皇后が果たした軍事的役割を、貞明皇后（大正天皇后）と軍艦進水式の事例から再検討するものである。性別役割分業意識が強かった近代日本において、女性は公的な場から遠ざけられるべき存在とされていたが、皇后は軍事儀式の参加、軍事施設の視察などの軍事儀礼を通じて、軍事的役割の一端を担って例外的な存在であった。本発表では、特に一九二〇年の戦艦「陸奥」進水式における貞明皇后の出席に注目したい。進水式は、海軍にとって重要な軍事宣伝・広報の場であり、大正天皇の病気と世界的な軍縮という風潮の情勢下、貞明皇后が単独でそれを主宰した事実は、性別役割を越えるものにほかならなかった。それはどのような慣行的・現実的文脈で成立し、いかなる軍事的・象徴的意味を帯びたのか。本発表では、皇后を軍事化・国民動員のアクターと捉え、関係部局の思惑や皇后自身の姿勢、社会的反響を含め、宮中と軍の公文書およびマスメディアにおける関連記事などの一次史料を用いて検討することで、近代天皇制の統治実態とジェンダー秩序の揺らぎを明らかにする。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 「勇敢な女性国民」の視覚表象 :1946年－1975年におけるベトナムの 戦争ポスターに描かれた女性像

名前：　張雅

所属：　大阪大学

本発表では、1946年から1975年にかけての約30年間、第一次インドシナ戦争（1946－1954）、国土統一の闘争（1955－1965）、およびベトナム戦争（1954－1975）の三つの戦争期において、前線で戦った女性たちが宣伝ポスター上でどのように表象されてきたのかを考察する。　戦時下という非常時において、女性たちは従来の家庭内の役割にとどまらず、男性の領域とされてきた前線での戦闘や後方支援にも従事するようになった。彼女たちは正式な兵士ではなかったものの、遊撃戦においては兵士同様に敵軍と戦った。戦後、そうした女性たちの貢献は、彼女たちを英雄的な国民として称揚するきっかけとなり、さらにはアメリカ軍に勝利した共産主義の象徴ともなった。　本発表では、まず戦争時における女性の役割を整理・分析し、その上で宣伝ポスターに描かれた「勇敢な国民女性」のイメージを検討する。最終的に、これらの女性像の視覚的表現が社会に与えた影響と、その政治的意図について明らかにすることを目的とする。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 交差するマイノリティ経験とアイデンティティの構築：性的マイノリティと人種的マイノリティの交点から

名前：　荒木生

所属：　成城大学大学院文学研究科博士後期課程

2000年代以降、性的マイノリティ当事者の間で、自身のアイデンティティを示す「名乗り」や「名付け」の細分化と複数化が進んでいる。本発表では、「性愛」「恋愛」「友愛」など多様な感情・関係性を基盤とする新たな「名乗り」実践が、近代社会の規範的な恋愛観（アマトノーマティビティ）への批判として浮上していることを明らかにする。また、長期のインタビュー調査により、性的マイノリティであると同時に、人種・民族的マイノリティでもあるダブルマイノリティ当事者が直面する困難や生活実践が明らかとなった。発表者は、こうした交差する抑圧の実態から、ジェンダー・セクシュアリティ研究をインターセクショナリティ（交差性）の視点から再構築する必要性を強く感じた。従来の「性」の理解を超え、当事者の語りと感覚に基づき複雑なアイデンティティの構造を記述・分析することで、ジェンダー・セクシュアリティ研究の拡張の可能性について検討する。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 近代日本の経血処置用品の製造と販売
# ：無知学からの考察

名前：　孫詩彧

所属：　国際日本文化研究センター

本報告は、日本における経血処置用品の開発・製造・販売の社会史を対象に、その技術と国際流通の展開を検討し、無知学（アグノトロジー）とジェンダーの観点から考察を行うものである。明治期以降、日本では衛生思想や西洋文明の影響のもと、「穢れ」とされた月経は「不潔」と再定義され、ゴム製の月経帯が商品化された。さらに1960年代には、使い捨てナプキンが「アンネ」の名で広まり、月経処置の手段が大きく変化した。これらの製品開発、ならびに製造販売は、当時のフェムテックによるイノベーションであることとして捉えなおしたうえ、こうした技術革新が女性の身体経験や社会的役割にどのような影響を与えたか、またそれに関する知識や評価がどのように構築・抑制されたかを、無知の構造として捉え直す。経血処置用品の開発史を、生活技術史・ジェンダー史・工業史を横断する視座から再定位することにより、これまで不可視化されてきた女性の身体と経験を歴史の中に再配置することを目指す。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 近代日本における洋風化粧の普及とジェンダー規範の交錯ー改良される「モダン・ガール」と改良されない「モダン・ボーイ」を手がかりにー

名前：　楊雅韻

所属：　京都大学

本研究は、1920年代半ばの日本においてモダン・ガールとモダン・ボーイをめぐる言説および外見イメージに着目し、洋風化粧品の販路拡大を図る化粧品業界が、当時のジェンダー規範とこれらの表象をいかに結び付け、活用または回避していたかを明らかにする。モダン・ガールは当初、近代性の象徴として肯定的に受容されたものの、やがて奢侈や享楽の象徴とみなされ、批判を浴びた。他方、外見と内面の調和が求められる文脈の中で「清楚」や「明朗」といった日本的個性を体現する「良きモダン・ガール」像が成立し、化粧品業界は販促戦略としてこれを積極的に活用したが、限界があった。対照的に、モダン・ボーイは軽薄さや風紀の乱れの象徴とされ、「男性性の欠如」を理由に厳しく非難されたため、そのイメージは化粧品販促において受容されにくいと認識されていた。すなわち、モダン・ガールのイメージはジェンダー規範に抵触しない限り商業的資源となり得たのに対し、モダン・ボーイは規範そのものを脅かすものとして忌避された。本研究は、同じ「モダン」という文化記号を共有しながらも、両者のジェンダー的非対称性が化粧文化の受容過程にもたらした影響を解明した。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 優生学的モダニティの残響
## ―台湾『優生保健法』の法制史とその現在―

名前：　曲虹霖

所属：　立命館大学大学院

本発表は、台湾で現行法である『優生保健法』を、参照元である日本の旧『優生保護法』との比較法的視点から検討する。目的は、優生思想が統治技術としていかに変容し、現代のリプロダクティブ・ジャスティスに構造的制約を与えているかを多角的に論じることにある。　台湾法は「人口の質の向上」を掲げつつ、強制手術を医師による「勧告」に留め、福祉的言説を導入するなど「ソフト・ガバナンス」へと転換した。しかし、この非強制的枠組みは、専門家と当事者の権力非対称性のもとで誘導的な選択を生み出しうる。本法は、フェミニズムからは女性の自己決定権侵害、障害学からは差別助長として批判されてきた。さらに生殖補助医療の普及は、個人の選択の名の下で生命を選別する「新しい優生学」の土壌となり、「支援と排除」が並存するパラドックスを生んでいる。　本発表は、こうした分析を通じて、問題の本質が法技術ではなく、生命を選別する思考そのものにあることを指摘する。この思考は、他者と共生する倫理基盤を掘り崩し、リプロダクティブ・ジャスティスの確立を構造的に阻害していると結論づける。

[個人発表]

⑦ 東アジアの社会とジェンダー

# 生理用品無償提供政策の行政実践
## ー韓国と日本に着目して

名前： QI XIAOHANG SUN SHIYU

所属： 北海道大学 国際日本文化研究センター

本報告は、月経貧困の解消とジェンダー公正の実現を目的として進展する生理用品無償提供政策について、韓国と日本の制度設計・地方自治体による実装過程を検討するものである。政策文書の分析と自治体事例（ソウル・京畿道を中心とする韓国主要自治体、日本各地の自治体）の整理により、韓国が『青少年福祉支援法』を根拠とする〈中央財政—自治体推進—学校配布〉の三層モデルを確立しているのに対し、日本では中央政府レベルの制度化が遅れる一方、地方自治体と民間企業の連携による多元的ネットワーク型の供給体制が形成されつつあることを示す。さらに、制度的安定性と利用者の可及性の両面から実践成果を整理し、両国に共通する課題として①財源の持続可能性、②受給者のプライバシー確保、③利用率向上に向けた啓発不足の三点を抽出した上で、法制度の整備とプライバシー配慮型配布技術の導入、クロスセクター連携強化を柱とする政策改善方策を提言する。韓国と日本の文化的背景に基づいて行政実践を検討することは、さらにジェンダー平等な社会構築を考える材料になる。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動

# 開発・連帯・脱植民地化
## ―鶴見良行の東南アジア言説にみる知の実践―

名前：　劉韻

所属：　早稲田大学

1970年代以降、東南アジアで反日運動が勃発するとともに、「アジアの連帯」を掲げる各国の民主化運動は展開されていた。その背景には、平和と変革を目指す国際連携運動に携わる日本の知識人たちの存在があり、鶴見良行はその代表的な人物であった。彼らはアジアの人々との協力や交流の可能性を模索していたのである。また、同時期において日本企業の東南アジアへの進出や、ODAをはじめとする対外経済支援、さらに各種NGOの活動が注目され、南北問題や戦後賠償問題なども脱植民地化の課題として論じられるようになった。「知米派」知識人であり、ベ平連の世話人として活動し、学問と運動の両面に携わった鶴見良行は、東南アジアの現地に立脚しながら、市民社会の可能性を問い続けた。その民衆的視点は、いかなる経緯で形づくられたのか。また、それは日本の東南アジア研究においてどのような役割を果たし、どのような知的成果をもたらしたのか。本研究では、こうした問題意識に基づき、鶴見良行の思想と実践の展開を明らかにする。同時に、このような文脈において「学際的知識人」としての彼の特異性を、学問と運動という二つの領域の交差点において考察する。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# インターセクショナルなアクティヴィズム：台湾における障害のある性的少数者の運動参加を事例に

名前：　欧陽珊珊

所属：　立命館大学

本稿は、台湾における「障害のある性的少数者（身障同志）」の社会運動参加を事例に、インターセクショナルなアクティヴィズムの意義と実践的可能性を検討する。性的マイノリティ運動と障害者運動はいずれも社会的排除への異議申し立てとして展開されてきたが、両者の交差点に着目した研究は限られてきた。本研究ではインタビューと現地でのフィールド観察を通じて、身障同志が両運動を横断しながら実践してきた取り組みを明らかにする。具体的には、台北プライドにおける「残酷児」による運動への参加、交通バリアに抗議する「万障運動」、障害者の性の権利を訴えるデモなど活動を分析対象とした。こうした実践は、異性愛規範と能力主義という複合的な抑圧に挑戦しつつ、身障同志自身が新たな政治的空間を創出する行為である。特に、性的マイノリティ運動で得た「可視化」戦略や運動ノウハウを障害者運動に応用するプロセスは、運動間の相互変容を促す実践である。本稿は、身障同志の交差的実践が、単なるアイデンティティの統合ではなく、既存の社会運動の枠組みを再構成する可能性を提示する。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 戦前期大阪市の障害児教育にみる日本の教育思想―「救済」と「差別」

名前：　磯崎加奈予

所属：　国際日本文化研究センター

本研究は、戦前期大阪市における障害児教育の実践とその背景を検討し、日本の教育思想における「救済」と「差別」という、一見矛盾する要素の併存に光を当てるものである。具体的には、1940（昭和15）年に設立された思斉学校の初代校長・田村肇の教育実践および関連史料を手がかりに、教育による社会的包摂と、同時に進行した優生思想に基づく排除（断種等）の論理がいかに共存していたのかを分析する。田村は、当時教育から排除されていた精神薄弱児等の障害児教育実施のため、法整備や特殊小学校設置に奔走していたことが史料から確認できる。一方で、思斉学校の史料には優生思想と接続する記述も認められる。本研究では、これらの史料を通して、戦前期日本における障害児教育思想に見られる包摂と排除の構造を明らかにする。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# Civic Movements and Environmental Governance in Machida City, Japan (町田市における市民運動と環境ガバナンス)

名前： Ariadne Jourdan Fayão

所属： 東京外国語大学

1970年代初頭から、日本の草の根市民団体は、地方自治体の環境保全政策に対抗する形で、環境再生に対する主体性を取り戻してきた。本発表では、伝統農法を活用した環境保全と管理プロジェクトに対する日本の地方自治体の影響を考察する。対象とするのは、東京都町田市における町田歴環管理組合および奈良ばい谷戸の「まちだ結の里」である。これらの草の根市民団体は、それぞれ東京都および町田市の管轄下にあるが、伝統農法に関する勉強会などを通じて地域住民の主体的な関与とも結びついている。本研究は、日本の地方自治体および環境省の資料、1970年代初頭の環境法令と政令、ならびに両団体への近年のインタビュー記録を基に構成される。町田市の事例は、市民運動が単に政府に抵抗するだけでなく、独自の保全枠組みを生み出し、現在もなお継続しているという、市民と行政の交渉モデルの一例である。本発表は、国家と市民社会の関係性に注目することで、日本の環境運動における地域主導型ガバナンスの役割についての議論に貢献することを目指すものである。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 昭和初期日本国内における宗教統制と反統制の闘争

名前：　ZHAO WENWEN

所属：　南開大学

1926年の昭和天皇即位から日中戦争勃発に至るまでの期間、日本国内における宗教統制は次第に加速・強化された。このような動向に対し、宗教界や左翼知識人をはじめとする多様な立場からの抵抗運動が生じた。これらの抵抗は、その背景や思想的立場によって形態・内容に大きな違いがあり、当局もそれぞれに異なる対応・弾圧手段を講じていた。しかし、日中戦争の開戦を契機に、国内の思想統制は一層進行し、こうした抵抗的な思想や運動は最終的にすべて抑圧されることとなった。昭和初期における宗教統制の展開を通観すると、日本政府は、宗教団体内部および外部からの「反宗教法案」や「反宗教運動」などの抵抗に対する弾圧を通じて、宗教統制政策とその制度的枠組みを段階的に調整・強化していったことが明らかである。そして最終的には、宗教勢力が「総力戦」体制下における思想統制の一翼を担う構造が形成されたのである。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 戦時体制と動物愛護
## ―広井辰太郎の言論活動を手がかりに

名前：　横山佳代

所属：　北京大学

本報告は、近代日本の動物愛護運動の先駆者・広井辰太郎に着目し、戦時日本における動物愛護思想の変容について再検討するものである。従来の研究では、明治期より続いた近代日本の動物愛護運動は、戦時において「衰退した」と認識されてきた。しかし広井が1939年に創刊した動物愛護会の会報『動物愛護』における活発な言論は、この見方に再考を促す材料となる。とりわけ注目すべきは、広井や動物愛護会のメンバーが、政府主導の軍用動物の表彰や慰霊活動によって国家規模で軍用動物への注目が高まった時局に積極的に呼応し、「動物愛護」の理念を国策に沿う形で再構築しようとした点である。本報告は、戦時において動物愛護思想が単に衰退したのではなく、むしろ戦時体制に迎合する形でその性質が大きく変容したと指摘する。本報告は、戦時体制下において「動物愛護」観念がどのように変容したかという歴史的文脈を明らかにすることを通して、近代における人間と動物の関係性、ならびにそれを取り巻く思想状況を多角的に捉えなおすことを目的とする。これにより「動物愛護」という今日の東アジアにおいても今なお論争的な主題について、さらなる歴史的前提を提供したい。

[個人発表]

⑧ 東アジアにおける社会運動]

# 新島闘争における保育園づくり：その思想史的背景

名前：　小美濃彰

所属：　東京外国語大学国際日本研究センター

伊豆諸島に属する新島は、1957年10月に防衛庁がミサイル試射場の設置計画を新島村長に申し入れたことをきっかけに、日米安保体制の強化に抵抗する反基地闘争の焦点となった。この場所で1961年から1963年にかけて2年あまりの期間に、ひとつの保育園づくりが行なわれていた。この活動の主な担い手は、東京都調布市の多摩川沿いの土地に拠点をおいた一粒会（いちりゅうかい）というバタヤの協働組合とSCI Japan（Service Civil International Japan）という国際ボランティア団体であった。 前者は高度経済成長期の下層社会から生まれ出たバタヤの組合、後者は世界各地でワークキャンプを実践する国際平和運動団体の日本支部である。まったく異なる出自をもつ両者の関係を明らかにするには、のちに仏教経済学の提言者として知られる井上信一らの「歎異抄研究会」や、東亜連盟の系譜にあり1949年に起こされたとされる「民族新生運動」にも言及する必要がある。本報告では、これらの思想や運動が新島での保育園づくりという実践にどのように結実し、戦後日本社会でどのような位置づけにあったのかを検討したい。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 「無私」の日本とアジア―坪内逍遥から西村真次へ

名前：　嶋津麻穂

所属：　立命館大学大学院

本報告は、文学者として知られる坪内逍遥と、その門下生で歴史学者の西村真次の思想的系譜を、歴史をめぐる近代日本思想史の一断章として考察するものである。先行研究では、両者の師弟関係は周知されているものの、その思想的な影響関係は十分に検討されていない。そのため思想史研究では、逍遥も西村も単なる参照軸に留まっており、その思想的系譜が近代史に位置付けられているとは言い難い状況である。そこで本報告は、逍遥から西村への影響を明らかにしつつ、近代文学成立のメルクマールとされる逍遥の「小説神髄」でのコスモポリタニズムがどのように展開し、何故、逍遥を「思想の父」と慕う西村に至って大東亜共栄圏への協力に向かわせたのかを論じる。逍遥の文学論や倫理教育に顕著な「没主観」や「自我本位」の否定は、明治20年代後半から頻出するようになり、同時期には歌舞伎研究を通した国民性論も並行して展開した。さらに第一次世界大戦の影響を受け、それぞれの問題意識は『国民の日本史』という通史監修に反映された。その後、これらは西村によって統合され、早稲田大学の学風を確立しつつ、「八紘一宇」や「八紘為宇」へも合流することになったのである。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 戦後日本における美術批評
# ：プリミティヴィズムとジェンダーの視点から

名前：　篠原華子

所属：　神戸大学

本研究では、美術批評家の日向あき子（1930―2002）の1950年代から60年代の美術批評から、日本の美術におけるプリミティヴィズムとジェンダーの諸相を浮き彫りにすることを目指す。プリミティヴィズムとは、西洋的な進歩史観を背景として、表現の主体から見て「プリミティヴ」である他者を表象する芸術概念である。欧米のアートワールドでは、1930年代からプリミティヴィズムの重要性が指摘されてきたが、日本においては戦後に岡本太郎（1911－1996）や滝口修造（1903－1979）の論考や美術館での展覧会を通して理解が進められた。日向は1960年代にプリミティヴィズムに関する論考を多く発表し、西洋的なプリミティヴィズムの乗り越えを目指していた様子がうかがえる。日向のプリミティヴィズム論の独自性を明らかにするとともに、女性の美術家や批評家にとって困難が多い時代において、プリミティヴィズムを論じることと美術界におけるジェンダー問題とどのように関係し得たのか考察する。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 視覚的な「美」と言葉遊びの混淆
## ―江戸文学における「洒落」を事例として―

名前：　橋本凛

所属：　大阪経済法科大学

「すい」「通」「いき」は江戸文学、とりわけ遊里文学における重要な美意識、あるいは美的理念として位置付けられ、論じられてきた。それら三概念を通時的な展開の中に位置付けようとする研究者が少なくない一方、中村(1958)では、「通」は美的要素を持たず、知識偏重型の概念であったと述べられており、そこに「通」と「いき」の断絶を見る。本発表では、「通」の一要素とも評される「しゃれ」概念について論じ、その断絶を解消する足掛かりのひとつとする。　具体的には、「しゃれ」は主に言葉遊びのうまさ、あるいは身なりを肯定的に評価する用法で用いられるが、現代人の感覚からすれば、「言葉遊び」と「おしゃれな身なり」の間に隔絶を感じるであろう。しかし、江戸人にとって「言葉遊び」と「視覚的な美」はそれほど遠い存在ではなかった。このように、「通」の一部をなす「しゃれ」に美的要素があったとするならば、概念間に横たわる断絶は解消される。本発表においては、歌舞伎役者である七代目市川団十郎も好んだ、「言葉遊び」をファッションに落とし込み、町人間で大流行した「判じ絵」について考察を加え、江戸の美的理念史を再考する一助とする。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# サラリーマンにおける貯金の様相
## ―1910年代～1930年代のビジネス書から―

名前：　楊子涵

所属：　大阪大学

サラリーマンの歴史は1910年代に生まれた毎月給料をもらう月給取りから始まる。彼らは1920年代になって「サラリーマン」と呼ばれ始め、学歴エリートとして人文社会的な教養を求めていたが、時代が進むことで大衆化し、即物的な知識の追求に傾倒していったことが指摘されている。他方で、ビジネス書とは、簡潔に言えば、サラリーマンの仕事のために書かれた／読まれた本と言えるが、これを見ていくと、1910年代に出版されたものでも即物的なものが多い。これを見ていると、サラリーマンが戦後になって即物的な知を求めたという従来の理解は再検討されるべきではないかと思われる。その中で、本発表で注目したいのは、様々なビジネス書において貯金が注目されていることである。当時のサラリーマンが困窮していたというのは有名な話であるが、だからこそサラリーマンには金策が必要だとして、その方法の一つが貯金なのだということがビジネス書で叫ばれていたのである。それでは、サラリーマンにとっての貯金とはどのようなものであったのか。本発表では1910年代～1930年代のビジネス書において、サラリーマンがどのように貯金すべきだと論じられてい

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 第二次『新思潮』と谷崎潤一郎
## ―処女作神話「刺青」の誕生まで

名前：　林青

所属：　東京外国語大学

『新思潮』は、一九〇七年十月から一九七九年まで、十九回にわたり創刊と廃刊が反復された雑誌である。谷崎潤一郎は、一九一〇年九月創刊された第二次『新思潮』を通じて作家生涯を始めた。第二次『新思潮』は第七号で終刊となるが、谷崎はこの雑誌に小説や評論など計八篇を発表している。　『新思潮』については、第三次・第四次いわゆる新思潮派を中心とした議論が多く見られる。しかし、谷崎が広く知られる以前、特に第二次『新思潮』との関わりについては十分検討されていないのが現状である。　本論では第二次『新思潮』を中心に、谷崎と『新思潮』の出会い、そして谷崎が文筆活動を始めた当初に直面した困難について論じる。また、「刺青」をめぐる〈処女作神話〉の形成過程や、谷崎が一人前の作家として成長していく軌跡を追う。さらに、谷崎が第二次『新思潮』を通じて、どのように文壇デビューの機会を模索したのかを明らかにする。そこから、『新思潮』時代から谷崎がいかに巧みに掲載媒体を活用していたかを浮き彫りにしたい。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 現代の民間宗教組織における星の儀礼
## －御嶽講における新規祭祀の成立を事例として－

名前：　竹内麻耶華

所属：　名古屋大学

日本の長野県と岐阜県の県境をまたぐ木曾御嶽山は、いまなお霊山として信仰が続く山である。木曾御嶽山を霊山として崇拝し、登拝・参詣する組織団体を御嶽講と呼ぶ。本発表では、現代の民間宗教組織（御嶽講）で行われている「星の儀礼」の事例を取り上げ、現代の民間宗教組織に属する人々の、星に対する宗教的意識の受容について考察する。今日、星の儀礼は、御嶽講のほかに天台宗や日蓮宗においても執り行われている。これらは共通して星や星の神（北辰妙見菩薩）に善星皆来・悪星退散を祈るものである。一方で、御嶽講と天台宗・日蓮宗で大きく異なるものがあると推測する。それは、従来から存在する勤行や祭礼・儀礼を現代においても発展させるために、主管者の行者のみならず信者も、儀礼の変容を受け入れる意識が大きいことである。本発表では、愛知県における2つの御嶽講で実践されている星の儀礼に注目する。主管者の行者2名を中心に聞き取り調査を行い「新規祭祀」として変容する儀礼を分析し、現代において星の信仰がどのように受容されているのかを明らかにする。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 日本における「反抗期」言説の誕生

名前：　茶円直人

所属：　吉林大学

子どもの成長段階を表す用語として、第一反抗期と第二反抗期という言葉がある。それぞれ就学前の2歳前後の時期と、いわゆる思春期と呼ばれる15歳前後の時期に当たり、日本のインターネットや巷間においては、しばしば「反抗期がない子どもは抑圧され、ストレスを抱えている」と言われる。他方で、「反抗期」という用語は心理学におけるジャーゴンとして現在も議論されているが、近年では反抗期を必然ではないとする「青年期平穏説」と必然とする「青年期危機説」に議論が分かれている。さらに、諸外国に目を向けると日本のように「反抗期」として子どもの反抗を（過剰なほど）肯定的に捉えることはさほどないようである。筆者の職場である中国でも「叛逆期」という言葉はあるが、これは思春期の一現象で、子どもの成長において必要だとはあまり言われない。以上を踏まえて、本研究は、日本における「反抗期」をめぐる言説を民俗知として捉え、その形成過程を明らかにしようとするものである。さしあたり、本発表では「反抗期」という用語が生まれた1921年から1950年における「反抗期」言説がどのようなものであったかを明らかにしていく。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 親子の食事における援助行為の相互行為分析

名前： 乾友紀

所属： 大阪大学

家庭内における食事は、子どもが成長するために欠かすことのできない活動であるのみならず、親子間のコミュニケーションとしても機能している。養育者は、子どもが滞りなく食事ができるよう援助を提供する（スプーンを口に運ぶ、小さく切って渡すなど）と同時に、子どもと会話をすることで親子の交流の機会とし、さらに、養育者自身も食事をする。このようなマルチアクティビティの中でいかにして養育者は援助を行い、また、子どもは援助を求める・受けるのかを明らかにすることが本発表の目的である。本発表で扱うデータは、家庭内の相互行為データ及び食事における援助行為を抽出した上で作成したトランスクリプトである。収集したデータについて、言語行動及び非言語行動をマルチモーダルに分析する。 事例の分析から、養育者は食事をしている間、子どもの食事の状況(器の中身や手の動き)に視線を向け、困難のある状況に際して援助行為を行っていることが観察された。また、子どもは、養育者に対して援助を求めるだけではなく、養育者からの援助を受け入れずに自身で解決することを示すことも見られ、援助行為が相互行為的になされていることが明らかとなった。

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# サラリーマンにおける貯金の様相
## ―1910年代～1930年代のビジネス書から―

名前：　楊子涵

所属：　大阪大学

サラリーマンの歴史は1910年代に生まれた毎月給料をもらう月給取りから始まる。彼らは1920年代になって「サラリーマン」と呼ばれ始め、学歴エリートとして人文社会的な教養を求めていたが、時代が進むことで大衆化し、即物的な知識の追求に傾倒していったことが指摘されている。他方で、ビジネス書とは、簡潔に言えば、サラリーマンの仕事のために書かれた／読まれた本と言えるが、これを見ていくと、1910年代に出版されたものでも即物的なものが多い。これを見ていると、サラリーマンが戦後になって即物的な知を求めたという従来の理解は再検討されるべきではないかと思われる。その中で、本発表で注目したいのは、様々なビジネス書において貯金が注目されていることである。当時のサラリーマンが困窮していたというのは有名な話であるが、だからこそサラリーマンには金策が必要だとして、その方法の一つが貯金なのだということがビジネス書で叫ばれていたのである。それでは、サラリーマンにとっての貯金とはどのようなものであったのか。本発表では1910年代～1930年代のビジネス書において、サラリーマンがどのように貯金すべきだと論じられてい

[個人発表]

⑨ 日本研究と文化表現

# 演劇検閲の輸出と変容
## ―近代日本・台湾・朝鮮における演劇統制の比較研究

名前：　藤井なつみ

所属：　早稲田大学

本報告は、近代日本及びその植民地である台湾・朝鮮における演劇検閲制度を比較検討することで、宗主国日本がどのように検閲制度を植民地に「輸出」し、それが各地域においてどのように制度化・運用され、また現地の社会的・文化的文脈の中でどのように変容していったのかを明らかにすることを目的とする。演劇は公共性の高い表現文化であり、近代日本においてその検閲は複製可能なメディアへの検閲とは大きく異なる制度によって行われていた。そして、各地域におけるそれぞれの文化の在り方に適応させるため、その検閲方法は地域によって制度的にも大きく異なることとなった。これまで各地域の演劇検閲は個別に研究されてきたが、本研究はこれらを統合的に捉え、制度の共通点や相違点を明らかにし、宗主国と植民地の間で展開された相互的な影響関係を浮かび上がらせることを試みる。特に、検閲制度の「移植」としての側面のみならず、現地における検閲実務の具体的展開や、植民地社会の文化的・政治的状況に応じた調整・再構成の過程にも注目する。こうした比較分析を通じて、近代日本の文化統治政策の実態と、東アジアにおける植民地的権力構造の複雑性を多角的に検証する。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 伏せ字という想像力
## ―中野重治「小説の書けぬ小説家」における闘争

名前：　宮喬瑞

所属：　東京外国語大学大学院

1894年に内務省警保局図書課が検閲の業務を請け負った時以来、近代日本文学は否応なくすでに「言論統制」の文脈の下での産物に他ならない。その後、内務省による検閲は敗戦にともなって解体されたが、GHQ／SCAPによる検閲は1949年まで続けていた。その上、同時代のプロレタリ文学者が直面した弾圧が「転向」という形で結末を迎えた。「転向声明」によって、自分の立場が逆転したと宣言した場合、そのプロレタリ文学者にとって最も争うべきイデオロギーというポストを手放した場合、闘争はまた如何なる形でまた如何なるレベルで、展開され得るだろうか。「小説の書けぬ小説家」において、中野重治はプロレタリア文学とは「文」をもって階級闘争を行うものだという本質を掬い上げ、プロ文学が作品のあらゆるレベル・ポストで「闘争」を展開すべきものだと方向性を示そうとした。具体的に、「転向声明」発表後「内容」レベルにおいて社会における支配的関係を明言できなくなる場合、文字の並べ方としての「外見」レベルにおいてこそなお当局と闘争し得る場所だと、中野重治は「小説の書けぬ小説家」をもってその一進一退の「表現戦」を演習して見せた。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 「祝う」ことのアイロニーと国家暴力の美学―パロディと間テクスト性から読む津島佑子「半減期を祝って」

名前：　曺栄昡

所属：　Anyang Univ

津島佑子の「半減期を祝って」は、原発事故で放出された放射性物質の「半減期」を「祝う」近未来の日本を舞台に、国家的災厄の爪痕を記念行事として祝うというアイロニカルな状況を風刺的に描き出した作品である。作中では、日本社会における民族的階層構造が露呈し、とりわけ社会的・政治的に周縁化された存在としてのトウホク人への差別の構図が強調されている。それは、近代植民地主義的言説のパロディとして機能する。本作はまた、津島の後期作品との緊密な相互テクスト的関係を有している。「狩りの時代」に登場する「ヒトラーユーゲント」は、本作において「ASD」として変奏され、トウホク人の少年とともに逃亡した末に逮捕され、中絶を強いられるヤマト人の少女の描写は、「蘆舟、飛んだ」において満洲からの引揚げ後に同様の暴力に晒された女性の経験と重ねられている。このように津島は、パロディ、アイロニー、相互テクスト性といった語りの戦略を通して、過去の国家的抑圧や差別が形を変えて現在にも反復されていることを文学的に可視化している。そしてそれによって、自己の批判的な視座を提示し、読者に対して政治的かつ倫理的な問いを投げかけている。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 文学史を欲望する
## -在日朝鮮人文学をめぐる日本の批評言説

名前：　米倉伸哉

所属：　一橋大学

本発表は、「在日朝鮮人文学」というジャンルの定義をめぐる日本の批評家の言説（以下、批評言説）に着目する。1980年代以降、『群像』『世界』などの雑誌、『青丘』などのエスニックメディアで展開してきた、在日朝鮮人文学をめぐる批評言説は、関東大震災時の朝鮮人虐殺、済州島４・３事件など、作品が形象化する民族の集合的記憶を高く評価してきた。今日、在日朝鮮人文学は、日本の植民地支配・現代韓国における国家暴力への批判をとおして、東アジアの脱植民地化を志向する思想的実践として定位されている。他方、「私小説」「短歌」といった日本の伝統的な文学作品の形式に近い作品、政治性が希薄とされた女性たちの作品は批判を受け、「在日朝鮮人文学」の枠組みの埒外に置かれてきた。近年、かつて在日朝鮮人文学史の叙述において軽視されてきた広範な「書き物」を再評価する動きが高まっているが、「在日朝鮮人文学」というジャンルの実定性を基礎づけてきた批評言説の分析は不十分である。そこで本発表は、在日朝鮮人文学をめぐる言説の系譜を詳らかにすることで、日本の批評言説が在日朝鮮人文学に対して抱いてきた欲望の履歴をたどることを目指すものである。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 古典、神典、国典：明治初期における「古典」の転身

名前：　葉宇軒

所属：　東京大学

日本（文）学は如何にして世界文学に参入し得たのか。19世紀から20世紀にかけて、その前提条件としてまず求められたのは、自らの文学の固有の歴史を構築することであった。それによって一つの「主体」となり、世界文学の一員として認められる。「歴史」を語るため、古代の書物、いわば「古典」は不可欠の存在と言える。しかし、古典の本義は極めて限定的であり、元々は「政治秩序の根本に関わる書物」のみを指していた。やがて漢字語としての「古典」は、神典・国典などの様々な変容を経て、東アジアないし世界中のあらゆる「古書」を包括する概念へと転換し、日本（文）学を「世界」と融和させる機能を果たした。従来の「古典」と“classic”の対訳関係に着目した翻訳論的視点とは異なり、本論文は江戸末期を起点に、明治初期に東京大学に設立された古典講習科を到達点とし、近世日本における古典という概念・類別の変遷を考察し、その現在の含意に辿り着けた経緯を明らかにすることを目的とする。「古典」という視座を通じて日本（文）学と世界文学の接触の原点を描き出す試みは、世界文学の中の日本文学を考察する際に、有意義な視点を提供し得ると信じる。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 「泣く」の隠喩・変質・忘却－武者小路実篤『その妹』(1915-1944)における身体的・政治的側面

名前：　譚静秋

所属：　復旦大学

武者小路実篤は『その妹』において、三段階にわたる「泣く」の描写を通じて、主人公・野村広次の目に感情表現機能を保たせつつ、次第に主体性を喪失し、苦境に陥っていく悲劇的な広次像を造形する。その中で、「泣く」は普遍的な精神的共鳴を象徴するが、そこから滲み出る感情主義的傾向は、武者小路自身が戦争経験を有していないという事実を反映する。十四年戦争期に入ると、日本は国際発信力の強化を図り、英訳版『その妹』（『The Sister』）を海外に紹介する。そこで、原作の私的要素が取り除かれ、「泣く」は国際社会に向けた共感を呼びかける役割を果たす。一方、続編『三笑』では、広次が感情の鈍化によって精神的外傷に対抗する防御的メカニズムを自ら築き、「泣く」の忘却を通じて国家の意思に自ら歩み寄る姿が描かれる。このように、『その妹』シリーズにおける「泣く」の隠喩、変質、そして忘却は、作品に内在する構造的欠陥、即ち集団的責任への持続的な遮蔽を反映し、武者小路をはじめとする知識人らの国家権力に対する戦略的な無視を浮かび上がらせ、さらに感情表現によって、理性に基づく判断を覆い隠そうとする知識人の創作姿勢をも露呈する。

[個人発表]

⑩「世界文学」の中の日本文学

# 戦時期台湾における私小説言説とリアリズム
## ：浜田隼雄「甘井君の私小説」をめぐって

名前：　邱政芃

所属：　東京大学

本発表は、在台日本人作家・浜田隼雄（1909－1973）の小説「甘井君の私小説」（1942・10）の読解を通して、戦時期の植民地台湾における私小説言説の一様態を解明するとともに、在台日本人作家のリアリズムの意味を検討する。「甘井君の私小説」は台湾文壇の批評ブームの中に生まれたメタフィクション的な風刺小説で、私小説が書けない在台二世の日本人作家・甘井君の生活を滑稽に描き出す。私小説は、1930年代の日本批評界では近代化の歪みと見なされる一方、戦時下台湾では、植民地同化の言説と絡み合い近代性の象徴と称揚されてもいた。本作は、私小説的な読みを触発しながら、台湾文壇を舞台にこの両義性を表現し、中央と植民地文壇の力関係、さらにそのリアリズムの受容関係とズレを示している。この両義性を解明するために、まず、1942年に批評が問題化された台湾の文壇状況を整理し、作中の私小説表象と、作家の私小説理解を踏まえ、浜田における私小説論の受容を検討する。次に、主人公が私小説を「書けない」ことに着目し、在台日本人作家が直面するジレンマの内実を分析する。その上で、在台日本人作家の両義的なリアリズムを再考する。

[個人発表]

⑪ 東アジアにおける経済、資本、国家

# 都市衛生インフラと空間的選別の構造
# ：大阪市と上海公共租界の比較研究

名前 ： 梁昕怡

所属 ： 東京外国語大学

近代都市において、屎尿処理の制度化は都市公衆衛生の基盤を成す重要な要素であった。本発表では、20世紀初頭の大阪市と上海公共租界を比較事例とし、屎尿処理制度の整備過程に内在した都市空間編成のメカニズムを再検討する。大阪市では、急激な人口増加とコレラ流行を契機に屎尿処理の市営化が模索されたが、財政的制約や地域間の衛生観念の差異などの要因が障壁となった。一方、上海公共租界では、工部局主導による処理制度の構築が進められたが、その対象は欧米人居住区に限定され、華人地域は依然として伝統的な桶運搬方式に依存した。こうした制度的区分により、屎尿処理をめぐる空間的・民族的な衛生格差が固定化された点に注目する。本発表では、大阪市会会議録や上海工部局年報・会議録等の一次史料に基づく実証的分析を通じて、両都市における屎尿処理制度の形成過程を比較し、制度化が都市空間における「選別」をいかに生み出したのかを明らかにする。これにより、植民地的統治と自治的都市行政という異なる政治空間におけるインフラ整備のあり方を比較検証し、近代都市における社会的包摂／排除の構造的メカニズムを再考する。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 満州事変後における国際連盟の対日経済封鎖問題と日中外交の攻防(1931-1933)

名前： 盧美奐

所属： 南京大学

満州事変後、国際連盟規約第十六条に基づく対日経済封鎖の可否をめぐる問題は、日中両国の外交攻防における争点の一つとなった。国民政府は経済封鎖を国難救済の外交戦略と位置付け、国際的介入を促すことで、最終的に対日制裁を発動させようと試みた。一方日本側では、輿論は経済封鎖が非現実的であると考え、封鎖対応能力への自信を表明したが、外務省が日中間の問題を第十一条の枠組み内に留め、「手続きの正当性」「上海問題と満州問題の分離」などの戦術を駆使して第十六条の発動を阻止しようとした。リットン調査団報告書の公表後、中国外交部は国際連盟の制裁メカニズムを活用して日本の侵略を阻止しようとしたが、国際連盟自体の無力さ、国際社会の宥和的姿勢により、中国輿論は経済封鎖が実施される可能性を悲観的に考えた。蒋介石は対日断交を断念することにより、対日経済封鎖の議論の休止符が打たれた。日本が経済封鎖への楽観的見解を維持し、最終的に国際連盟脱退を決断した背景には、自国の経済的自立性への過信が反映されている。日本の国連脱退は単に経済制裁への対応にとどまらず、輿論によるナショナリズムの高揚からの影響も大きかったと考えられる。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 「田中角栄」をフィールドワークするー1980年代日本政治における中央-地方関係の再審ー

名前：　田中駿介

所属：　東京大学

本報告の目的は、高畠通敏『地方の王国』に描かれた新潟3区のフィールドワークを再読し、その企画・取材に携わった元新聞記者への発表者が行ったインタビューから、田中角栄が築いた後援会組織「越山会」の組織構造や地域社会とのかかわり合いを改めて検討することである。　同書は全国各地に形成された保守王国や革新自治体の実態を政治学者の視点からルポルタージュ的手法で描かれている。その冒頭と結末部で取り上げられた新潟3区は、田中角栄と越山会の政治支配が典型的に機能した地域であり、公共事業を呼び込むことで住民に具体的な便益をもたらす“開発型政治”が展開されたとされる。高畠は、行き過ぎた利益誘導や金権体質への批判にとどまらず、国内での低開発地域の残存を「南北問題」との類似構造として指摘しており、それ自体が興味深い。しかし当時の取材過程や編集方針については、『地方の王国』本文だけでは十分に知り得ない側面も多いだろう。　本報告では、そうした議論を踏まえつつ、高畠の政治学方法論的特徴や、市民運動家としての一面が、その地方政治の実証手法といかなる関わりを持ったかについてについても検討していきたい。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 1960年代日本の東南アジア開発構想における地域概念の再編

名前：　范艷芬

所属：　華南師範大学

本研究は、日本外務省において、東南アジア開発閣僚会議や農業開発会議の参加国、ならびに農業開発基金の運用範囲をめぐる政策調整の過程を跡づけ、「東南アジア」という地域概念がビルマ以東・フィリピン以西へと限定されていった実態を明らかにするものである。吉田茂内閣以来、日本政府は「東南アジア」を南アジアや極東の一部を含む広域的概念として捉えていたが、1960年代半ばのベトナム戦争の激化を契機に、米国からの地域責任分担の要請に応じ、より精緻な地域戦略が求められるようになり、日本独自の開発構想とともにその再定義が進められていった。こうした地域区分の見直しの背景として、先行研究では経済的制約や反共色彩の抑制が指摘されてきたが、本研究はそれに加え、当該地域内における連帯意識の高まりが日本の地域戦略に大きな影響を及ぼしたことを主張する。この地域的アイデンティティの自覚こそが、日本の東南アジア外交の方向性を決定づける重要な契機となったのである。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 第一次世界大戦後の東アジア国際秩序の変容過程における「勢力範囲問題」と日本の対応

名前：　FENG　JUWEI

所属：　南開大学

第一次世界大戦終結の前夜、アメリカが「勢力範囲の廃止」などの目標を掲げ、各国の外交交渉を引き起こした。ワシントン会議において、各国は勢力範囲の分割を追求しないことを宣言し、これにより東アジア国際新秩序の枠組みが確立された。本稿では「勢力範囲問題」の処理過程を事例として、第一次世界大戦後の東アジア国際秩序の変容と日本の対応を探究し、以下結論に至った。１、日本外務省は、新秩序が多大な商業利益をもたらす可能性を認識しており、そのため一定の特権を放棄したものの、満蒙権益の維持をあくまで要求した。２、アメリカの主張は、列強による中国市場の独占を打破し、協調的な競争を確立することを目的としたものであった。日本は、それが経済的特権にのみ関わるものであり、満蒙における政治的特権を脅かすものではないと認識したため、協調体制に参加することにした。３、日本は、新四国借款団への加入に伴い満蒙の優先借款権を失ったものの、租借地や鉄道などの既得権益を維持することができた。東アジア国際新秩序に内在する矛盾は、勢力範囲の負の影響を根絶することを困難にするだけでなく、後に満蒙権益を拡大するための空間をも日本に与えた。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 「朝鮮策略」から見る黄遵憲の外交思想
## ―中華世界秩序から勢力均衡へ―

名前：　蘇文博

所属：　国際日本文化研究センター

近代に至るまで東アジアの国際関係は、「冊封・朝貢」体制によって維持されてきた。李氏朝鮮王朝は清朝の冊封を受ける「属国」として位置づけられ、形式的な宗主・属国関係を結んでいた。19世紀半ば以降、西欧列強の進出と清朝の弱体化によりこの伝統的秩序は揺らぎ始め、アヘン戦争後には清朝が不平等の条約体制に組み込まれていった。そうした中、日本は1868年からの明治維新によって近代国家への転換を図り、清朝や朝鮮との関係を再構築しようとする。一方、朝鮮も「鎖国政策」を維持しつつも、内外の圧力に直面していた。やがて明治日本と李氏朝鮮の関係は江華島事件（1875）を契機に変化し、「日朝修好条規」（1876）の締結によって朝鮮の開国が強いられることとなった。本稿の目的は、このような19世紀後半の東アジア国際環境の激変期において、清朝の外交官・黄遵憲（1848－1905）が著した「朝鮮策略」に着目し、その外交思想を分析することである。特に、黄遵憲の提唱した朝鮮外交方針「親中・結日・連米・防露」が、伝統的な中華世界秩序の論理から、いかに近代的な勢力均衡論の発想へと転換するものであったかを明らかにしたい。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# 日韓両国間の地方創生をめぐる政策波及に関する試論
## ー地方への移住促進政策を事例に

名前：　伊藤将人

所属：　国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

2010年代半ば、日本において国家主導で始まった地方創生（まち・ひと・しごと創生）政策と、その引き金となった事例には、その後、韓国や台湾へと政策波及（policy deffusion）した。特に韓国においては、その後、日本を参考にした地方消滅対策が活発に展開された。しかし、地方創生の開始から10年が経つ現在も、なぜ、誰によって、どのように、いつ、いかなる構造と背景の下、政策が波及したのかは十分に明らかにされていない。そこで本研究では、今後、東アジアにおける地方創生政策の波及を本格的に研究していくための試論として、日本における地方創生における基本目標の一つを構成し、韓国でも積極的に展開されている地方への移住促進という政策アプローチを軸に分析を行った。分析の結果、低い出生率や人材不足、人口の首都一極集中と地方部の深刻化な過疎化という社会的・経済的背景の類似性が波及を生じやすくさせた可能性があること、韓国雇用情報院の研究員によって書かれた論考が韓国における地方消滅をめぐる議論と、その後の移住促進を推し進める契機の一つとなったことが示唆された。

[個人発表]

⑫ 東アジアの政治と国際関係

# ハワイの領事裁判権放棄と日本の条約改正：その余波と影響

名前：　呉舒平

所属：　京都大学

1893年1月18日、在日本ハワイ弁理公使ロバート・ウォーカー・アーウィンからハワイの領事裁判権放棄に関する照会が日本政府に届いた。当時、ハワイ事変でリリウオカラニ女王が退位を迫られ、同照会はハワイ王政府の最後に発せられた訓令の下で作成されたものであった。これを受け、日本政府は1年後の1894年春に返答し、当時日本の念願であった条約改正に応じた見返りとして、日本において居留地以外の内地でも自由に居住・旅行できる権利をハワイ人に認めた。日墨修好通商条約に次いで日本の平等条約の2例目となった。また、日本が条約を「改正」した最初の事例でもあった。一方で、同時期に対外硬運動が盛んになっていった。同運動で内地開放に反対する「現行条約励行」という主張が唱えられていた。こういった背景にもかかわらず、日本政府はハワイに内地開放に踏み切った。こうして、本研究では、ハワイの領事裁判権放棄をめぐる政治過程を考察し、日本へのその影響を検討する。

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# アジアを動かす物語の力：中日韓における アニメ・ゲームのメディアミックス戦略とソフトパワー

名前：　LI YUANSHENG

所属：　Sun Yat-sen University

本研究は、中国・日本・韓国におけるアニメ・ゲーム産業のメディアミックス戦略を比較し、それぞれの国がいかに自国のソフトパワーを強化し、互いにどのような影響を与え合っているかを考察するものである。日本は1990年代以降、「クールジャパン」政策のもとでアニメ・ゲームを核とする文化輸出を進め、世界的な影響力を確立してきた。韓国はK-POPとの連動やWebtoon、モバイルゲームを活用したクロスメディア展開を加速させている。一方、中国は国家主導でコンテンツ産業を育成しつつ、文化政策との調和を重視しながらグローバル市場への進出を図っている。本研究では、各国の戦略の特徴と課題を整理し、ソフトパワーの観点からメディアミックスの可能性と限界を明らかにする。さらに、互いに影響を受け合う文化的共振を通じた三国間の動態に注目し、「アジアン・ストーリーテリング」の可能性と地域的な協力の方向性についても示唆を与えたい。

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# 越境する想像力：冷戦期「自由アジア」における合作映画と文化的交渉

名前：　韓瑩

所属：　東京大学

アジア映画祭は、東南アジア映画製作者連盟が主催し、1954年に東京で創設された国際映画祭である。冷戦構造下において、この映画祭は「自由アジア」イデオロギーを強化する装置として機能した一方で、アジア映画産業のネットワーク構築の場としても重要な役割を果たした。このネットワークを基盤として、香港と日本、香港と韓国、韓国と台湾、日本と台湾といった連携により、数多くの合作映画が製作された。合作映画は、異なる映画資本が生み出す表象装置であり、各国のアイデンティティを保持し、双方に通底する価値観・情感・思想的基盤を追求するトランスナショナルな映画実践である。さらに、テレビ普及と、ハリウッドの世界的支配という歴史的な文脈を考慮すれば、合作映画はこれらの構造的危機に対抗するための戦略的選択であったと言える。冷戦期「自由アジア」における合作映画の全体像が十分に解明されていないという先行研究の問題を踏まえ、本研究では、一次資料を徹底的に調査・分析することで、合作映画の製作背景や受容状況を踏まえた作品個別の分析を行う。これらの分析を通じて、冷戦期「自由アジア」の文化的交渉に関する新たな知見を提示する。

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# 日本における「第一次韓流ブーム」下のテレビドラマ領域での日韓合作

名前：　石俊彦

所属：　東北大学大学院

日本の韓流において、『冬のソナタ』や『愛の不時着』などの韓国ドラマは不可欠な存在であり、第一次および第四次韓流ブームの発生と強く連関し、社会的影響力を示した。こうした韓国ドラマの存在感は視聴者層にとどまらず、制作分野にも浸透している。「第一次韓流ブーム」以前に人気を博した『フレンズ』などの日韓合作ドラマに加え、韓流現象の進展に伴い『天国の樹』をはじめとする一連の作品も制作・放送された。これは韓流が日韓合作ドラマに影響を与えた可能性を示唆している。そこで、本研究では、「第一次韓流ブーム」が合作ドラマにどのような影響をもたらしたか、具体的にいかなる側面に作用したかを明らかにすることを目的とする。　本研究は日本における「第一次韓流ブーム」前後の日韓合作ドラマに着目し、2002-2006年に放送された『フレンズ』『ソナギ～雨上がりの殺意』『STAR'S　ECHO～あなたに逢いたくて～』『輪舞曲-ロンド-』『天国の樹』を分析対象とする。作品内容および制作・放送背景の考察を通じて、「第一次韓流ブーム」という社会現象が日韓合作ドラマの制作動向に与えた影響を実証的に解明する。

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# 「文化交流」と戦争－日中戦争下における国際文化振興会の対「中国」事業を事例に

名前：　金子聖仁

所属：　東京大学

本報告は、外務省所管の財団法人・国際文化振興会（以下KBS）による対中国文化事業の展開を事例として、日中戦争下における「文化交流」という言説の形成過程およびその政治的機能の解明を目的とする。KBSは当初、主に対欧米向けの日本文化発信を担う機関として、1934年に設立された。対中国向けには外務省主管の「対支文化事業」が別に存在し、日中戦争勃発後の占領地における文化工作等も主に同事業の枠組みで処置された。しかし、1940年の汪精衛政権樹立および同政権の文化機関である中日文化協会の設立を契機に、KBSは同協会の日本側カウンターパートとして、日本文学者の南京派遣や上海資料室の設置等の対「中国」事業を開始した。その際、日本文化を一方向的に発信するのではなく、中国を別個の文化的主体と見なした上で双方向的な「文化交流」を行うという言説が強調された。無論、そうした「交流」は日本が傀儡として樹立した「親日」的な主体とのみ成立したのであり、重慶政府とは戦争が継続された。本報告では如上の「文化交流」と戦争をめぐる問題構造について、KBS内部文書や外務省記録、関係者らによる同時代文献を手がかりに分析する。

[個人発表]

⑭ 東アジアの文化交流とアイデンティティ：韓流、文化パワー、そして相互影響

# 宝塚歌劇にみる国家プロパガンダ――満州進出をめぐって

名前：　張嘉慧

所属：　神戸大学

本発表は、『光は東方より』をはじめとする、1938年から1941年にかけて宝塚大劇場で上演された満州を舞台とする5作品を対象とし、宝塚歌劇における満洲表象とプロパガンダ機能を分析するものである。これらの作品は「大東亜共栄圏」や「協和」といった国家イデオロギーのもとで制作され、戦時下の日本においてプロパガンダの一翼を担ったと考えられる。本研究では、当時の政治状況との関係を踏まえつつ、脚本・楽譜などの一次資料に基づき、ナラティブおよび表象分析を行う。特に注目すべきは、西洋音楽を基調とするレビュー形式が用いられている点である。これらの作品に描かれる満洲は、日本的なエキゾチシズムに加え、フランス経由のオリエンタリズムも内包する「二重の他者」として表象されていた。さらに、この二重の視点を踏まえ、これらの作品においてはナラティブ上、五族協和の理想や日本の統治正当性が物語化されていたことが読み取れる。こうした分析は、従来の宝塚研究に対し、戦時プロパガンダの比較地域的・比較文化的視点を導入する試みであり、東アジアにおける文化的摩擦や共存をめぐる歴史的回路の再考にもつながると期待される。

■ 日時 : 2025年10月31日(金)-11月02日(日)

■ 場所 : 翰林大学校 国際会議室、生命科学館、自然科學館

■ 主催 : 東アジア日本研究者協議会, 翰林大学校クローバル協力大学院

■ 後援 : 翰林大学校、春川市、韓国観光公事

■ 助成 : 独立行政法人国際交流基金, 公益財團法人東芝国際交流財団